

# JOURNAL

## 東京迂回路研究

②

多様性と境界に関する対話と表現の研究 所×東京アートポイント計画

本冊子「JOURNAL 東京迂回路研究 2」は、  
「迂回路をさぐる」旅路で出会い、  
対話し、考え、見出したことを  
表すことを目的に制作した記録集の第2巻です。  
今年度は「迂回路をさぐる」ことに加え、  
「迂回路をつなぐ」という、旅するなかで出会った人々の言葉を  
運び、伝え、新たな回路が生まれる種をまくような作業も始まりました。  
道と道がつながること。  
それは、これまでたどり着くことができなかった光景をみることをも、  
可能にするかもしれません。  
本冊子を手にとったすべての人にとってこの記録が、  
私たちと共に、あなた自身の「迂回路をさぐる」  
そして、「迂回路をつなぐ」きっかけとなれば幸いです。

**JOURNAL**  
**東京迂回路研究**

**2**

# 東京迂回路研究

撮影 齋藤陽道





最初、彼らは生後2ヶ月の生命体にむかって、  
近づくでもなく遠ざかるでもなく、遠目から見つめていた。  
やがて、ふんふんと鼻を近づけたり、羽根を広げたり、  
じりじりとにじりよったり、おのおの方法で節度を保ちながら  
生命体と向き合っていた。

もちろん、このあいだ言葉はない。  
しかし、対話だと思った。

かれらの向き合い方を見るにつれて、  
あたりまえのことでありながら  
ぼくらがすっかり忘れ去っている  
対話の作法がそこにある予感がしてならない。

齋藤陽道



## 齋藤陽道

さいとう はるみち

1983年東京都生まれ。石神井ろう学校卒業。

2010年第33回キャンノン写真新世紀優秀賞受賞。

主な個展に『宝物』(2014年、ワタリウム美術館)、

写真集に『感動』(2011年、赤々舎)、『宝箱』(2014年、

ぴあ)、『写訳 春と修羅』(2015年、ナナロク社)など。

障害者プロレス団体「ドッグレッグス」にも所属。

"陽ノ道"としてリングにあがっている。

---

多様性と境界。あちら側とこちら側に、  
引き、引かれる、無数の境界線の海のなかで、  
私たちはいかにして他者と向き合い  
「対話」することができるのか。  
そしてそのことは何を可能にするのか。  
東京迂回路研究が今年1年間を通じて  
向き合ってきた問い、「対話は可能か?」。  
写真家の齋藤陽道もまた、その問いに応え、  
自らの日常と、そこにある「対話」を切り取った。

彼が、9月の筆談対談で描いた文字が、  
写真と共鳴して、目に焼き付く。  
「ただ存在すること。  
そのこと自体がもうすでに声なんだ、  
ということを感じたいんです」――

東京迂回路研究、2年目の旅路へ。

# もくじ

---

東京迂回路研究 撮影 齋藤陽道 — 03

はじめに — 10

## 論考

研究デザイン:「迂回路」をさぐり、つなぐ方法——「対話型実践研究」を問い直す — 12

三宅博子、長津結一郎、井尻貴子、石橋鼓太郎

---

## ① フォーラム「対話は可能か？」

### 論考

共に生きるということを体感し、そのありようについて考える — 18

——フォーラム「対話は可能か？」を検証する

長津結一郎、三宅博子、井尻貴子、石橋鼓太郎

### レポート

① 前夜祭「幻聴妄想かるた」大会 A 「妄想」が誘発するもの 長津結一郎 — 28

B わかりあえる入口に立つ 東濃誠 — 31

② トークセッション「共に生きるということ」 A 異なるままに、それでも、共に 井尻貴子 — 34

B 「境界」と「共に生きる」 岩田祐佳梨 — 38

③ ライブ「Living Together × 東京迂回路研究」 A 「言葉」を「聴く」こと 石橋鼓太郎 — 41

B 境界を愛するということ 岩川ありさ — 44

④ シンポジウム「対話は可能か？」 A 言葉の終わるところで交わされる「ことば」 三宅博子 — 48

B 対話と境界線の線の上に想いを馳せること 沼田里衣 — 52

---

## ② もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編・分析編

### 論考

「もやもやフィールドワーク」を振り返って — 58

三宅博子、井尻貴子、長津結一郎、石橋鼓太郎

### 調査ノート

① 当事者研究全国交流大会／べてるまつり 石橋鼓太郎 — 60

② 田んぼdeミュージカル 三宅博子 — 62

③ 国際基督教大学ジェンダー研究センター「ふわカフェ」 長津結一郎 — 64

④ 立石ディスコ・アフタヌーン 石橋鼓太郎 — 66

---

おわりに — 78

巻末資料 平成27年度実施事業 — 80

附録 研究所日誌から — 83

TOKYO DIVERSION RESEARCH [English Section] — 94

## はじめに

多様性と境界に関する対話と表現の研究所

「社会における人々の〈多様性〉と〈境界〉に関する諸問題に対し、調査・研究・対話を通じて、“生き抜くための技法”としての〈迂回路〉を探求する」——このように述べ、始まった「東京迂回路研究」も、2年目を終えようとしている。こうした諸問題に対し、ますます注目が集まる昨今、そこにある対話や表現の様相を、「迂回路」という言葉と共にさぐり、つなぐことを試みた1年間であった。

特に今年度は嬉しい展開が続いた。いくつかのメディア等で活動が紹介されたことで、東京迂回路研究に対する知名度や注目度が上がってきたように思われる瞬間が多くあった。また、インターンとしてスタッフが増員したことで、新たに得た視点や経験が、活動のエンジンとなっていった。9月に実施したフォーラム「対話は可能か？」ではスタッフをさらに増員し、多くのボランティアスタッフの力をお借りした。彼ら、彼女らは、私たちの活動とすでに何らかの接点を持っており、いちばん身近な支援者となってくださった。また、ゲストや参加者らが、そこでの出会いから新たな活動やつながりを生み出しているということも、私たちにとっては大きな喜びであった。そうした活動のなかで感じ、考えてきたことを綴ることを目指し、本書は編纂されている。

本書は「東京迂回路研究」という写真作品で幕を開ける。写真家・齋藤陽道による、「対話は可能か？」という問いへの応答がここには現れている。本文は、大きく2章に分かれるが、その前に論考『「迂回路」をさぐり、つなぐ方法——「対話型実践研究」を問い直す』をおき、今年度、私たちがどのような意図のもと事業を展開してきたのか、研究デザインについて述べる。

1章では、フォーラム「対話は可能か？」について考える。論考『共

に生きるということを手感し、そのありようについて考える——フォーラム「対話は可能か？」を検証する』では、実践研究として行ったこの取り組みを振り返り、「対話」の形式や機能に着目し検証する。かるた大会、トークセッション、ライブ、対話の場、シンポジウムと多岐にわたるプログラムを「対話」という視点から改めて見ることで、「対話は可能か？」という問いについて今いちど考えることを目的としている。続くレポートは、フォーラムで実施した各プログラムについてのレポートである。内外からの視点を盛り込むことを意図し、一つのプログラムにつき、研究員、参加者がそれぞれレポートを執筆した。

2章では、「もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編・分析編」について考える。論考『もやもやフィールドワークを振り返って』では、今年度実施した「もやもやフィールドワーク」について、それはどのような試みだったのかを思考する。特に、分析編という場でなされた議論、得られた視点を丁寧に振り返り、これを私たちはどうつないでいくことができるのか検討する。ここが、対話型実践研究が次に取り組む課題であると考えている。また調査の一部を調査ノートとして掲載する。

附録として、今年度ウェブサイトにて、研究員が週1回発信してきた「研究所日誌：週報」から9本を収録した。論考といったかたちをとる前の、日々の動き、そこでの思考の一端を感じていただければ幸いである。

1年を終え、次なる旅路へと向かうための里程標が、本書である。今年度は、前述の「研究所日誌」をはじめとして、言葉にし、残すことを意識してきた。その蓄積を踏まえながら、さらに問いを深化させ、様々な立場の人々と共に考え、対話する場を、今後も継続的にひらいていきたい。

## 論考

# 研究デザイン：「迂回路」をさぐり、つなぐ方法

——「対話型実践研究」を問い直す

三宅博子、長津結一郎、井尻貴子、石橋鼓太郎

## 1 はじめに

「対話型実践研究」とは、“研究型”アートプロジェクト「東京迂回路研究」の実施にあたり、主要な研究手法として考案した枠組みである。「多様性」と「境界」をめぐる様々な現場から浮かび上がる問いを、今の社会に生きる私たち自身の問題として共有し、現場と現場、現場と非-現場をつなぎ、新たな芸術的・社会的文脈を創出するための方法論として、試行錯誤しながら検討してきた。

プロジェクトも2年目を迎え、事業内容が深化し、拡がりをもつにつれ、対話型実践研究という枠組みもまた、変化してきた。なかでも重要な変化は、対話型実践研究の位置づけを、これまで具体的な調査先に対する研究の手法として考えていたところから、プロジェクト全体の方向性を指し示す概念的枠組みとして、改めて捉え直した点だ。つまり、「東京迂回路研究」の事業全体を通して対話型実践研究を行おうと考えたのである。

そこで本稿では、対話型実践研究としての「東京迂回路研究」というプロジェクト全体を振り返り、今年度「迂回路をさぐる」そして「迂回路をつなぐ」をテーマとして掲げ、私たちが試み

てきたことを明らかにする。まず、今年度の事業の枠組みと、昨年度からの変化を概観する。そして、2年目を終えようとしている今、見えてきたことについて考える。

## 2 概要と今年度のテーマ

### 概要

「東京迂回路研究」は、平成26年度より開始した、複数年にわたるプロジェクトである。2年目となる今年度は、昨年に引き続き“生き抜くための技法”としての「迂回路」をさぐると共に、見出した「迂回路」をつなぐことを目指した。そこで、「迂回路」をさぐる事業として①調査研究「もやもやフィールドワーク」、「迂回路」をつなぐ事業として②実践研究「東京迂回路研究フォーラム：対話は可能か?」、「東京迂回路研究」の取り組みを広く発信する事業として③成果の発表「JOURNAL 東京迂回路研究2」と情報発信（ウェブサイト）、という3つの事業を実施した。

### 各事業の詳細

#### ①調査研究「もやもやフィールドワーク」

「もやもやフィールドワーク」は、以下の3つ

のセッションからなる、調査研究である。東京都および日本国内の、医療・福祉施設、当事者団体、ケアに関わる団体等を訪問し、活動の参与観察や関係者への聞き取りを行う(a)調査編、調査で得られた見解や視点を参加者と共有し、共に話し合い考える(b)報告と対話編、研究者をゲストに招き、理論的・方法論的な視座から考察を深める(c)分析編。

(a)調査編：東京都および日本国内において、多様性と境界に関する対話と表現に関わる活動を行っていると思われる団体や活動現場へ赴き、関係者への聞き取り調査や短期フィールドワークを行う。インタビューを行う際は、非構造化インタビューによる質的調査を行っている。調査対象は、障害、ケア、労働、住居、ジェンダー・セクシュアリティ、都市と地方などを含む、幅広い対象領域から選定している。今年度は7件の調査を実施した。

(b)報告と対話編：調査の報告と、報告に基づいたテーマ設定による対話を行い、「多様性」と「境界」に関わる活動とそれをめぐる状況への考察を深める。各回のプログラムでは、研究員による約1時間の調査報告の後、参加者全員による対話を約1時間行っている。対話では、「哲学カフェ」と呼ばれる手法を用い、その場に集まった人たちが、進行役のもと、〈話す-聴く〉を丁寧積み重ねてじっくり考える場をひらくことを意図している。計4回開催した。

(c)分析編：既存の言説や状況を問い直す研究者をゲストコメンテーターに招き、研究員の発表とそれに対するコメント、参加者全員によるディスカッションを通じて、「調査編」や「報告と対話編」で得た実践知を理論と接続することがいかにして可能かを検討する。計4回実施した。

#### ②実践研究

東京迂回路研究フォーラム「対話は可能か?」

「対話は可能か?」をテーマに、「幻聴妄想かるた」大会や、介護士、詩人、研究者、写真家、美術家、プロジェクトディレクター、“おばちゃん”らによるトークセッション、対談、ライブなどを通じ、今この社会にある私たちが、共に生きるということを体感し、そのありようについて考えることを目的としたフォーラム。ゲストには、これまで「もやもやフィールドワーク 調査編」などを機に出会ってきた人を中心に、多様な分野から「対話」をキーワードに活動している人をお呼びし、プログラムを通し、様々な「迂回路をつなぐ」ことを試みた。平成27年9月4日～6日の、3日間にわたり開催した。内容詳細については、本冊子収録のフォーラムレポートを、その検証については論考『共に生きるということを体感し、そのありようについて考える——フォーラム「対話は可能か?」を検証する』を参照のこと。

#### ③成果の発表と情報発信

##### (a) ジャーナル「東京迂回路研究2」

年1回発行しているジャーナルの第2号(本冊子)。2年間の活動を経て、少しずつ変化してきた「対話型実践研究」のありようを改めて考えること、および、今年度1年間かけて取り組んできた問い「対話は可能か?」へ応えることを試みた。

また、「対話は可能か?」という問いに対する応答としての写真作品や、研究員と参加者が同じプログラムについてそれぞれ執筆したフォーラムレポートを掲載したりするなど、前号に続き本号においても多声的な紙面構成を意識した。

##### (b) WEBによる情報発信

昨年度に引き続き、各プログラムの開催レポートを随時掲載。プログラムに参加できない人にも、事業内容やその雰囲気伝えることを意図した。また、毎週1本、研究員によるコラムを発信する「研究所日誌:週報」をスタート。日常の出来事や、そこでの問題意識、思考などを記録し、共有することを意識した。

## 今年度のテーマ設定

今年度、事業全体を貫くキーワードとなったのが「対話」である。この言葉は、昨年度1年間をかけて取り組んできた「もやもやフィールドワーク」を通じて浮上したものだ。プロジェクト開始当初、「調査編」でのインタビュー項目をあらかじめ決めず、会話のなかで問いを発展させていく形式をとることや、研究の枠組みに「報告と対話編」というプロセスを設け、立場や意見の異なる参加者へと対話の場をひらくことで、対話を試みようとした。しかし、プロジェクトが進むにつれて、調査先との折衝から最終的なアーカイブまでを一連の対話の過程と捉えるようになっていった。また、調査先で、必ずしも言語による会話やコミュニケーションに限らない様々な対話のありように触れるにつれ、改めて、対話とは何か、という問いが浮かび上がってきた。では、この問いに、どのように応えることができるのか。私たちは、「迂回路をさぐる」こと、そして「迂回路をつなぐ」ことを

通じて、そのことに応答するために様々な試みを行ってきた。

## 3 迂回路をさぐる： もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編・分析編

調査研究「もやもやフィールドワーク」は、昨年度から継続している事業である。調査編では、引き続き都内を中心に様々な場所に赴きながら、調査先とのやりとりや現場の経験の振り返りを丁寧に積み重ねてきた。また、昨年度よりも調査先一つずつに回数や時間をかけて臨んできた。報告と対話編は、昨年度から引き続いて開催し、調査してきた事例について参加者と共有し、そこから見出された普遍的な問いを共に深め合う時間を構築してきた。また、新たに「分析編」を設けた。これは当初、「もやもやフィールドワーク」の調査で得られた知見を、どのように研究的視点で見つめることができるかを検討するも

のとして位置づけていた。しかしその位置づけは徐々に、「東京迂回路研究」の取り組み全体を研究的視点から検討し、「東京迂回路研究」の根幹となるような概念を精査する場となった。

「もやもやフィールドワーク」全体についての詳細な考察は、論考『「もやもやフィールドワーク」を振り返って』を参照されたい。そのうえで、研究デザインという観点から振り返ると、この1年間の経験を通じて、私たちが「迂回路をさぐる」ために取ってきた方法、すなわち研究のデザインが、少しずつ変化してきたように思われる。これまでは、事例に対して調査を行い、それらを研究者が単一的な視点からまとめるのではなく、中間報告のようなかたちで報告を行い、それについて多くの人々と対話し、さらにその事例について分析的な枠組みを検討する、という一連のプロセスを想定していた。しかし前述のとおり、分析編においては、必ずしも個々の現場についてだけでなく、東京迂回路研究という取り組み全体が指すものについての議論が、非常に重要な役割を果たしているように思われた。言い換えると、私たちは、個別具体的な現場としての調査先に対して、より広い視点で捉えるために、異なる学術的視点や複数の現場経験との対話を行おうとしてきたのである。

フォーラムについての検証は、論考『共に生きるということを体感し、そのありようについて考える——フォーラム「対話は可能か？」を検証する』を参照されたい。

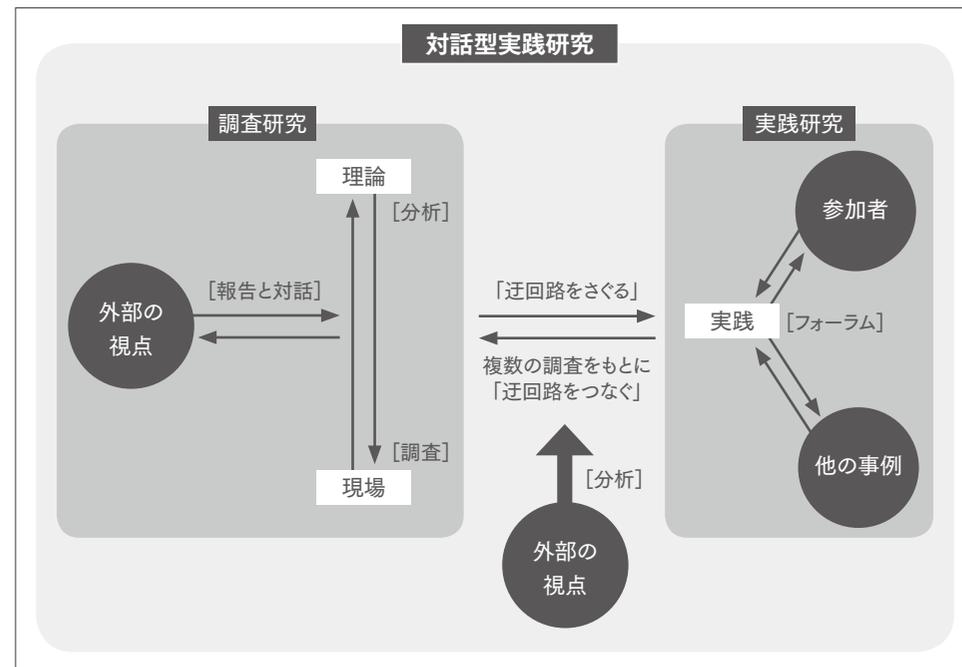
ここでは、研究デザインという視点から、このフォーラムを実施する一連のプロセスを、「実践研究」と名づけたことについて述べておきたい。私たちは、これまでの研究で見出してきた「迂回路」をつなぐ実践を自ら行うことで、そこで起こることについて考察を深めるという、一つの事例研究のような視点が得られるのではないかと考えた。それは、「迂回路をつなぐ」という実践を通して自らを研究するという視点である。実践研究それ自体が、「もやもやフィールドワーク」を通じて捉えてきた「迂回路」を、より広い視点で振り返る作業であり、同時に個々の事例を具体的につなぐ実験でもある。そうした場をつくることで、新たな「迂回路」を社会に生み出すこともできるのではないかと考えた。結果として、ここで初めて出会った人同士が新たな企画を立ち上げるなどの事例が見られた。このことは、新たな「迂回路」の萌芽が生み出されていたことを示唆すると思われる。

## 5 対話型実践研究の研究デザイン

この経験を踏まえ私たちは、「対話型実践研究」という枠組みをより広く、「東京迂回路研究」の事業全体を通じて行うものとして位置づけ直すこととなった。調査研究では、調査、報告、対話、分析を通じて「迂回路をさぐる」。そして実践研究では、そうした調査研究を通じた個々の実践の出会いによって「迂回路をつなぐ」。こうして、調査研究と実践研究が連関していくプロセス全体を「対話型実践研究」とすることによって、私たちは、これまでに見出してきた「迂回路」のありようをさらに深く問うと共に、広く社会へと問いを発信することを目指している。

## 4 迂回路をつなぐ： フォーラム「対話は可能か？」

今年度の新規事業として、フォーラム「対話は可能か？」を実施し、対話の問いを広くひらき発信することを試みた。これは、「対話は可能か？」という、研究の過程で生まれた問いが出発点になっている。この問いを検討するための一つの方法として、私たちはフォーラムというかたちで実践を行うこととした。それぞれの実践に埋まっている「迂回路」を掘り起こし、異なる実践を出会わせることで何が起こるかを実験し、発信する場を設けたのである。そして、事後に「対話は可能か？」という問いについて改めて振り返り、検証することにした。この





## フォーラム 「対話は可能か？」

2015年9月4日～6日に開催したフォーラム「対話は可能か？」。あの場に身をおいた人は何を感じ、思考したのか。論考に続いて、各プログラムについて研究員と参加者それぞれのレポートを交互に掲載し、フォーラムを多様な視点から振り返る。

# 共に生きるということを体感し、 そのありようについて考える

——フォーラム「対話は可能か?」を検証する

長津結一郎、三宅博子、井尻貴子、石橋鼓太郎

## 1 はじめに

本論は、2015年9月4日～6日に開催した東京迂回路研究フォーラム「対話は可能か?」(以下、フォーラム)を振り返り、「対話」というキーワードを軸にしながらその様相について検証したものである。最初にフォーラムの目指したものに触れ、次に対話の形式と、対話をもたらす機能について検討し、最後に「対話は可能か?」という問いに戻って論じたい。

## 2 フォーラムの目指したもの

まずは、私たちが「対話は可能か?」というテーマにたどり着くまでに考えてきたことについて、フォーラムでの配付資料として作成したテキストに基づいて述べていきたい。

テキスト『フォーラム「対話は可能か?」によって』では、以下のように述べられている。

よく、社会のなかで少数の立場にある人たちについて、「わたしたちが〇〇とこれから共に生きていくにはどうしたら良いのか?」と投げかける人がいます。しかし実

際は、少数の立場と多数の立場のあいだにある「境界線」が引かれる前から、わたしたちは、もうすでに共に生きているのです。多様な「一人ひとり」がいて、ただそこに境界線が引かれているだけなのではないか、と考えています。

この社会には多様な「一人ひとり」がいる。だがそこに境界線が引かれることで、様々なアイデンティティのあいだに境界が生み出される。ある「境界線」が引かれると、少数の立場と多数の立場が生まれる。でもその前から、私たちはすでに共に生きている。

境界線は、人を守ることもあるが、人に何かの課題を突きつけたり、苦しめたりすることもある。そしてときには、多数派であることを笠に着て、暴力的とも言えるふるまいが起ってしまうこともある。境界線を目の前にして、生きづらくなってしまふ状況に接して、どのように生き抜くことができるのだろうか。そのことを考える際に、やむにやまれず、様々な方法を使いながら、なんとか生き抜いていく人たちに、私たちは出会ってきた。その技法、すなわち人々が新たにつくりだした道のことを、私たちは「迂回路」と呼んでいる。

境界線のあちら側とこちら側で起こっている日々の出来事や、そこにある独特の雰囲気や空感、表現や文化に目を向けること。そのことが、あの境界線だけでなく、この境界線ではどのようになっているのかを想像すること。こうしてそれぞれの同じところと違うところを思いながら、そんなことは微塵も想像していない対岸はるか彼方の人々に、どのように伝えられるのか試行錯誤すること。そうしたことを目指すのが「対話」である、と位置づけた。

このコンセプトは、昨年度の研究の過程で少しずつ導き出してきたものである。調査先の一つであるcommunity center aktaの荒木順子さんから、「Living Together」という言葉を教わったのだ。これは、HIVの予防啓発や支援に関わるスローガンで、「HIV陽性の人、陰性の人、どちらかわからない人も、この社会ですですにいっしょに暮らしている」ということを前提とする考え方を指しているのだという<sup>1</sup>。この、「すでに共に生きている」ということに私たちは新鮮さを感じた。従来、多様性のなかで境界線を引き、引かれながら暮らす私たちは、ともすれば、境界線の向こう側の人々と「これからどのように共に生きていくことができるか」という問いを投げかけがちである。しかし振り返ると、私たちは「すでに共に生きている」=「Living Together」。そのなかでどうやって共に日々を過ごしていくことができるのか、という問題に焦点を当てることは、私たちの研究においても非常に重要であるように感じられた。

すなわち、「対話は可能か?」というテーマは、少数派の人たちがこれからどう生きていくかを考えるものではなく、もうすでに共に生きてい

る多様な人同士でどう生き抜いていくのか、異なる人々同士が出会い「対話」することは可能なのか。そして、それは何を可能にするのかを問うものなのである。

各プログラムの報告は研究員と来場者、双方からのレポート<sup>2</sup>に任せるとして、ここではフォーラムにおける対話のありようから、改めてフォーラム「対話は可能か?」とは何だったのかを検討していく。なお、具体的なプログラムの詳細は巻末資料を参照のこと。

## 3 対話とその複数の形式

はじめに、対話の形式についての考察を試みたい。パネルディスカッション、トークセッション、閉じられた対話の場といった、異なる形式で実施された「対話」の様相について検討してみよう。

### プログラム4

#### シンポジウム「対話は可能か?」

##### ②パネルディスカッション「対話は可能か?」

一般に「フォーラム」というと、パネルディスカッションのような形式を思い起こす人も多いかもしれない。登壇者の前に数多くの客席が並べられ、マイクを用い、スクリーンに資料を投影しながら登壇者が一方的に話し続ける形式である。

今回のフォーラムでも、3日間のイベントの最終プログラムとして、100人規模の会場でパネルディスカッションを行うことが必要であろうと考え、各地からゲストを招き実施した。結果、個々の事例とそこから示されるそれぞれの

考えはとても刺激的であった。参加者の満足度も高く、約3時間という長丁場にもかかわらず、あつという間だったという感想も聞かれた。

反面、こうした形式は、長時間のプログラムであっても、時間が足りなくなってしまうことが多い。ゲストによるプレゼンテーションは魅力的であり、そこに時間を割きたくなる。後半に全体での議論の時間をとっていても、プレゼンテーションが押ししまえば時間を確保することは難しくなる。今回のパネルディスカッションでは、まず主催者の一人である長津がフォーラムのコンセプトについて説明し、次いでゲストの上田假奈代(NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)代表)、細川鉄平(通所介護事業所 凡代表)、高嶺格(美術家)が、順に発表を行った。ゲストには、事前にそれぞれの活動について「対話」を切り口に話していただきたいと依頼していた。上田は大阪・釜ヶ崎の“おっちゃん”たちとの、細川は共に事業所を運営する家族や利用者との(関西弁でまくしたてるその話術に会場は一気に引き込まれた)、高嶺は作品制作を通じて出会う様々な人々との「対話」の様相を語る。それは非常に実のある時間であった。しかし、その後のディスカッションは、司会者や参加者の問いかけに対し、ゲストが順番に発話するという展開に終始したように思えた。それは、対話に至るには時間が足りなかったという感覚をもたらすものであった。

こうした対話の形式について、どのように考えることができるだろうか。劇作家の平田オリザは「それぞれの文化、それぞれの言語に独自のコンテキストがあるように、あるいは、ある地方、ある方言に、独自のコンテキストがある

ように、一人ひとりの使う言葉にも、独自のコンテキストがある」<sup>3</sup>と述べる。プレゼンテーションはまさに、一人ひとりのコンテキストのなかで、様々な、異なる存在と共にあるための実践について述べる場と言える。とすると、それを交わせることを試みるには、プレゼンテーションとパネルディスカッションという形式では限界があったと言えるだろう。異なるコンテキストに依った発話を理解し合うには、それぞれが自らの体験や言語へと翻訳する時間を十分に取ることが欠かせない。そうした問題をクリアできれば、このような形式においても、対話が実感されるのかもしれない。

こういった「対話」の形式について、他のプログラムを通じて、もう少し検討してみよう。

#### プログラム1

##### トークセッション「共に生きるということ」

トークセッション「共に生きるということ」では、資料投影などはせずに即興で対話する形式とした。ゲストが2人で1組になり、30分間トークする。これを3組行ったあとに、全体でのディスカッションとした<sup>4</sup>。各組には、研究員のうち1人が聞き手として入った。ゲストには、昨年度の「もやもやフィールドワーク 調査編」で私たちが出会った人々を中心に、居場所やコミュニティ形成に関わる多様な活動を行っている人をお呼びし、参加者にも私たちの「迂回路」をめぐる旅を追体験していただけるような場をつくることを企図していた。2人1組となったゲスト同士は、ほとんどが初対面であったが、そこから対話を始めることで、私たちが調査で初めて出会ったときに得た面白さを体験してもら

ることができたら、と考えていた<sup>5</sup>。

トークからは、それぞれが活動において行おうとしていることや、大事にしていることの類似性が見えてきた。例えば「目に見えない」ということから、二つの活動について語られた。新宿二丁目でcommunity center aktaを運営する荒木順子が、HIVが外側からではわからないこと、偏見や差別があるなかで、自分が陽性だと周りに伝えるのが難しいこと、そのなかでHIV 自体が見えなくなっていってしまうことを、現状の課題として語る。それに応じるように、美術家の高橋伸行が新潟水俣病を題材にした自作にふれ、水俣病も、実は見た目にわからない症状を持っている人がたくさんいることを告げる。また、暮らしのなかで、自然に体に取り入れてきたものを通して病気になることで、いろいろな意味で言えない病気でもあるという。見えなさ、言えなさが生み出す状況、課題が、明らかになる。

また、来場者から、東京で暮らしていくことについて「確実性にすぎりながら生きていきたいけれども、少しずつ不確実な暮らしというか実践にトライしたい」という想いが寄せられると、伊豆大島で「元子おばちゃん家」を運営する長嶋元子が「どこにいてもおんなじだよ」と笑い飛ばし、「見つかるまではしゃかりきに、損得考えずにやっていくといろんなことが見つかるので、場所じゃ、私はないと思います」と語れば、千葉県木更津市で宅老所「井戸端げんき」を運営する加藤正裕は「場所がどうっていうよりも、誰ってことが一番大事だと僕は思っているんですね。(略)そこら辺で悩んでいるんなら、とりあえず木更津来いよ(笑)」と応じ

る。普段はまったく異なる活動をしていながらも、こうしたやりとりが積み上げられることで、核となるキーワードが姿を見せ、共通の課題が浮き彫りになっていく。言葉が響き合い重なり合っていた3時間だった。

#### プログラム3

##### 出張ふわカフェ in 東京迂回路研究

「出張ふわカフェ in 東京迂回路研究」は、本書でも後述する国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)が主催する「ふわカフェ」の出張版として実施された<sup>6</sup>。このプログラムでは、通常の「ふわカフェ」にならない、参加者全員が輪になり、ファシリテーターのもと対話するという形式をとった。トークのテーマを「カミングアウト」としたのは、社会に隠されるマイノリティ性を認め、明らかにすることを指すこのテーマであれば、ジェンダー・セクシュアリティに関する課題をもつ人々だけではなく、様々な課題をもつ人々の参加を促せるのではないかと考えたためである。

「ふわカフェ」では、ジェンダー・セクシュアリティに関する問題を軸にして、普段なかなか話せないトピックについてみんなで話す場をつくっている。その場づくりでは、参加者が安心して話することができる環境を整えるための細やかな配慮がなされる。今回も、外から中が見えないように会場を整え、匿名申し込みを可能にするなど、クローズドな環境をつくって実施した。また、「ふわカフェ」が使用している「グラドルール」の共有によっても、安心して話することができる場がつけられ、それが基盤となって、個々の発言が丁寧に受け止められていたよ

うに思われた。一つの経験が、他の参加者の経験と呼応し、新たな経験が語り出される。そのようにして自身のアイデンティティに関する「カミングアウト」と、それをめぐる問題についての多様な経験や思いが語られていた。

ここまで、対話の形式の違いにより生まれる、個々の場の雰囲気についてみてきた。では、なぜこのように対話の形式によって、やりとりの質や空気感が変わったのだろうか。

梶谷真司は近年、哲学対話を核としたプロジェクトを展開している。そこでは哲学を、市民が集まり、それぞれの言葉や経験を積み重ね編み上げていく、一つの知の形態として捉えている（私たちが「もやもやフィールドワーク 報告と対話編」で行っている「哲学カフェ」は哲学対話の一種である）。梶谷は論考『対話としての哲学の射程：グローバル時代の哲学プラクティス』で、「なぜ私たちは自由にものが言えないのか」と問いかける。そこには、「自分がくだらない人間や頭の悪い人間、空気の読めない人間、迷惑な人間だと思われたくないという恐怖、不安、羞恥心、自信のなさ、見栄、プライド」や「あの人にこんなことは言えない、あの人に悪いから黙っておこう、言わないほうが本人のためだといった敬意、遠慮、愛情、気遣い」などが関わっているとして、次のように言う。

こうした感情の根底には、自分の言うことは否定されるのではないか、そのまま受け取ってもらえないのではないかという思いがあるのでしょうか。それは思い過ぎのこともありますが、実際に嫌がられたり、怒

られたり、笑われたり、無視されることもあります。そのような事態を回避したり、予防したりするための様々な情緒的な構えがこれらの感情と言えるでしょう。逆にそうした配慮を何もしなくていいという「安心感(safety)」があって初めて、私たちは「何を言ってもいい」という自由を手に入れることができるのです。<sup>7</sup>

このことは、ここまで触れてきた、対話の形式の自由さと不自由さを生み出す構造に対して理解を与えてくれるように思われる。「安心感」があるからこそ、人は何を言ってもいいという自由を手に入れることができる。パネルディスカッションという形式にそれらを落とし込もうとすると、豊かな対話を生み出すためにはある種のテクニックが必要となるように思われる。すなわち、設営方法や進行の方法が形式張っているために、そこで「安心感」をもとにした発言をもたらすには、公式的な発言をしなければならぬという思い込みを外す必要がある。一方、「ふわカフェ」では、「グランドルール」という手法で場のルールを規定することで、意見の異なりを、否定されないもの、異なっても誰からも批判されないものとして保証していた。またトークセッションでは、「即興で話す」という自由度の高い設定が、話者と聞き手とのあいだの信頼関係により支えられ、自由闊達な議論を生み出すこととなった。

## 4 対話をもたらす機能

ここまで、言葉と言葉を交わすことで成り立つという意味での対話を含むプログラムをもとに、対話の形式について検討してきた。フォーラムでは、ほかに体感型のプログラムも行った。これらのプログラムは、「人と人とが向かい合って話をする」ことをメインとしておらず、その意味で対話とは言えないと思われるかもしれない。

### プログラム4 シンポジウム「対話は可能か？」

#### ①対談「まるっきり違うのにそれでも似るもの：迂回路をめぐって」

その意味で示唆を与えてくれるのは、対談「まるっきり違うのにそれでも似るもの：迂回路をめぐって」である。以下は、対談のなかでの、写真家の齋藤陽道の発言である。といってもこれは音声として発話されたものではない。長津との筆談対談における齋藤の言葉である。

「こうして筆談をするということ（略）言葉が直に、とどかないという思いは常にあり、」  
「言葉ではなくみつめあうことで、伝わるもの、それを声と呼びたい。（略）音声だけが『声』としてしまうと、それではあまりにもきゅうくつで。写真を通して、他者のまなざしとぶつかりあうことで、言葉もなくなつて心になだれこんでくるものがあるなど知るようになり、『ただ見つめあうこと』『ただ存在すること』そのこと自体がもうすでに声なんだ、ということを感じたいんです。」

齋藤はろう学校を卒業し、20歳のときに補

聴器を外す生活を選んだ。そうして撮っている写真自体も彼の「声」であり、関係性のなかで生まれるもの、「他者のまなざしとぶつかりあうことで、言葉もなく心になだれこんでくるもの」こそが「声」なのではないか、と提起したのである。この言葉に出会ったところで私たちは、「対話」は言葉と言葉のやりとりとしてだけ捉えられるものではない、と気づかされる。「声」というかたちをとっていない「声」を聴くようなふるまいを想像することが求められたのだ。

ここからは、観客と共に体感する形式をとったプログラムのいくつかを紐解いてみる。「声」以外にも、ちょっとしたやりとり、関係性、ふるまい、空気感などのなかで、対話の本質的な機能が浮き彫りになるように思われるためだ。

### 前夜祭 「幻聴妄想かるた」大会

「幻聴妄想かるた」大会は、精神障害者就労支援B型事業所「ハーモニー」（以下、ハーモニー）が製作したかるたを使ったプログラムであった。参加者は、かるた遊びをし、自らが体験したことのある「幻聴」や「妄想」をもとにかるたを制作し、大いに盛り上がった。だが、ここではその、かるた遊びに至るまでの、いわば導入の時間に着目したい。最初に、ハーモニー施設長の新澤克憲が、幻聴や妄想は、社会的にどのように捉えられてきたのかをプレゼンテーションする。その後、ハーモニーの利用者である益山弘太郎が出てきて、自身の妄想体験について語り出したのだ。参加者はそれらに若干圧倒された後に、かるた遊びに臨むこととなった。

益山個人の妄想経験が語られ、かるたで遊び、

それらに触発され、個々の妄想が引き出される。それをもとにかたるた札を制作し、発表し合う。そこで参加者は、はたと気づく。幻聴や妄想は、けっして精神障害者という自らにとっての他者のみが持ちうるものではなく、ごく身近に生起するものである。ここでは、様々な妄想が混じり合う。ともすれば、他人の経験をからだに取り入れ、自分の感覚に溶かし込んでしまっているようにも見受けられた。

これに似たエピソードを、前述のパネルディスカッションで高嶺格が述べていた。彼は、自身が介護者として接し、映像作品を制作した「木村さん」との関わりについて「彼の介護を僕が90年代に5年間くらい京都でやっていて。最終的には性の介護もすることになって、その模様を収めた映像を使った、パフォーマンス作品をつくったことがあります。(略)最初は、すごい戸惑いがあったが、それと付き合いしていくと、慣れてくるというんですね、自分の身体と同化していく、みたいな、そういうプロセスがあるなと思っていて。(略)木村さんと僕との間には、共犯関係みたいなものが存在したと思っていますんですよ。共犯関係が作品を可能にしたし、それを公に出していくときに、その関係がなければ成立しなかったはずの、非常に希有な関係というものがそこにあったと思う」と触れている。

他人の経験を身体に取り入れ、自分の身体と同化していくような体験。このことを対話と捉えたとすると、「聴くー語る」という対称的な関係にない対話のありよう、すなわち、哲学者の鷺田清一が言うところの「語る者と聴く者とのあいだに閉ざされてはならないし、また閉

じるわけもない」<sup>8</sup>という状況を考えることができる。誰かが何かを発しようとするときに、それをただ受け止めようとする側は単にそれを受け止めるだけではなく、自らの問題としてそれらを位置づけることを突き付けられるというのだ。「聴くということは、一方で、じぶんを語りなおさざるをえないというふうに語るひとを追い込んでいるその問題状況を時代への問いのなかに置きなおすことを求めているし、他方で、おなじことがじぶん自身をめぐっても突きつけられる」<sup>9</sup>のだ。だからこそ、「聴くー語る」というそのあいだに横たわっている境界線を突き崩し、揺らがせられていく。そのことで、互いの存在が沁み出していき、「身体と同化してしまうような体験」をもたらしていく。

#### ライブ

#### 「Living Together × 東京迂回路研究」

「Living Together × 東京迂回路研究」は、HIV/AIDSの陽性者たちによる手記の朗読と、ライブからなるプログラム「Living Together Lounge」を東京迂回路研究バージョンで実施したものである。手記には、それぞれの立場、視点、経験から、陽性者の葛藤や日常の風景、パートナーや家族との関係などが書かれている。朗読者は、用意された手記のすべてに目を通し、自分が読んでみたいと感じた手記を選び、感想を添えて朗読する。朗読が終わると、おもむろにライブが始まる。ライブは手記やHIV/AIDSに関係ないこともあれば、大きな影響を受けている場合もあるという。いずれにせよ聴衆は、手記の朗読から感じ取ったことを、音楽を聴くということで昇華していく。

今回このプログラムを実施したのは、前述のように「Living Together」という言葉を重要なコンセプトの一つとして考えていたこともあるが、単純にライブという形式で「体感」するプログラムをアクセントとして入れたかったためである。だが実際に行くと、私たちの予想を超えて、「対話は可能か？」という問いを考えるにあたり重要な示唆を与えるプログラムとなった。その示唆とは、「不在」に関わるものだ。

ラッパーのGOMESSは、HIV/AIDS陽性者の手記を朗読したあと、次のように語った。

僕は人のことをあまり見ないようにしてるんですけど、こうやって物語を、一つ、断片的にでも知ると、うん。不思議な気持ちになるな。(略)人の感情とか、人の物語っていうのは、すーっと入ってくるとちょっとそれに、頭を、なんというか、キャパシティを奪われて、他のことが考えられなくなってくるんで、かといってその人になれるわけでもないし。(略)僕は当事者ではないから、この本を読んで、真剣に気持ちを伝え、通わせようとするけど、どうしてもやはり当事者じゃないから僕はたぶん100%、いや、なんなら80%、70%さえも多分つかめてなくて。

他者の物語、ここには現れることができない他者の言葉を語ること。それは単なる代読ではない。その物語に頭を奪われる「わたし」は、その語る人でも、その声を発する人でもない存在となっていく。互いが互いに沁み出し、沁み出せば沁み出すほどに、他者の物語が自分の物語

と同化すればするほどに、「『語り』と『騙り』のすきまが埋まってしまう」<sup>10</sup>。しかし完全に埋まることはなく、そのズレに話者たちは戸惑いを覚える。GOMESSはこのあとに、自らの体験をモチーフにしたラップを多く披露した。その物語は、見る者たちにも同じように沁み出していく。そうして明らかになるのは、沁み出す、けれどもそこにはいない者の、不在の存在である。その存在との関係性、他者と接するときの制御不能さに寄り添うことにおいて私たちは、はじめて坂倉杏介が言うところの「自分たちが生きられる場」<sup>11</sup>を手に入れることができるのではないだろうか。

## 5 「対話は可能か？」

ここまで、対話形式に着目し、それによる話法や話題の違いを明らかにすることや、フォーラムという出来事そのものを対話という側面から切り取ってみることをもとに、フォーラムで起こっていた対話の諸相を浮き彫りにしてきた。そのうえで当初の問いに戻っていきたい。もうすでに共に生きている私たちのあいだで、対話することは可能なのだろうか。そしてそれは、何を可能にするのだろうか。

対話の形式について言えば、対話が可能か不可能か、すなわち、対話がしやすい形式であるということと、対話がしづらい形式であるということは、いずれも確かに起こり得る。その一方で、対話の機能に着目したときには、可能か不可能か、という区別をすることはできない。その代わりに明らかになったのは、たとえば「声」

というかたちをとっていない「声」に想いを馳せるという機能や、自身と他者という関係からそれぞれが少しずつ沁み出していき境界が曖昧になっていくという機能、さらには他者の「不在」とその制御不能さに直面することによって互いに沁み出し合うという機能である。ではこうした対話は、いったい何を可能にするのか。

科学も政治も可能じゃないって判っちゃったんだもの、“芸術は可能だ”と言いきるにはかなり分が悪い。で、我々は“芸術が不可能でとっても哀しい”ってただ肩を寄せ合って泣いているだけなのか？<sup>12</sup>

これは、ダムタイプの古橋悌二の言葉である。古橋は自分自身がHIV/AIDS陽性者であることを公表したのちに制作した、社会における多層的なマイノリティの様相を浮かび上がらせるようなパフォーマンス作品『S/N』の世界公演の途上で他界している。古橋が提起したこの問い「芸術は可能か？」は、バブル経済崩壊後の日本において、社会のなかでのアートの役割を問いかけたものである。科学が社会を変えられない、政治も社会を変えられない、では芸術はどうか？と突きつける問いと共に古橋は『S/N』を制作していた。そして作品を制作し「ただ肩を寄せ合って泣く」だけではない態度を社会に示すことがもたらす可能性、芸術のもたらす可能性について古橋は次のように語っている。

そこに混沌があるから想像力が生まれる。混沌がいやだから答えが欲しいっていうのは、世界をマニュアル化するっていう態度

に通じますよね。現実の問題に触れたときに生じる心の奥底の混沌は混沌として尊重したい。声にならない声になんとか形を与えるのが現代のアートの使命だと思ってるんやけど、僕たちは天才じゃないから複雑な構造を持った形になってる。でも限りない誠意をもってその複雑さを複雑なまま尊重してるんです。それは全部言論化できるものではないですよ。<sup>13</sup>

これまで本論で述べてきたことと、古橋の「可能か？」という問い、そしてその一つの解といってもいい言葉とは、響き合っているように思えてならない。「声」というかたちをとっていない「声」を聴くこと、自身と他者という関係からそれぞれが少しずつ沁み出していき境界が曖昧になっていくこと、そして他者の「不在」によって始めて自らが生きられる場を指向することができるということ。そのことは、心の奥底の混沌を混沌として活かし、複雑を複雑のまま尊重する態度を生み出す。その態度は、わかりやすく線を引き「こちら側」と「あちら側」を二者択一的に区切るという考え方ではなく、異なったままの個々の存在が、ときに脅かされながらも、互いに侵食し合い、交差してゆくという世界観を生み出す。対話は、ある種の「安心感」を形式として担保することで、まさにこの、一人ひとりに内在している混沌や複雑さをそのまま尊重するような場を生み出すということを可能にするのかもしれない。

だからこそ、私たちは、たとえ他者という存在が「制御不能な営み」であろうとも、それでも、共にいる。日々お年寄りたちと奇想天外な

日常を繰り広げる細川鉄平は「別に、対話することが相手を変えるとか、実のある議論をとか、そういう意図は一切なくて、波が収まるのを待っているんです、いつか来るであろう」と語り、上田假奈代は釜ヶ崎の“おっちゃん”たちとの日々で「その瞬間に判断をください、というのは、いつも心掛けています」と述べる。多様なアイデンティティをもつ人々が共に対話する場をひらく加藤悠二は「話したい人が、もやもやした感じをそのまま言う、でもそれが安心して話せて、かつ周りの人も、それを聞いて、(略)ちょっとなんか受け取って帰るぐらいの、相互作用があったらいい」<sup>14</sup>と話す。こうした現場での個別具体的な「戦術」<sup>15</sup>こそが、対話もたらす可能性を照らし出しているのではないだろうか。

「対話は可能か？」——その問いは、二者択一で回答できるものでも、普遍的な回答をもつものでもない。具体的な「場」に関わる者たちが、それぞれに境界線を少しずつ侵食させるような「対話」を起こすことに、個別具体的な回答が埋め込まれているものなのである。そしてその具体性をさぐり、つないでいく試みとしてフォーラム「対話は可能か？」は役割を持っていたのかもしれない。

- 1 ぶれいす東京「HIV/エイズ 関連ワード集」  
[http://www.ptokyo.org/glossary/living-together%EF%BC%88-t-%EF%BC%89\(2016年2月25日取得\)](http://www.ptokyo.org/glossary/living-together%EF%BC%88-t-%EF%BC%89(2016年2月25日取得))
- 2 なお、本誌にプログラム3「出張ふわカフェ in 東京迂回路研究」のレポートは掲載していない。これは、実施時に参加者全員で共有した「ふわカフェ」の「グランドルール」に基づいている。以下にその一部を抜粋する。「今日のお話はここだけの話：ふだん話じぶらいことを話せる雰囲気大事にしたいので、今日ここで聞いた話はここだけの話に留めておいてください。「こんなイベントだったよ！」ということをどうしてもシェアしたい場合は、個人名や個人情報を出さないように、気をつけてください。」
- 3 平田オリザ(2001)『対話のレッスン』、小学館、70頁
- 4 この形式は、介護施設・事業所を立ち上げた若者たちのトークライブイベント「Love, Peace & Care 2010 in ヒロシマ〜介護バカの集い〜」を参考にした。映画「9月11日」(監督：大宮浩一)も参照のこと。
- 5 普段、私たちは調査に赴く際、インタビューの手法としては質的調査の手法のひとつである半構造化インタビューおよび非構造化インタビューの手法を用いている。
- 6 「ふわカフェ」の実践については調査ノート③(P.64-65)を参照のこと。
- 7 梶谷真司(2015)、「対話としての哲学の射程：グローバル時代の哲学プラクティス」、齋藤元紀編『連続講義 現代日本の四つの危機：哲学からの挑戦』、講談社、104-105頁
- 8 鷲田清一(2003)「臨床と言葉：「語り」と「声」について」、河合隼雄・鷲田清一『臨床とことば：心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』、阪急コミュニケーションズ、221頁
- 9 鷲田(2003)、221頁
- 10 鷲田(2003)、212頁
- 11 坂倉杏介(2015)「生きられる場：日常実践の聖性をめぐって」、秋田光彦・坂倉杏介(責任編集)『アートミーツケア叢書 生と死をつなぐケアとアート：分かたれた者たちの共生のために』、生活書院、166頁
- 12 ダムタイプ(2000)『メモランダム 古橋悌二』、リトルモア、23頁
- 13 ダムタイプ(2000)、99頁
- 14 加藤悠二へのインタビューから。2015年5月16日、国際基督教大学ジェンダー研究センター。
- 15 ミシェル・ド・セルトー、山田登世子訳(1987)『日常実践のポイエティック』国文社

## フォーラムレポート

## ① 前夜祭「幻聴妄想かるた」大会 A

## 「妄想」が誘発するもの

長津結一郎



東京迂回路研究のフォーラム「対話は可能か？」の前夜祭として開催した「幻聴妄想かるた」大会。このフォーラムは、異なる者たち同士の「対話」という言葉をめぐって、「共に生きる」ことを体感するものとして企画されたが、なかでも、もっとも体感にふさわしいプログラムとして幻聴妄想かるたを用いた企画が発案され、作者である世田谷区にある精神障害者就労継続支援B型事業所「ハーモニー」(以下、ハーモニー)のみなさんによる全面的な協力のもと実施された。まずは、当日の風景を簡単に描写することから文章を始めたい。

司会をしていた私から事務的なアナウンスをしたあと、施設長の新澤克憲さんを紹介する。新澤さんには事業所の紹介をお願いしていたが、紹介もそこそこに、幻聴や妄想とはそもそも何なのかということについて、精神保健福祉や歴史的な背景を踏まえたレクチャーが始まる。かるた大会を楽しみに来た超満員の来場者は、突然始まったプレゼンテーションにどこか圧倒されている様子だ。続いて登場したのは、自らを統合失調症であると述べる益山さん。突然ご自身の恋愛遍歴を語り始めたと思ったら、自作の詩を披露し始める。配布された資料には、なぜか静岡県の高層ビルのデータベースや、就職偏差値、平均年収などが書かれているが、それらには一切触れられない。どこまでが本気で、どこまでが妄想かはわからない。ただただ益山さんは、黙っていればいつまでも話しているような雰囲気を出す。来場者たちは、しだいに場の雰囲気もやわらいだのか、それとも場を理解しようとするのを諦めたのか、直感的な反応を示すようになってくる。

そしていよいよかるた大会が始まる。4~5人のグループに分かれて、かるたが配られると、来場者の盛り上がりはピークに達した。新澤さ

ん、益山さん、それにハーモニースタッフの富樫さんが読む、かるたの札やその解説に一喜一憂する来場者たち。かるた大会で多く札を取った人には、なぜか益山さんの思い出の品々(1位の商品は、益山さんが好きな人にあげようと思ってあげられなかったぬいぐるみであった)が贈呈され、とまどいの顔を見せる受賞者のみなさん。続いて「かるたをつくってみよう」コーナーでは、日常的に感じているみなさんの幻聴や妄想についてかるたを描いた。グループ内で発表をし、一番面白かったものを最後に全体で共有した。祖父が他界したときにふと聞こえたという幻聴「たましいランキング6位！」(作者は「おじいちゃん、意外とランキング高いのね……」と思ったという)、「うんしょうんしょと大きなコンタクトレンズを目に入れる」(作者は実際に、洗面器ほど大きなコンタクトレンズを目に入れる夢を見るという)など、それぞれの参加者の妄想が炸裂する――。

幻聴妄想かるたは、ハーモニーのメンバーが、自分たちの幻聴や妄想の実態をかるたにしたものだ。2008年に自主制作が始まり、2011年に医学書院より、かるたに解説冊子とDVD『幻聴妄想かるたが生まれた場所』、女優の市原悦子さんによる『読み札音声』CDの付録がついた豪華版が出版され大きな反響を呼んだ。2014年には、かるたの札を一新した『新・幻聴妄想かるた』も発売され、幻聴や妄想だけでなく、精神障害のある人の日常の風景を描いた札も多数登場している。また最近では、コミュニケーションアプリ「LINE」のスタンプも発売し、好評を博している。

幻聴妄想かるたの解説冊子には、かるたがつけられた背景と、一つひとつのかるたの解説が書かれており、その、一つひとつのかるた自体が、誰かの人生の一コマや、あるひとときの幻



聴や妄想に基づいているのだなということを実感できるものになっている。

最近では幻聴妄想かるた大会が各地で開催されており、精神保健福祉や表現について扱う大学の授業で行われたり、美術館のイベントとして開催されたりするなど、活動の幅が広がりつつあるようだ。

精神障害者福祉の立場から考えると、幻聴や妄想は実際には存在しないつくり出されたものであり、従来の治療ではその「非現実性」を理解してもらうことで病識を深めることが求められてきた。しかし最近では、浦河べてるの家を発端とした「当事者研究」などの取り組みを通じ、医師の言葉により定義づけられる症状だけでなく、自らが病に向き合い、自らの言葉で語る病のあり方に焦点が当たるようになってきたようだ。幻聴を「幻聴さん」と名づけ、自らその不思議

議な体験を言葉にして語り合い、外にひろくことで、病気を医療者ではなく自らの手に取り戻す試みを行っているのだ。

私たちは企画を試みた際に、この幻聴妄想かるたに対して、シュールに笑いを楽しむものというだけではない、何かを突きつけられるような思いを抱いていた。障害者ではない(かもしれない)自分にとって幻聴や妄想とは何なのか？そのかるたに笑う自分とはいかなる存在なのか？そして今回のイベントでは、そのような思いを来場者に体感してもらえるとよいのでは、と考えていた。実際にイベントを行ってみたところ、自らにとっての幻聴や妄想がいかなるものか、そしてそれを大勢の人々の前で公表することによって得られる気づきは何か、という、どこか“もやもや”とした思いを抱かせる契機としてイベントが機能していたように思われた。しかもそれは、障害当事者運動などのように大文字の目的を言葉にしてシュプレヒコールのように伝えるのではなく、かるたというツールをもとにして「場」として共有し体感するような機会をつくったことで、一人ひとりによる多様な解釈を促しているようにも感じられた。

そして特筆すべきは、当日の来場者の雰囲気がとても熱気あふれるものであったことである。あるときは大声で笑い、あるときは真剣に耳を傾け、かるたとりには全力で取り組む。その姿はエンターテインメントとしての消費にも近い態度であったとも考えられる。しかしおそらく来場者たちは、イベントが終わり帰路につくなかで、自らの描いたかるたを思い起こし、場を共にした人々それぞれの「幻聴」や「妄想」を思い起こしたことであろう。ある来場者はその後、「私家版・幻聴妄想かるた」と称して、自分でかるたを作成しFacebook上で発表し続けたという。

その“もやもや”とした余韻は、プログラム全体を通じて、個々人の表現したい思いが発露されていたことも関係しているかもしれない。新澤さんは妄想についてのプレゼンテーションを行い、益山さんが自らの恋愛遍歴を語り、ハーモニーのメンバーたちの日常風景とそこにある幻聴や妄想が文字となってあられ、来場者はかるたを取ったり描いたりすることでテンションを上げる。個人から発せられる「妄想」の表現が「内輪」としての盛り上がりを生み出し、さらには場に居合わせた一人ひとりの「妄想」を誘発していたのではないだろうか。

後日、フォーラムではライブ「Living Together × 東京迂回路研究」およびシンポジウム「対話は可能か？」に出演した齋藤陽道さんが所属している障害者プロレス「ドッグレッグス」の興行に、ハーモニーのみなさんの姿を見つけた。ハーモニーの利用者2人がレスラーとして登場するという。アイドルを応援するときを使うような、お手製のうちわを手に、スタッフや利用者が観客席から見守っている。タグマッチとして、障害者プロレス出場歴が長いレスラーたちに戦いを挑んだ結果、あえなく敗北。レスラーのうちの一人は、リング上で鼻血を出してしまった。休憩に入り、新澤さんに「負けちゃいましたね。鼻血出しましたけど、大丈夫ですかね？」と話しかけると、「はい、自己決定ですから」と笑いながら答えたのが印象的だった。自分のことは自分で決める。そこで何かを表現したときに、周りの人々が誘発される。そのような自己決定と相互行為の関係性に、あのかかるた大会の雰囲気を思い起こす。そこで生み出された一人ひとりの「妄想」とそれらを下支えし、さらなる「妄想」を誘発するコミュニティに、改めて思いを馳せた。

## フォーラムレポート

### ① 前夜祭「幻聴妄想かるた」大会 B

## わかりあえる入口に立つ

### 東濃 誠

#### ひがしの まこと

NPO法人Art's Embrace代表。  
tarl思考と技術と対話の  
学校基礎プログラム受講中。  
再開発プランナー。  
多様性をお互いのなかに発見し、  
認め合うプロセスの  
なかで新しい価値や生産性が  
生まれる、そんな次世代の社会基盤を  
アーティストと共に  
切り拓いていくことを、  
自らのミッションとしている。

幻聴妄想かるたをしているうちに、自殺してしまった友達の重たい棺をかついだとき、中から「気にするな」と、とても明るくのんびりした彼の声が聞こえたことを、ふと、思い出した。そして、聞こえたことが私の真実であることを改めて思った……。

都営三田線の改札から上ると、NEC本社を初めとする超高層ビルの町にでる。そこを北西に曲がると、なじみのある低層の住宅地にはいる。芝の家は、その一角で縁側が中からの柔らかい光で照らされている木造の建物である。50年近い年限を感じる4間半×4間半ぐらいの四角い板間は「待っていたよ」といつてくれているようだ。すでに画面には、「幻聴妄想かるた」が映し出され、幻聴とおつきあいする導入部がはじまっている。

7時半ピタリにNPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表で、明るくて律儀な長津結一郎さんが口火をきる。「幻聴妄想かるた」大会は、この3日間のフォーラムの前夜祭であること、芝の家の運営主体(港区と慶應義塾大学)、ご自身のNPO、そしてこのイベントゲストであり、進行役の精神障害者就労継続支援B型事業所「ハーモニー」の新澤克憲さん、益山弘太郎さん、富樫悠紀子さんを紹介する。

一般参加者と主催者、スタッフ、ハーモニーの方合わせて40人ちかい人による密度感と「お互いの幻聴や病気を聞いてもらう水曜ミーティングは、はじまるまえに勝負がついている」と語る新澤さんの、緻密なステップアップコーディネートによって、「かるた」にむけて、きわめてスイッチが入りやすい状況になっていく。

まず新澤さんは、「まじめ」に幻聴とはなにかをパワーポイントで説明しだす。「6%の人は健康であっても聞いたことがある。」と健康

な人もその世界に連続していることを、それとなく説明する。つぎに幻聴を参加者が体験する時間があった。参加者の一人が立ち、幻聴のプロ、統合失調症である益山弘太郎さんが、後ろから耳元で、実際にあった友達の幻聴を、会話をさえぎるぐらいの大きな声でささやく。その参加者の感想……「フリーズしてドキドキした。学校に行くな、と言われたのが嫌だった」。お世話になっている大学教授の声で「大学に来るな」と言われたり、親友の声が「僕は友達じゃない」と言われたりするなど、自分が普段認識している世界に強く反対する声がある一方、宇宙人の女の子を助けたとき彼女が言った「世界で一番きれいな空気を吸わせてあげる」というロマンチックなものまで、一人の人間の幻聴の多様性に驚く。そして、無意識の世界はどこか別の世界につながっているのではという不思議な気持ちになった。彼らは、別の世界の通訳者かもしれない。そして幻聴妄想かるたそのものをハーモニーの3人が連携しながら説明。例えばかるた札の「のうの中に機械がうめこまれしっちゃんめっちゃかだ」は、発信機が「のう」に埋め込まれて、自分の思ったことをどんどん発信してしまう、それをラジオ局が受信して全国放送してしまう。「おとうとを犬にしてしまった」は、本当に犬だとおもって、おとうとを左側に



連れて散歩していた。

次は、益山さんが自己紹介をした。統合失調症とはなにか、一つ一つははっきりしているが、みんな均等な重みで存在していて、優先順位や序列がない(バラバラともいえるが)ことを体で示してくれる。

「私は常に盗聴・監視されているから、それを逆手にとって大好きな静岡県を天井に向けて宣伝しているのです」という言葉を聞いたとき、「病気を受け入れる」というような生やさしいものではなく、挑み、天井にむかって戦うことで「病気を自分のものにしていこう」とする大変な努力を思った。益山さんは、その努力ができる人であり、ごく普通の人でありながら、病気とも対話できる人だと思った。益山ステージの最後に、ご自身の詩集の朗読。彼の広い世界が示された。

ここから、幻聴妄想かるた大会。5人6組に、それぞれに案内役が加わる。並べられた20枚ほどの絵札。どんな幻聴なのかを考えているほうがおもしろい。私が欲しいと思ったカードは、「振り返ったら自分がタマゴを生んでいた」と「テレパシーで宇宙人の女の子を助けた」という妄想系で2つともゲットした。参加者それぞれがどんなカードをとったのか、参加者の今がきくと映し出される。グループごとにペースも雰囲気も全く違うのはこのためだろう。

自分の幻聴妄想かるたをつくってプレゼンする最終ステージ。怒涛の2時間はあっという間だった。私たちのグループが推薦した幻聴妄想かるたは「たましいランキング6位」。おじいちゃんが亡くなったとき、聞こえた幻聴だそうで「おじいちゃんは、人生はたましいランキングをあげて行って6位になったんだ」と解釈している。私が気に入ったカードは、道のまんなかに落ちているSさん自身の赤いツバ広の帽子。自宅か



ら直ぐの道端に忘れたものらしいが、「そこに置いておきました。」という感じで、なにげなくかぶった様子を今でも友達に言われるそう。

人の幻聴妄想を聞いているうちに、かつて幻聴を聞いたことをふと思い出した。そして聞かされたことが私の真実であることを改めて思った。先ほど話してくれた益山さんの盗聴・監視、幻聴が、益山さんにとっては「真実である」と、急に実感された。

病気を受け入れることと、自分を受け入れていくことは全く同じである、と感じる。

そこには、痛みを共有できる仲間がいて、安心して自分が自分で変だと思っているところをだすことができ、誰かがそれを絵にしてくれることで、(芝の家では自分でつくった「かるた」でカミングアウトし、「へー」と言ってくれる人がいて)、それを鏡として、病気や自分をみることができ、受け入れることができる。わたし

は、自分の姿を映す鏡として、幻聴妄想かるたを体感した。

益山さんが、病気を客観視してそれと付き合っている話は、ハーモニーのみなさんをもつ、鏡を用意する力を証明しているように思えた。

懇親会に移動するとき、益山さんと歩きながら話すことができ、「一つひとつの受け答えは、拍子抜けするほど確かだった。病気と闘って従えることに、すぐくエネルギーをつかっていて、なにげなく生きているぼくの3倍はついていると思った」とお話しした。この言葉が益山さんとの距離を縮めたと思う。懇親会の終盤、益山さんから、ぼくに詩集を買ってほしいというオファー。詩集は既に完売している。富樫さんがバックから個人のをとりだしてくれ、益山さんがそれにサインをくれた。

## フォーラムレポート

## ② トークセッション「共に生きるということ」A

## 異なるままに、それでも、共に

## 井尻貴子



9月5日(土)の午後、光が差し込む空間でそのトークセッションは始まった。

ゲストは計6名。2名ずつが組となり、30分ずつのフリートークを行う。テーマは「共に生きるということ」。このトークセッションのタイトルでもある。「さまざまな人の“生きること”に寄り添い、共にあろうとする、しなやかな場をつくっている実践者によるトークセッション。宅老所や託児所、アートプロジェクト、コミュニティセンターの運営などの実践から、“共に生きるということ”をテーマに、即興で語り合う」。ゲストは、ほぼ初対面。異なりながらも、同じくするところがありそうな人・活動をつなぎ、ここでしかない顔合わせを実現させ、「共に生きるということ」に迫っていく。これが、今回のトークセッションの目的だった。

## プログラム

- ①加藤正裕(井戸端げんき)×長嶋元子(元子おばちゃん家)
- ②荒木順子(akta)×高橋伸行(やさしい美術プロジェクト)
- ③坂倉杏介(ご近所イノベーション学校)×吉川由美(ENVISI)
- ④ディスカッション

最初に登場したのは、木更津の宅老所・井戸端げんきの加藤正裕さんと、伊豆大島の託児所・元子おばちゃん家の長嶋元子さん。司会の長津が話を切り出す。

どちらも、宅老所、託児所と称してはいるが、利用者を絞りきらない。その場を必要とする人なら、基本的にできるかぎり誰でも受け入れる場としてあること。そして、制度を利用しながらも、制度に縛られない仕組みを考えていること。私たちが昨年度の「もやもやフィールドワー

ク 調査編」のなかで気づいた類似点を述べ、改めてそれぞれの場が目指していること、相違点などについて話した。

続いて登場したのは、新宿2丁目に位置するcommunity center aktaの荒木順子さんと、全国で「やさしい美術プロジェクト」を展開する高橋伸行さん。司会は三宅が務めた。

荒木さんには、「アジアでも最大といわれるゲイタウン新宿2丁目にあるHIV/エイズをはじめとしたセクシャルヘルスの情報センター」であるaktaのこと、HIV感染予防啓発プロジェクトのことを、オープンスペースとして活用される様子やデリバリーボーイズなどの具体的な活動事例を交えてお話いただいた。

「やさしい美術プロジェクト」のディレクターとしてこれまで、ハンセン病療養所である大島青松園や、病院の緩和ケア病棟などでプロジェクトを行ってきた高橋伸行さんには、新潟で開催された「水と土の芸術祭2015」の出品作品である「旅地藏 阿賀をゆく」のお話を中心に伺った。新潟水俣病の発生地である阿賀野川を、足尾の石でできたお地藏さんを乗せたリヤカーを引きながら徒歩で遡上し、草倉銅山を目指す旅。お地藏さんの見た風景や出来事を記録し記憶する旅の途中に起きた、様々な人との出会いが語られた。

その場の人々に向き合い、彼らが抱える何かに寄り添い、活動をつくっていく様子が2人からは伺えた。

最後は、ご近所イノベーション学校の坂倉杏介さんと、ENVISIの吉川由美さん。坂倉さんからは港区で行っている「ご近所イノベーション学校」、「芝の家」の話や、吉川さんからは南三陸町で行っている「きりこプロジェクト」のお話をいただいた。東京と東北という異なる地で行われてはいるが、地域の人の力を生かし行う



地域づくりという点で共通したプロジェクトである。そうした活動を貫く志、思いに耳を傾ける機会となった。

ディスカッションでは、参加者の方々から質問をいただきながら、ゲスト全員で話す時間をもった。

以上が、トークセッションの概要である。

多様な活動。それぞれの内容や領域はもちろん異なる。が、トークセッションで語られた言葉は、私のなかで緩やかに繋がっていったようにも思う。ここからは、それらの言葉をもう少しずつ取り上げ、振り返りたい。

まずは、長嶋さんの「おばちゃんですから」という言葉。

これは、伊豆大島の元子おばちゃん家を訪れ行ったインタビューでも、幾度となく聞かれた言葉だった。「隣のおばちゃんをずっとやって



きました」と長嶋さんは言う。昔、隣のおばちゃんがしていたようなことをしているだけなのだ。「なーんも特別なことしてないのよ」。母親が外出しなければならぬ間、赤ちゃんをあやす。学校から帰ってきた小学生を、ちょっと預かる。「何かを我慢してやっているってことはないの」。「おばちゃん」であるということで、いろいろな「こうせねばならない」を無化し「できることをできる範囲です」という状況が許される場をつくり、運営する。それは「ちょっとお願い」と言い合える関係をつくるということでもあるのだろう。

加藤さんの「許し合う」という言葉。どんな場でも、共にいるためには、「しあう」ことが必要だ。向き合うこと、支え合うこと、助け合うこと。加藤さんは、大事なものは「許し合うこと」と言う。「いつの間にか、社会にすごく隔たりができるようになって。なんかいろんな線引きができちゃっている……。許すことができれば、そもそもなんにも気にせずに、共に生きられるような状態ができるのではないかな」。だから「安心できる場所」ではなく、「安心して不安になれる場所」ということをいつも考えているという。「自分の不安を出してもいいと思えるほうがなんかこう、生きてて楽ななっていうふう思う」。そこで必要とされるのは、

その不安に何かをしてあげることではない。ただ、その不安と一緒に過ごすことなのだろう。

「aktaで気をつけているのは、メッセージでも何でも、上から啓発しますみたいなにならないようにすること」。何かをしてあげるのでなく「一緒に考えたり発信したりしていくこと」だと荒木さんは言う。「HIVっていうものが外側からではわからないです。偏見や差別がまだまだあるなかで、自分が陽性だということを、友達とか家族とか自分の環境で伝えるのがなかなか難しい。そういうなかで、HIVのことが見えなくなってしまうという現状があります」。

でも、隣にいるかもしれない。今日もこのなかに何人かいるかもしれない。living together Loungeは、陽性者やその周りの人たちの体験の手記や、それらの朗読などの様々な方法を使うことで、「見えないかもしれないけれども、HIVをもっている人はすでに共にいる」ということを伝えるプロジェクトだ。

高橋さんが続ける「目に見えないというところで。水俣病も、実は見た目にはわからない症状をもっている方たちもたくさんいる。新潟水俣病は四大公害病の一つです。新潟の場合は、川の上流にあった化学工場からメチル水銀が流されて、それを蓄積した川魚を食べた人たちに起きました。見えない病状があるということ、その魚を食べてきたという、生きていくためにごくごく自然に体に取り入れてきたものを通して病気になるってしまったということで、いろんな意味で言えない病気でもある」。そこで確かに起こったことが、見えないかたちで分断されてしまった。その分断が、お地蔵さんとの旅のなかで見え出す。そして、再びつながり出す。

今回、歩く過程で偶然出会った方が、川を通じた自分の記憶や、辛い辛い思いがあったこ

となどをたくさん話してくれることがあったという。「なんて言うんでしょうね。僕自身が理解するっていう感じじゃないですよ。なんかこう、沁み込んでくる。自分のなかに沁み込んでくるっていう感じがあって、それは同時に、お地蔵さんそのものに沁み込ませていく、そういう過程というふうに捉えています」。

吉川さんは言う。きりこづくりのワークショップでは「亡くなった人のことも、みんなで、泣きながら笑いながら、話しているんですよ。今は離れた仮設住宅で暮らす人の話もする。そこでできあがったきりこを届けるときに「語られたことをこの紙と一緒に持って行きますよね。そのことで、たぶんその人は、生きる力をもらえると思うんですよ。つまり自分が生きていることを、人様が見てくれるんだってことです」。特別な人の一生ではない。ただ、そこにそういう人がいた、その人の人生があったということ、見えるかたちにしていく。そうして、何とはなしに、でもたしかに、互いの暮らしを共有していく。そういう人たちが暮らすところは「こういう地域はいいな」と思える地域だろう。

東京で暮らしていると「地域と一緒に暮らしている人たちと関係を持つ必要がない、関わらなくても生きていけちゃうように一見思える」と坂倉さん。それでも、「芝の家のようにみんなが寄り集まって、とても小さなことを何回もやっている、そのやっていることの積み重ねの裏に何かができいく」。それがお金などは違う、「いろんな人を動かす力」になるのではないかと言う。

芝の家には、毎日のプログラムや接客マニュアルがあるわけではない。だから、「何が起こるかわかんないものに対して、コントロールできない現象にずっと自分の労力と時間をささげているようなもの」だ。だからこそ、思っても

みなかったことが日々起きていく。それは、誰かがもらったスイカを持ってきて、みんなで分けあって食べるとか、とても些細なことだ。でも「そう思ってなかったけど、こういうことがあってよかったな、みたいなことってすごく生きてる感がある。偶然や流れでこうなっちゃったねみたいな感じで、出来事や関係が流れ始めると、一緒にやっていることの内容はどうあれ、一緒にいる間、その場を共有できたり、お互いをコントロールし合うんじゃないあり方ができるようになったりする。それがとても大事なかな」。

共に生きるということは、誰かと共にあるという気づきから始まる。それは、その人の生きることに関わりたいという強い思いから始まる場合もあるだろうし、偶然の関わりやそこから派生した関わりざるを得ないという思いから始まる場合もあるだろう。そのとき、重要なのは、その誰かに何かをしてあげようとするのではない。そうではなくて、その場に一緒に身を沈めるようなことなのではないだろうか。そこでは、互いがどうにもならない存在としてある場合もあるだろう。違いが埋まらない溝を生むかのように思える場合もあるだろう。

それでも、互いが異なる存在として、異なるままで、それでも共にあろうとすることなくして、共にあることはできない。その場に身を浸すことを続けるなかで、できてくる場もあるのではないだろうか。鍋のなかに、しいたけや昆布を浸しておくと、少しずつ成分が溶け出て、水はいつしか出汁というものになっている。

共に生きるという場は、ときに、そんなふう

に生まれていくのではないかなと思う。

## フォーラムレポート

## ② トークセッション「共に生きるということ」 B

## 「境界」と「共に生きる」

岩田祐佳梨

いわた ゆかり

筑波大学大学院人間総合科学研究科  
博士後期課程在籍。建築意匠・建築計画学研究者。  
アート・デザインコーディネーター  
として病院勤務。医療福祉施設において利用者・  
職員などの使い手と建築家・  
デザイナー・アーティストなど  
作り手との協働による継続的な  
環境改善プロセスについて  
実践と研究に取り組んでいる。

当日配布されたペーパー『フォーラム「対話は可能か？」に寄せて』で長津さんが触れていたように、私たちの生きる社会には様々な「境界」がある。この「境界」は普段から頻繁に使う言葉ではないが、今回のトークセッションで改めて考えさせられたキーワードだった。この「境界」に着目してレポートを書きたい。

トークセッションを通し、多種多様な取り組みをされているゲストの方々に共通していると感じたのが、何らかの「境界」に対して働きかけている方々だということだった。そして、ゲストが日々の実践のなかで目の当たりにしている「境界」には、二つの種類があるように思えた。一つは、心身が抱える障害や疾患の程度、ジェンダー、高齢による老いなどの私たち自身が持つ特性によって、引かれる「境界」である。もう一つは、患者と医者、生徒と先生、利用者と介護者、非アーティストとアーティストのように、ケア、教育、コミュニティ、アートプロジェクトなどの場を制度化して運営するためにつくられた、役割に伴う「境界」である。

私自身が病院でアートデザインプロジェクトのコーディネーターをしていることから、後者について実感する部分が大きいため、こちらに着目してゲストの実践内容について感想を述べたい。松嶋健が述べているように、「制度」は本来、私たちが何かをなすことを可能にする肯定的な規範だが、それが形骸化し硬直化すると制限的にしか働かなくなってしまう<sup>1)</sup>。そして「管理する／される」「ケアする／される」という対峙的な関係ができあがってしまうのではないかと思います。こうした課題に対して、「元子おばちゃん家」では、元子おばちゃんこと長嶋元子さんがこれまでの幼稚園の「先生」という権威を持ってしまふ役割を脱して「おばちゃん」としてふ



るまっていたし、加藤正裕さんの「井戸端げんき」では、井戸端に人々が自然に集まり自由にふるまうことが出来る福祉施設を運営していた。両者に共通しているのは、行政からの委託事業や介護制度を利用した「施設」でありながら、制度にあてはまらない状況や人々も柔軟に受け入れて運営していることである。

「芝の家」を運営する坂倉杏介さんがあげた「不確実性」や「偶発性」が重要なキーワードだと感じた。「元子おばちゃん家」や「井戸端げんき」においても、様々な人々が集まるうえで生じる「不確実性」や「偶発性」を排除せず、許容するための運営体制がとられているように思えたからである。

ここでアートプロジェクトに関しても触れたいと思う。アートもときには「提供する／される」という関係になり、そこにははっきりとした境界が引かれることがある。これが良いか悪いかはここで述べることは出来ないが、地域やケアの現場でのアートプロジェクトにおいても「提供する／される」という関係が強く、アーティストとそこで生活を営む住民や利用者の間にはっきりとした「境界」を感じるプロジェクトもある。こうした状況に対して、高橋伸行さんの「旅地蔵」や吉川由美さんの「南三陸きりこプロジェクト」では、アーティストと受け手がいかにお互いの



存在を尊重しながらクロスオーバーしていくかということが実践されているように思えた。それはこれらの作品やプロジェクトが、アーティスト自身の表現であることに加えて、そこに居る人たちの想いを具現化するものとしての表現であるためだと感じた。

次にゲストの実践内容を聞いて、自身が関わっている活動について改めて考えたことを書きたい。先ほども述べたように、私は病院でアートデザインプロジェクトを実践するために、医療者と芸術家やデザイナーをつなぎ、プロジェクトマネジメントを行うコーディネーターとして病院で勤務している。ここでの「境界」について考えてみると、医師や看護師など高度な専門知識を持つ医療従事者と患者とでは情報の格差も非常に大きく、医療従事者と患者の間にある「境界」は非常に強いものとなっている。また医療従事者同士でも、異なる職業間や多数の職員をまとめるための管理職と現場で働く職員の間などには「境界」が存在する。このように私たちが病気を治すために利用する病院には、様々な「境界」で構成されている。こうした様々な「境界」は医療制度や病院組織の必要性によって引かれたものである。

しかしときにこれらは、医療上のコミュニケーション、職員同士の連携、患者に必要な環境づ



くりを妨げることもある。そこでこれまでのアートデザインプロジェクトでは、患者や職員が立場を越えて創る喜びを共有できるようにと行ってきたワークショップ<sup>2</sup>、職員が環境改善について自由に語ることができるようにと実施しているイベント<sup>3</sup>など、一時的に「境界」を緩める試みや「境界」を浮き彫りにして捉え直す試みを行ってきたように思う。しかし課題として感じているのは、これらのプロジェクトは一時的なものであり、ゲストの実践内容のように恒久的な場にはなっていないということだ。本当は欲している人が欲しているときに巡り会えるような、いつもオープンで不確定で創造的な場が病院内にも必要だと感じている。さらに私たちのプロジェクトは、職員と大学が議論を重ねて院内の空間改修や製品制作にも取り組んできたが、作り手と患者や職員など利用者の「境界」がはっきりと分かれているプロジェクトが多いこともまた課題だと感じている。もっと患者や職員が主役になるような作り手と使い手が融合するような場や、患者や職員の想いをかたちにする方法があるはずである。これらをいかに見出していかを考えていきたい。

今回のトークセッションを聞き改めて考えたのは、私たちがこの社会で多様な人と「共に生きる」ためには、それだけ多様な「境界」と共存

しなくてはいけないということだ。そのためには「境界」を否定して壊してしまうのではなく、それをより強く認識することや捉え直すことを通して「境界」と「共に生きる」ことを考えたいと思う。

最後になるが、「対話」というテーマを考えると、「対話は可能か？」というフォーラムのタイトルが、最初はあまりピンとこなかった。「どのような対話が可能か?」「対話はなにを可能にするか?」などであれば理解できるが、「対話は可能か?」という問いかけは難しく感じた。しかし様々なゲストのトークセッションを聞いていくうちに、このタイトルはむしろ多様な私たちが共に生きていくためには「対話しか可能ではない」と語っているように思えた。

- 1 松嶋健、「脱制度化／制度化」、多賀茂・三脇泰生編(2008)『医療環境を変える「制度を使った精神療法」の実践と思想』、京都大学出版
- 2 蓮見孝、一ノ瀬彩、岩田祐佳梨、高嶋結、玉井七恵、貝島桃代(2009)『筑波大学附属病院におけるアートデザインによる医療支援活動』、『デザイン学研究、研究発表大会概要集 56号』、372-373頁
- 3 長島明子「病院にうるおいを-職員の思いとアートをどうつなぐか」、アートミーツケア学会編(2014)、『アートミーツケア叢書1 病院のアート-医療現場の再生と未来』、160-174頁

## フォーラムレポート

### ① ライブ「Living Together × 東京迂回路研究」A

## 「言葉」を「聴く」こと

### 石橋鼓太郎



Living Together Loungeは、新宿二丁目のクラブやラジオの電波を通して開催されている、HIV陽性者が書いた手記の朗読と音楽を組み合わせたイベントである。手記の朗読者は、膨大な数の手記を事前に読み、そのなかから自分が共鳴し、読んでみたいと思ったものを選ぶ。そして、朗読の後には、手記に対する朗読者の感想が述べられる。演奏される／流される音楽は、手記の内容に関係があるものから、まったく関係ないものまで様々だ。このような一連の流れを通して、その場にいる人々は、「HIVを持っている人も、そうじゃない人も、ぼくらはもう、いっしょに生きている。We're already living together.」という、このイベントのスローガンを体感する。

今回のイベントは、その東京迂回路研究版。様々な境界線を引かれた多様な人々が、「これから共に生きる」のではなく、「もうすでに共に生きている」のだとする考え方は、東京迂回路研究の理念とも共鳴し、私たちの活動でも大切にしていくなすべき言葉となっていた。この感覚を来場者に体感してもらうべく、手記を朗読してもらいたいと思った方に声をかけ、Living Together Loungeを支えているNPO法人aktaの協力を得ながら、このようなイベントが実現する運びとなった。

会場は、全面ガラス張り、昼と夜でガラリと表情を変える、SHIBAURA HOUSE 5階のバードルーム。司会は長津と、NPO法人aktaのマダム ボンジュール・ジャンジさん。ジャンジさんは、ドラッグクイーンの華麗な衣装をまとい、過去のLiving Together Loungeで何度も司会をされている。

最初の朗読者は、齋藤陽子さん。HIV陽性者の手記と、それに対する陽子さんの感想が、手話のみで語られていく。私も含め、手話を習っ



たことがない人にとっては、手話のみで話を「聴く」ということは、それだけでとても新鮮な体験であった。手の動きや形から意味を推測しながら、手話が持つ独特の表情の豊かさに引き込まれてゆく。印象的だったのが、人差し指を左右に払って、何度も空中に描かれた、「人」という文字。このような、意味が比較的是っきりとわかる手話もあれば、意味が読み取れず推測することしかできないような手話もある。このような状況で私が感じたのは、「もどかしさ」ではなく、不思議な「心地良さ」であった。

司会のトークを挟み、ジャンジさんより、日本でのHIVの現状が語られる。医療が発達し、予防や治療の手段も増えてきている現在でも、HIVにかかってしまったことで悩み、苦しんでいる人々がたくさんいる。そのような人々の声は、普段生活しているなかではあまり聴こえてこないが、彼らとも「もう既に共に生きている」のだ、ということを手記というリアルな声の朗読によって体感していただきたい、と語っていた。

次の朗読者は、活躍めざましい写真家であり、障害者プロレスラーとしての顔も持つ齋藤陽道さん(陽子さんとの関係は、秘密です)。陽子さんが手話で語った手記・感想と同じ内容が、今度は声によって語られていく。しかし、同じ内



容だということは、観客には知らされていない。先ほどの手話で自分が想像した内容を再び想起しながら、また、陽子さんと陽道さんの関係や「違い」に思いを馳せながら、朗読が進んでいく。

次の朗読者は、佐藤郁夫さん。佐藤さんは、HIVの予防啓発活動を精力的に行っているNPO法人ぶれいす東京で長年活動をされており、過去のLiving Together Loungeでも何度か朗読をされたことがある。佐藤さんには、自身の経験に基づいた手記を朗読いただいた。「すみません、練習のときは大丈夫だったのですが……」と言葉を詰まらせながら語られる、自らの経験。時間を経て、今の自分から過去の自分が書いた手記に対する感想が述べられる。最後には、過去の自分に応えるようなかたちで、佐藤さんが最近執筆された手記が朗読された。Living Together Loungeでは、手記を書いた本人とは別の人が朗読を行うことが多い。そのプロセスは、HIV陽性者の経験を、別の人の朗読や感想を通して聞くことで、それを「受け止める」という軸のリアリティをも生み出す。佐藤さんの朗読・感想からは、このようなプロセスが「過去の自分」と「現在の自分」という立ち位置からでも成立しうることを体感できた。

日もすっかり暮れ、芝浦のビルのネオンが輝きだした頃、最後の朗読者、GOMESSさんが



登場。GOMESSさんは、BAZOOKA!!!高校生ラップ選権で準優勝したことで頭角を現した、即興で言葉を紡ぐフリースタイルを得意とするラッパー。「すみません、ちょっと、後ろを向きながらいいですか?」と、観客を背にして朗読が始まる。そのトーンには、まるでGOMESSさん自身の曲であるかのように錯覚してしまうくらい、迫ってくるものがあった。「僕が感想を喋ると、僕の言葉に変換されてしまうので、少しでも引かかるところがあれば、もとの手記をじっくり読んでみてください」と、少し恥ずかしげに語り、ライブへ移行していく。幼い頃に自閉症と診断されたこと、それに伴う絶望、それでも生きていくしかないという、わずかな希望のようなもの。自らの経験をもとに、押し寄せてくるように紡がれる言葉は、HIV陽性者の方の手記とも、不思議な相似関係にあるように感じられた。

最後には、テーブルを囲み、お茶を飲みながら、感想共有の時間が設けられた。出演者のみなさんに、感想をお聞きした。佐藤さんは、「言葉で理解するだけでなく、それを体感する大切さを感じました」と語る。GOMESSさんは、「ライブという短い時間のなかで、自分の感覚やものの捉え方が、ほんの少しだけでも変化し、その後の人生を生きていくことは、面白く、嬉し

いことなのかもしれません」と、齋藤さんは、「今日は、みなさんの言葉ではない言葉、小さな佇まいやふるまい、しぐさなどを観察して、そのことがとても新鮮でした」と語っていた。

多様な背景を持つ朗読者が、多様な背景を持つHIV陽性者の手記を読み、それを声や手話・ラップ、佇まいやふるまい・しぐさなど、意識的／無意識的に様々な手段で表現し、「言葉」にしていく。それを「聴く」ことによって、いろいろな人々のいろいろな「言葉」が、頭のなかでぐるぐると響き合いながら、自らのなかに沈んでいくような感覚を覚えた。

私たちは、普段交わることのないような人々の「言葉」を「聴く」とき、それはどこか遠くの関係ない人々のことだと、無意識のうちに思ってしまうことが多い。このような態度は、そのような人々とこれから共に生きていかなければならない、という身構えを持ってしても、いや、ときにはそのような身構えを通して、深まってしまうということがしばしばある。

ある当事者の「言葉」が、別の人の「言葉」によって表現し直されること。そしてその「言葉」が、さらにそれを聴いた自分自身の「言葉」と混ざり合うこと。このような、様々な人々の様々な「言葉」が混ざり合い、未分化のもののように思え、自らのなかに沈殿していくような経験こそが、多様な人々が「もうすでに共に生きている」ことを体感するうえで、重要なことなのではないだろうか。そして、これは、必ずしも双方向的な「コミュニケーション」であるとは言えないのかもしれないが、豊かな「対話」のかたちの一つであると信じたい。

## フォーラムレポート

## ② ライブ「Living Together × 東京迂回路研究」B

## 境界を愛するということ

岩川ありさ

いわかわ ありさ

研究者・非常勤講師。  
 専門は、現代日本文学、クィア批評、  
 ト라우マ研究。多和田葉子、  
 大江健三郎などの作品を中心に、  
 傷ついた経験をいかに語るのか、  
 社会や言語、歴史との関わりにおいて  
 研究している。近年は、BLなどの  
 サブカルチャーについても  
 研究している。近刊に『にじ色の本棚—  
 LGBTブックガイド』  
 (共著、三一書房、2016)。

2015年9月5日、コミュニティ・スペース SHIBAURA HOUSEで、「Living Together × 東京迂回路研究」が開催された。Living Togetherとは、HIVのリアリティを身近なものとして生きる人びとの声を届けるためのプロジェクト。2005年からはじまり、HIVを抱える人、そのパートナー、家族、友達、職場の仲間などの手記を収めた冊子を作成し、朗読イベントも数多く行っている。Living Togetherの合言葉は、「HIVを持っている人も、そうじゃない人も。ぼくらはもう、いっしょに生きている。」というもの。どのイベントでも掲げられるフラッグにはこの言葉が大きく書かれていた。偏見や無知によって、現在の日本社会では、「あちら側」の世界としてHIV/AIDSを捉えることがまだまだ多い。今回のイベントは、「あちら側」と「こちら側」を分けようとする境界線を解きほぐし、多様な人びとが共に集まって話す場を創り出そうとする意志に満ちていた。

登壇者は三人。それぞれの人が一編の手記を朗読する。最初の朗読者は陽子さん。陽さんは手話を用いて朗読した。会場に手話がわかる人の数は少なかったが、誰もが陽さんの指先に魅入った。陽さんの朗読が終わると、大きな拍手が起こる。軽く頭を下げた陽さんが裏手に戻る。陽さんがもう一度登場するまでのあいだ、司会の長津結一郎さんとマダム ボンジュール・ジャンジさんが、HIV/AIDSの「現状」について話した。新宿二丁目にあるセクシュアル・ヘルスに関する情報拠点であるaktaで活動をしているジャンジさんの話は、データも含めて、HIVについて理解する助けになるものだった。準備が整い、再登場したのは、写真家の齋藤陽道さん。今まで陽さんだと思っていた人が齋藤さんになる。

齋藤さんは、『感動』(赤々舎、2011年)、『宝箱』



(びあ、2014年)、『写訳 春と修羅』(ナナログ社、2015年)などの写真集を刊行している写真家。陽子さんのときには手話を用いていた齋藤さんが、今度は自分の声で手記を朗読した。手話から音声言語へ。女性から男性へ。陽子さんから陽道さんへ。「ものの見え方」がガラリと変わる経験だった。今回、齋藤さんが朗読したのは、東京在住のユウジさんの手記。その手記にはこう綴られている。

人間であることしか、できない瞬間がある。世界が抱えている問題は果てしなく難しく、自分なんて人間一人が抱えることができるのはいつだってシンプルでしかない。HIVに感染し、知らずも抱えてしまった問題を、どうせならもっともっと、きつく抱きしめていきたいと思った。願わくば、『ひとりで』ではなく。

(「新・僕らのPositive Diary 7」ぶれいす東京)

齋藤さんはかつて、日本近現代文学・障害者文化論が専門の研究者・荒井裕樹さんとの筆談対談で、『境界線』というのは言い換えると、言葉に直して「これでわかった」と思考停止することです。だから、わからないということにどれだけ長く座っていられるかということ 생각합니다」(「その傷のブルースを見せてくれ



『SYNODOS—シノドス—』と語っている。ユウジさんの手記を読みながら、齋藤さんは、やはり、「わからない」ままでとどまったのではないだろうか。いつも、私たちは、「わからない」からこそ誰かと一緒にいたくなる。「わからないあなた」がたまらなく愛おしい。「わからないあなた」のことを知りたくてたまらない。誰かと共に生きることの喜びはそこにのみあるのではないだろうか。齋藤さんの朗読は、そのことを思い出させてくれるものだった。

次に朗読したのは佐藤郁夫さん。佐藤さんは、1959年に東京で生まれた。高校生の頃に自分がゲイだと意識しはじめたが、そのことを認めるのは怖かった。だから、「普通」に見えるように過ごしたという。30代になって母を亡くし、残された父のために見つけた自己探求プログラムに参加して、そのときに自分らしく生きようと決意した。しかし、1997年、結核治療の過程でHIV陽性であることがわかる。失意にくれる日々だったが、妹たちへのカミングアウト、パートナーとの出会い、周囲の人たちの温かさに触れるうちに、自分には大切なものがたくさんあることに気づいた。それは大きな転機だった。

佐藤さんがはじめてLiving Togetherのイベントで朗読したのは、2007年12月のこと。「HIV

陽性者」として話したい、けれども、ゲイの間たちにカミングアウトできない自分がいた。心境の変化が訪れたのは、現在のパートナーとの出会い。佐藤さんは手記を公表することに決めた。佐藤さんがパートナーと出会って一年目のことを書いたのが、今回、朗読された「丁度、つつじの花が……」とはじまる文章だった。

丁度、つつじの花が街に溢れる季節。彼と出逢って1年目を迎えていた。メール送信⇒<ごめんね。今日検査の結果を聞きに行く日だったね。本当ならメールじゃなく、昨日までにちゃんと話をしなければいけなかった。大丈夫だとは思うけど、やっぱり感染させてたら……と思うと心配なんだ>

佐藤さんがパートナーに送ったメールへの返事には、「大丈夫だよ。もし感染したら、一緒に治していきましょ」という言葉。パートナーの結果は「HIV-」だったが、夕飯を食べながら、二人はおさえきれない涙を流した。現在では、HIV/AIDSは「死の病い」ではない。早期に発見し、治療をはじめれば、薬でコントロールできるようになっている。佐藤さんはそのことを伝えようと、NHK・Eテレ「ハートネット」のホームページでエッセイを連載中だ。「HIV+だよ」と言っても、「そう」と軽く答える人がくる日を目指して活動を続けている。

最後に登場したのはrapperのGOMESSさん。中学二年生の頃、はじめてリリックを書いた。18才のとき、音楽事務所にスカウトされ、地元の静岡から上京した。この日のイベントで、GOMESSさんは朗読とライブを行った。自己紹介のようにして歌われたのは、「障害」という曲。「生活の中で一番基本としていること」を歌っているという。

その障害は 何のためでもなく  
その障害は 何の役にも立たず  
その障害は ただそこにある  
エゴイズムその一言で片付くような  
たったそれだけのことでした  
小学五年生 10歳の秋に診断された  
自閉症発達障害先天性 生まれた頃  
あった なかった どっちでもいい  
後からついた ついてない どっちでもいい  
たまたまパニックを起こした  
目の前が真っ白になった 見えなくなった  
生まれたときのことを思い出すような気分で  
目を覚ました時に泣きっ面  
(「障害」)

この曲「障害」の歌詞は、この日この場所でフリースタイルと呼ばれる即興によって紡ぎ出された。自分の経験を歌うGOMESSさんは、ラップのルールはシンプルだという。「順番が来たら、自分の感じたことを自由に表現するだけ」なのだ。GOMESSさんは、ラップに出会ってから、「コミュニケーションの息苦しさ」から解放されたという。今回のイベントでGOMESSさんが朗読したのは、大阪府に住むT/Zさんの手記。T/Zさんは、次のように綴る。

HIVに感染したことはゲイに生まれてしまった俺への罰なんだとも思った。子供の頃からずっと見え隠れしていた言葉がくっきりと頭に浮かんだ。「俺は生まれて来なければ良かった。」「俺じゃなく違う奴が生まれてくれれば親も悲しまずにすんだ。」「俺は生きていても何の役にもたない。」「不必要な存在」その言葉が頭の中ではっきりと文字となって表れた。それから俺は本当に不必要な存在になってやろうと思った。

(「OUR DAYS [Episode 2]」ぶれいす東京)

二人の「生涯」はまったく別のものだ。けれども、T/Zさんの手記と「障害」という曲とは不思議なほど符合する。自分のことを認めない社会。それなのに、自分ひとりでは生きられないということを二人は感じている。絶望から出発した二人が他者のあいだで生きることを知ってゆく。GOMESSさんがT/Zさんの手記の最後にあるフレーズ「あなたは必要な存在として生まれてきたんだ。俺と出会ってくれてありがとう」という言葉を読んだ場面が今でも心の奥底に響いている。GOMESSさんがT/Zさんの手記を読んだことによって、二つの「生涯」が交差したように思った。GOMESSさんが最後に歌ったのは、「1番僕らしい曲」という「人間失格」。彼の魂が歌っているような代表曲のひとつだ。

普通じゃねって並外れてる  
人が呼んでる障害者のクズです  
馬鹿にして カモにして  
アイツは頭がイカれてる  
My name is Gomess 人間じゃねー  
孤独の世界からいつも見てる  
笑って 泣いて 怒って 泣いて  
人に紛れてもう21年  
(「人間失格」)

他人が名づけた名前に抗うようにして、GOMESSさんは歌う。無数の境界線が張りめぐらされて息苦しい世界。そのなかで、それでも生きた証拠を残そうとしている。

SEXに依存しまくったこともあるし、合ドラなのかなんなのかわかんないのにも手を出した。だけど、なれないんだよね、不必要な人間なんて。だって、今までの人生で知り合った周りの人間が、こんなゲイでポジで役立たずな人間

でも“必要”だって言ってくれるんだもん。  
(「OUR DAYS [Episode 2]」ぶれいす東京)

これはT/Zさんの手記にある言葉。苦しみながらたどりついた言葉だ。いつか、「あなた」と「わたし」を隔てる境界線を問いながら、その境界を愛することはできるだろうか。自分を一番傷つけるそいつといっしょに生きて、今は名づけえない誰かと出会う。「ぼくらはもう、いっしょに生きている」。その言葉を道標にして、私たちは境界というものが誰かと出会うための場所だということを知ってゆく。そこで生まれた対話はいつか誰かを救うだろう。何度でも何度でも。

最後に私からも手紙を書かせてください。齋藤陽道さん。私はあなたの「仕掛け」に驚きました。世界が変わって見える経験をしました。けれども、例えば、トランスジェンダーの人はそんなに簡単にジェンダーを変えたりはできないんです。着脱可能じゃない境界をいつも生きています。いつか機会があったならば、きっと、その話をしたいです。写真、これからも楽しみにしています。佐藤郁夫さん。あなたの落ち着いた声が今のあなたの優しさや威厳を伝えてくれます。「つつじの頃……」という手記に、ファミレスで泣いたという場面があったでしょう。私も泣きました。温かさや勇気に満ちた言葉を憶えておこうと思います。最後に、GOMESSさん。言葉が決めた境界線があなたを追いかけてきても、きっと魂にまでは及ばないと、そのことを知っている人のように感じました。これから先もどれだけ魂が歌うのか。きっとまた聴きに行きます。

## フォーラムレポート

## ① シンポジウム「対話は可能か？」A

言葉の終わるところで  
交わされる「ことば」

三宅博子



「対話は可能か？」というテーマを掲げて、3日間にわたり開催した、東京迂回路研究フォーラム。9月6日の午後、慶應義塾大学三田キャンパスで行われた最後のプログラムは、フォーラム全体を振り返り、改めて「対話とは何か」を問いかけるシンポジウムである。ここでは、それぞれの場で「対話とは何か」という地平に立ち、「共に生きる」と向き合い合ってきた方々をゲストに迎え、対談とパネルディスカッションを行った。

不思議なシンポジウムだった。饒舌に意見が交わされるというよりも、むしろ言葉を重ねれば重ねるほど、だんだんと語るべき言葉を見失っていくような。しかし、言葉が終わるところから始まる「ことば」、——あるいは、こう言ってよければ「対話」——の気配や感触を、確かに感じた時間でもあった。

前半は、写真家・齋藤陽道さんと、diversion代表理事・長津結一郎の筆談による対談「まるっきり違うのにそれでも似るもの——迂回路をめぐって」。このタイトルは、企画の打ち合わせで「迂回路」について話しているときに、齋藤さんから発せられた言葉をいただいたものだ。東京迂回路研究の名を掲げて、1年間様々な場所へフィールドワークに赴いた研究員が、今どのように「迂回路」を捉えているのか。出会ってきた場の個別性と、その背後に流れるある種の共通性についての、私たちのつたない話を、齋藤さんは的確な言葉で言い当ててみせた。「まるっきり違うのにそれでも似るもの」。それを求めて、齋藤さんは写真を撮っているのだという。

対談の最初に上映された齋藤さんの写真には、全く異なるものの奥にひそむ、わずかな重なり合いの瞬間が、見事に映し出されていた。それは、言葉ではない「ことば」として、じかに私の



イメージに語りかけてくる。齋藤さんは記す。「こうして筆談をするということ(略)言葉が直に、とどかないという思いは常にあり」、「言葉ではなくみつめあうことで、伝わるもの、それを声と呼びたい。(略)音声だけが『声』としてしまうと、それではあまりにもきゅうくつで。写真を通して、他者のまなざしとぶつかりあうことで、言葉もなく心になだれこんでくるものがあるなど知るようになり、『ただ見つめあうこと』『ただ存在すること』そのこと自体がもうすでに声なんだ、ということを感じたいんです。」

存在から発せられる声。それは、他者のたたくまいやしぐさ、目線、ふるまいをただ見つめようとするを通じて、ときにか細く、ときにあふれるように、聴きとられる。書画カメラを前にして並ぶ「陽子」さんと長津の手元には、自然と観客の視線が集まり、静寂のなか会話の行方が見守られる。書かれる言葉のやりとりは、音声を介したやりとりよりも精緻に、流れが跡づけられるのが見てとれる。だが私には、観客がしきりに「声」に耳をすましているかのように感じられた。

後半は、詩業家の上田假奈代さん、介護事業所を営む細川鉄平さん、美術家の高嶺格さん、長津によるパネルディスカッション「対話は可能か」。司会は、研究員の井尻貴子が務めた。

まず、長津から、東京迂回路研究が生まれた経緯と、このフォーラムの企画意図について語られた。対話というテーマは、たんに多数派／少数派に線引きされた世界で、少数派の人たちが生きやすくなるためのものではない。すでに共に生きている多様な人々のあいだに、無数に引かれる境界線。そのただなかで、異なる生を歩む私たちは、いかに「共にある」ことができるのか。そこで必要となる対話とは、どのようなものか。そして、対話を持つ機能は、何を可能にするのか。長津の問いかけは、社会に生きるすべての人たちに関係のあることとして、対話を捉えようとしていた。

詩業家の上田假奈代さんは、大阪・釜ヶ崎にある「喫茶店のふりをして、多様な人々が出会い、お互いに表現しあう場」ココロームを拠点に、高度経済成長を支えた日雇い労働の“おっちゃん”たちと日々を共にしている。ここは、お金がなくてもふらりと顔を見せ、悩みごとや困りごとを「なんか、なんか、なんか」と言いに行ける場所である。ココロームは、そんな人々と地域とをつなぐ場所として機能している。印象的なのは、その方向性が一方向的ではなく、まさに「お互いに表現し合う」多方向的なものであることだ。たとえば、夏祭りでの習字コーナー開設など“おっちゃん”たちが地域で表現する機会をつくる一方、野宿者におむすびを配ることで、私たちが野宿について考える機会をつくりだす、といったように。

「学びたい人が集まれば、そこが大学になる」という考えのもと、哲学、ガムラン、天文学など、様々な講座を開講する「釜ヶ崎芸術大学」というプロジェクトでは、さらなる出会いと触発が生まれている。芸術を「生き抜くための技術」と捉え、困難を生き抜いてきた人々と一緒に、釜ヶ崎から美を語り、芸術を語っていききたいと



いう上田さん。出張で“おっちゃん”たちと「一緒に出かけると、地域に横たわっている何かを刺激するみたいで、非常に面白い話が始まる」と述べる、その淡々とした語り口からは、日々の生活のなかで営まれてきた「存在の声」が、確かなものに感じられた。

細川鉄平さんは、大阪の介護事業所「<sup>ぼん</sup>凡」での日々を、写真とそれにまつわるエピソードにより紹介した。「嫁はん」と2人で始めた自宅兼事業所では、「介護」をめぐる関係と、「家族」をめぐる関係とが、わざと複雑に絡まり合い、オーバーラップされているように見える。ラップのように繰り返される、関西弁の独特なリズムも一役買っているようだ。たとえば、イライラして外に走り出た利用者に付いていった“嫁はん”が国道に投げられたと聞き、俺の嫁に何してくれてんねん！と怒る細川さん。「そのときは認知症とかもう関係ないんです、人とのあいだのことなんで」。しかも、そのとき「どつくぞ」と言った利用者に「私のやり方が悪いからです」と“嫁はん”が答えたと聞いて、今度は「そうやねん、うちの嫁はん、自分が悪いっていう体にして、こっちを責めてくるやろ」と、その利用者に共感する。こうして、個人的な関係に起因する感情が、別の人との関係における異なる感情と脈絡なくつながり、それがまた別の人の生きてきた関係に及ぶことによって、不意に全く別様の関係へとひらかれる瞬間がある。細川さんと“嫁はん”がにらみ合う気まずい雰囲気の中で、それまで頑として風呂に入らなかった人が「風呂に行くわ」と言った場面は、まさにそんな瞬間だったのだろう。

人と人がいれば、そこには様々な軋轢や揉めごとが生まれる。家族ともなれば、なおさらだ。利用者も、細川さん自身も、どうしようもない関係の絡まりのなかで生きている。しかし、そ

こに別の誰かがいることで、その人や出来事を介して全く異なる次元が繋がってしまうことが起きうる。そこでは、弱さをも抱えた説明のつかない存在こそが、逃れられない関係をやり過ごす鍵となるのだという。

美術家で、大学の准教授でもある高嶺格さんは、いつの頃からか、いわゆる周縁にいる人たちに対しての視線や気遣い、世界のなかでの自分の立ち位置などに、好奇心や問題意識を持つようになったという。そのような興味のもと、様々なアイデンティティーを持つ人と関わりながらつくってきた作品について語られた。たとえば、ニューヨークの路上で次々と服を交換していくパフォーマンスや、釜ヶ崎で何も書いていない真っ白なブラカードを持って、労働者に訴えたいことを書いてもらうアクションなど。なかでも、重度の身体障害のある木村さんとの介助を通じた関わり合いは、自分自身の身体と同化していくようなプロセスだったという。「最初はどのようにいいか全くわからなかったのが、互いの間だけで通じるコミュニケーションの方法を発明していくような感じ」を、高嶺さんは「共犯関係」と表現した。

しかし同時に、高嶺さんの問題意識は、「異なる人々との対話」に潜む引っかかりや、そのわからなさをも鋭く切り取ってみせる。目に見える人と見えない人が一緒に鑑賞する展覧会は、「なにかを共有すること、時間を共有することが、いかに幻想かっていうことに気づかされる」機会となった。震災後に制作されたビデオでは、魚の産地をめぐる交わされる店員と客との会話に、どっちに行っているかわからないグレーゾーンのような分断のありようが表現されていた。最近、高嶺さんは「自分が拷問されるかもしれない」という感覚がどっと迫っているという。『明日の拷問』展では、自分が拷問されてい

る場面を公募した。そこには、社会のある種切迫した空気の中で、自分が置かれている状況を問い、想像をクリアにして備えようと呼びかける意志があった。

休憩を挟んで、ディスカッションに入る。全く異なる言葉と語り方の根底にある、対話の様相。それは、「不確実なところに私たちがいて、その不確実さを、ギリギリながらも交えている」とき「その瞬間に判断を下さない」ことによって「不確実さに希望を持つ」ことであり（上田さん）、「自分と違う人に憑依し」「他人の経験を身体に沁みこませる」実践を通じて「対話は可能か」という問いに興味のない人のことを考える」ことであり（高嶺さん）、言葉での意思疎通がない人とやりとりを続けながら「いつか来るであろう、波が収まるときをひたすら待っている」（細川さん）ことである。そこには、人がいて、応えざるを得ない関係ができ、一日一日が鮮やかになっていく。そこで交わされる言葉やふるまいや投げかけは、言語／非言語のような対比ではなく、それぞれの「ことば」として在るように感じられた。

最後に、フロアから「言葉にならないような対話の様相をあえて言葉にしようとするのは、なぜか。そこに何があるのか」という質問があった。フォーラム全体、そして東京迂回路研究そのものに突きつけられた問いに、明確な答えはない。しかしそれでも、私たちの身体を通り抜けていく事柄を言葉にし、応答し続けていく。その場をいつも未来へ向けて、まだ見ぬ他者へ向けてひらいておこうとすることが、今できることなのではないかと思う。



## フォーラムレポート

## ① シンポジウム「対話は可能か？」 B

対話と境界線の線の上に  
想いを馳せること

沼田里衣

## ぬまたりい

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員、川崎医療福祉大学非常勤講師。「音遊びの会」、「おとあそび工房」主宰。知的障害者、乳幼児、小学生や高齢者と即興音楽ワークショップや公演活動を行いながら、技術や価値観の差異を超えた音楽作りについて研究を続けている。日本音楽療法学会認定音楽療法士、学術博士。

少し前のことだけど、ある写真を見て、ハッとすると、という初めての経験をしたのは、このシンポジウムの主催の研究所から送られてきた「JOURNAL 東京迂回路研究 1」をパラッと開いたときのことだった。目に飛び込んできた写真は、おじいさん、おばあさんたちと介護者が、和室のこたつや陽の当たるソファでのんびり過ごしている様子を撮ったもので、どうやら高齢者が日中にサービスを受けている様子を写したもののようだった。数名がソファで口を開けて寝ていたり、大勢で食事をしているだけなのに、なにか普通じゃない空気を放っていた。よく読むと、「井戸端げんき」という千葉県にあるユニークな宅老所である風景とのことだが、そこに写っている人や人形までもが、「直接的」とも思える方法で私の目に迫ってきたのだ。どうしてこんな写真が撮れるんだろう？と思っていたが、その写真家本人が今回のシンポジウムの最初の登壇者だった。

その写真家、齋藤陽道氏は、変装して「陽子」として我々の前に現れ(その意図は「ただなりたいから」という以上に自身からは明らかにはされなかった)、企画者の長津氏との筆談を通して次の言葉が語られた。

『「ただ見つめ合うこと』、『ただ存在すること』、そのこと自体がもうすでに声なんだ、ということを感じたい。佇まい、仕草、目線、そういうところばかり見て撮っているんですが、それでも十分に、いやとってもいい写真が撮れていて、ああ声かもしれない、と少しずつ』。

ここで私のメモは切れているが、聴覚障害のある齋藤氏は、存在を感じるという方法で相手を見ることによってその声を聞こうとし、その声を写真に撮ろうとしていたのだろう。ときどき、言葉を交わす前に、一瞬にして通じ合ってしまうような人に出会うことがあるが、この写

真家の「ただ見て、ただ存在を感じる」手法は、そうしたときに互いがとっているであろう、あの独特の対面の仕方と似ているのかもしれない。

さて、二人の対談の後、シンポジウムはパネルディスカッションのコーナーとなった。長津代表から最初に発せられた問いは、「対話の持つ機能がなにを可能にするのか」ということだ。

最初の発表者、詩人の上田假奈代氏からは、地図上にはない、ほとんどが男性で日雇い労働者や野宿者が多い「釜ヶ崎」と呼ばれる地の取り組みについて発表があった。上田氏が運営するココルームという「喫茶店のふりをした」場所では、ふらりと様々な相談事や問題が持ち込まれるそうだが、面白いのは、そうしたおっちゃんとの揉め事や解決の見えない関わりが日常を豊かなものにはしているのではないかと感じさせることだ。

私は以前、上田氏をコミュニティアートセミナーに講師として招待したことがあるが、印象に残っているのは、日雇い労働者のおっちゃんたちと紙芝居を披露する為にイギリスに行ったとき、あるおっちゃんが100円ショップのビニール袋一つ下げて空港にやってきて、配給の日程の為に早めに帰国したという話だ。私にとっては潔くシンプルな生き様に、クラッとくるような遅しさを感じた。そんな人たちと「釜ヶ崎芸



術大学」という試みをはじめたのだという。「芸術と冠したのは、芸術を生き抜くための技術と考えているから」なのだというのが、実際、教えられる側のおじさんたちは、そこでの教師である芸術家や大学教授に多くの技術を教えてもいるのだろう。今回の発表でも、上田氏が他の地域から招聘される際、「おじさんたちと一緒に出かけると、地域に横たわっているなにかを刺激するようで、非常に面白いお話がはじまる」という報告があった。対話というのは、教え、教えられる関係のバランスが両者の間で上手くとれる場が設定されたときに、成立するのかもしれない。

次の発表者は、家族を拡張していく方法で通所介護事業所サービス「凡」を運営している細川鉄平氏で、写真とともに日常の様々な出来事が紹介された。独特の関西弁の早口トークは、聴覚支援のUDトーク<sup>1</sup>の画面が崩壊するほどの破壊的なスピードで進められ、エピソードはオチのないまま次々と展開された。エピソードは、どれも病気や障害ゆえに理不尽な行動を起こす利用者との関わり合いの困難さから始まり、仕事とは言え「ほんまにどついたりかと思った」などの私的な感情を交えて進むのだが、最終的に複数の人がその場に関わることによって、不思議と困難や問題は宙に浮き、互いに関わり合



いながら生きていくことのそれ以下でも以上でもない現実が次々と過ぎ去っていくのだ。その現実を流す知恵とは、関係を複層的に捉えることにあるように思われた。

凡で過ごす10人程度のコミュニティにおいて、関係が凍りつき、場の雰囲気が悪くなるような場面はしょっちゅう起こる。それをどうにかやり過ごす知恵とは、「Aさんのことを許されへんけど、その人はBさんのことを許されへん気持ちを持て解消してくれるから、それでAさんも許す、という入れ子構造」だと言う。Bさんの困った行動に誰も強い口調で言えないのに、Aさんだけはそれをやってのけてしまうから、Aさんに対するマイナスの感情はそれで解消されてしまう、というのだ。「個人対個人でイデオロギー的な話は、合う合わないは、永遠に埋まらない。お互いの利害関係のない別の誰かがそこにいたら、なんか知らんけどその人を通じて繋がってしまうということがある」と、細川氏は述べる。このようにして、凡では、ただそこに居ることによって対話が複層的に機能するように場がつけられ、そこで生じた負の出来事もそのまま飲み込んでしまう、しなやかでしたたかなコミュニティが作られていた。

最後の発表者、美術家で大学の准教授でもある高嶺格氏からは、自らの好奇心を原動力とし

て、対話のなかに現れる関係の非対称性や見えない分断などを鮮やかな技術によってアート作品にしてきた例が語られた。その手法とは、抑圧されている人、周縁にいる人といった自分の好奇心の対象をいったん自分に憑依させ、そしてなぜ自分がその状態になったのかを観察することにより、そうした人々に対しての視線や気遣いがどのようなものなのか知るといったものだ。

例えば、「大きな休息 明日のためのガーデニング」展では、美術館に廃材を置いて意味のないものが並んでいる状態をつくり、目の見えない人とその空間を歩くという展覧会を行った。けれども、それは結果として、「お互いになにをやっているのか全くわからない」、「なんのためにこの時間が流れているのか全くわからない」という感想をもたらし、同じ時間を共有することが、いかに幻想かということに気づかされたのだと言う。目の見えない人が推測した物体の説明に対して、目の見える人が（配慮をして）間違っていると看做なかったとして、その気遣いすらも意味をなさないような「特殊な感覚」があったというのだ。廃材という意味のなさと行為の不可解さが、それを体験する者の感覚の違いをさらに複雑なものにしたのかもしれない。

こうした立場の違いに起因する分かち合えなさは、しかし、高嶺氏によればそれほど問題ではないと言う。「個人レベルでは、自分と違う人に憑依してみることは実践可能」で、「イデオロギーの違いの方がよっぽど厄介」という考えに至ったようだ。そこで高嶺氏は、現在の我々の身近で起こっている問題、原発の話題をすることがタブーであるような「分断」をテーマとした作品を紹介した。「分断状態をいかに解決するのか、と言ったときに、分断させている人との対決だと思った」という氏は、なぜ私たち



が分断させられてしまっているのかを、作品を通して問おうとする。

その他にも、現在進行中のものを含めて幾つかの作品の紹介があったが、実際に作品を体験したわけではないが、なにかかまりのつかぬ違和感のようなものやもやしたものが残される、その感覚こそ、こうした作品の醍醐味であり、作品が生きている証拠でもあるのだろうと感じた。分断、あるいはそこに引かれる境界線のその向こうに想いを馳せ、さらにそこから我々に何ができるのかを考えたとき、もしかするとその境界線がなにか違うもののようにふと思うことができるのかもしれない。高嶺氏の問いは、対立や分断という現実を各々が認識すること以上に、その線上にあるなにものかを思考することの可能性を示唆していたように思う。

シンポジウムは、この後ディスカッションと質問コーナーとなった。詳しくは割愛するが、

印象に残ったのは、上田氏が、高嶺氏の「時間を共有することが、いかに幻想か」という言葉を引き合いに出しつつ、細川氏の報告に対して、「不確定なところに私たちがいて、その不確定さをギリギリながらも交えて行くときに、幻想なんだけど、幻想をもう一度ひっくり返す、ということが日々あることを駆け抜けて行っているのだなあ、と思いました」という発言だ。

対話の機能について、様々な例から重要な知見を得ることができたシンポジウムであった。それは、もう一度日常のなかで捉え直してみても、その意味が本当に見えてくるのだろう。



## もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編・分析編

1年を通じ、実施してきた、  
もやもやフィールドワーク 調査編・報告と対話編・分析編。  
その過程でどんな人、出来事、言葉、思考との邂逅があったのか。  
ここでは、もやもやフィールドワークを通じて出会い、感じ、  
考えたことを記述するべく、プロジェクト全体についての考察と、  
調査を記録した調査ノートに掲載する。

# 「もやもやフィールドワーク」を振り返って

三宅博子、井尻貴子、長津結一郎、石橋鼓太郎

## 1 はじめに

調査研究「もやもやフィールドワーク」では、昨年度に引き続き、東京都内を中心に多様性と境界の問題と接して活動を展開している団体や活動現場へ赴き、短期間の参与観察と関係者への聞き取り調査を行う「調査編」、そこでの経験を報告し、参加者と共に対話する「報告と対話編」を行ってきた。また、今年度より、調査で得られた知見を理論的・方法的視点から検討するために、「分析編」を新設した。

今年度は、各編それぞれに内容や課題が深まっていた。ときに調査先の方々から、ときに報告と対話編の場から得られた多くの言葉が、私たちのプロジェクトの可変性を高め、そのたびごとに軌道修正をしながら進んでいくこととなった。分析編では、プロジェクトが目指す方向性について、何度も立ち止まって考える機会を得た。

本稿は、この取り組みの現時点の記録として、今年度「もやもやフィールドワーク」を通じ出合い、感じ、考えたことを記述する。具体的には、最初に「調査編」についての考察と、調査ノートに掲載する。次に、「報告と対話編」の報告を行う。最後に「分析編」に関する短い論考を掲載したい。

## 2 調査編

今年度は、より深く長期的な視点で調査先と関わることの必要性が浮き彫りとなってきた1年だった。多種多様な「境界線」の様相を浮かび上がらせることを目指し活動していた1年目の勢いに比べ、より慎重に一つひとつの事例に関わろうとする視点を持つこととなった。

調査に臨む態勢を見直すきっかけとなったのは、ある調査先からいただいた、次のような指摘——「東京迂回路研究」が目指す方向性への共感や、私たち研究員への信頼感はあるものの、わずかな回数の体験や聞き取りだけで活動内容をまとめ、報告をして終わるという取り上げ方に違和感がある、という指摘だった。すなわち、ブームに乗って取り上げるけれど、その活動意図を汲んでいるわけではない、いわば「つまみ食い」的な関わりである。

この指摘は、調査の依頼過程での齟齬というよりもっと深い、対話型実践研究としての「東京迂回路研究」が抱える課題のように思われた。調査先との対話やコラボレーションのあり方をどう考えるか。互いに「何か、面白そうなことやってるよね」と、ときどき情報交換し、さぐり合いながら、ゆるやかにつながり合う関係。

そして、「何かあったら、あそこがあるよね」というような、ある種の信頼感や安心感が得られる関係にお互いになっていくこと。調査先の方の指摘は、まさに調査先との「対話」を可能にする関係性についての至言であり、私たちの研究テーマである「迂回路」のありようをより深く理解するために必要なことについての助言でもあると思われた。

折しも、複数の調査現場に赴く過程で、私たち自身、継続的に調査現場と関わっていく必要性を痛感していた時期だった。というのも、多様な「迂回路」の様相に接して、新鮮な出会いの経験を記述しようとしていた1年目に比べ、「迂回路」が生まれかたちづくられていく過程や、そこで育まれている関係性の質などについて、より深く包括的に理解したいと考えるようになったからである。そのためには、短期・多量の調査ではなく、長期的に現場と関わりながら、調査視点をより精査していくことが望ましいと考ええるようになってきた。

このような経緯を経て、今年度の調査事例については論考というかたちをとらず、「調査ノート」として報告することにした。これは、形式的にも内容的にも、調査先に赴き考えたことについての現時点での中間報告である。本ジャーナルで「調査ノート」として公開することにより、調査先へ、また広く読者へとフィードバックし、調査の視点や論点を共に深めていくことができればと考えている。

「調査ノート」という形式で事例をまとめるにあたり、改めて気づいたこともいくつかあった。その一つが、事例報告の形式である。調査

の際には、あらかじめ決められた視点から現場を見ることを避けるため、私たちは敢えて調査項目を定めずに現場に臨んだ。また、インタビューにおいても、項目を定めず、研究員との会話のなかで自由に語っていただくという非構造化インタビューの形式をとってきた。しかし、事例をまとめるにあたっては、調査先の基本情報は何か、そこで起こっていたことは何か、そのことを私たちの視点からどのように見ることができなのか、といったように、事実と解釈をきちんと切り分けて記述することが必要と思われる。一般に、エスノグラフィーを分析する作業では、見出した視点に基づいて事例を再構成することが重要な手順の一つだが、その前の段階として、事例の何をどのように見たのかということを明らかにしておくことによって、調査自体の妥当性や信頼性も含めて開いておきたいと考えたためだ。そこで、「調査ノート」の項目を、調査意図や問いを記述する【はじめに】、事例の基本情報を記す【事例概要】、どのような調査を行ったかを記す【調査概要】、調査によって得られた内容を時系列で記述する【調査内容】、調査を通じて考えたことや見出した視点、今後の課題などを記す【考察】、とした。

「調査ノート」は、今年度行った7件の調査のうち、4件を取り上げて記述した。このなかには、「報告と対話編」で取り上げた事例も、取り上げていない事例もある。また、調査を行ったが、様々な事由により、ここには公開していない事例が複数あることも付記しておく。

## 当事者研究全国交流集会／べてるまつり

### 石橋鼓太郎

北海道の小さな町に、先進的な試みで世界的に有名な「浦河べてるの家」という精神障害等を抱えた「当事者」のための施設がある。年に一回の頻度で行われる「当事者研究全国交流集会」や「べてるまつり」というイベントには、日本中、世界中から様々な所属の人々がはるばる参加しに来るといふ。私たちメンバーも、折に触れてこの「べてる」という単語を耳にし、その試みについて興味を抱いていた。ここでは、**当事者研究全国交流集会／べてるまつり**に私たちが参加した経験から、その場のあり方や人々の関わり方を窺い知り、この小さな町での試みが大きな波及効果を持つに至った要因を探っていきたい。

#### 調査内容

参加観察

29日に北海道浦河町に到着した私たちは、30日朝、会場である浦河町文化会館へ向かった。受付のフロアに着くと、静かな町の様子とは一変して、ロビーに人が溢れ返っていた。受付で参加証を受け取り、700人収容のホールに入り、着席。やがて、浦河べてるの家に通う人々（「べてるメンバー」と呼ばれている）による挨拶と、手作りのパネルを持ちながらのパフォーマンスで、「第12回当事者研究全国交流集会」が幕を開けた。「当事者研究全国交流集会」は、「当事者研究」という取り組みに関する学術集会である。「当事者研究」とは、ある苦悩や生きづらさを抱える「当事者」が、自身の問題について仲間と共に行う「研究」で、2001年に浦河べてるの家で始まり、現在では分野を超えて国際的な広まりを見せている。第12回目となる今回は、「見る当事者研究」という全体テーマが設定されている。まず、研究者や医師による講演が行われた。スライドを用いた学術的な発表により、いかにも「学会発表」といった雰囲気に変貌する。次に、小さい会議室などを会場とする分科会に分かれて当事者研究の発表が行われた。分科会のテーマは、ばらばら／爆発系／子ども・発達／人間関係・恋愛の4つ。これらのテーマに基づき、自らの「苦労」のメカニズムと、その対処方法についての「研究」が発表された。ここでもスライドを用いた学会発表の形式を踏襲しつつ、しかしその口調には発表者の個性やキャラが色濃く表れていた。最後には、ホールに再び全員が集まり、全体会が行われた。司会者はいるものの、特に進め方が厳密に決まっている様子ではなく、その場で思いついた話を登壇者に振り、各

登壇者がそれに応えて自らの「苦労」の経験を語る、といったかたちでのフリートークが行われた。

翌日31日は、「第23回べてるまつり」が開催された。「べてるまつり」は、毎年夏に開催されるイベントで、もともとは浦河べてるの家の一年の活動を振り返る総会であったが、次第に全国から参加者が集まるようになったという。べてるメンバーが壇上にずらっと並び、テーマソングである《べてるまつりのうた～幻聴さんありがとう～》を歌って幕を開けた。午前中は、スリランカ、バングラデシュ、米国、韓国から、支援者、医療従事者、文化人類学者などのゲストを呼び、「世界の苦労と出会う」と題したシンポジウムが開催された。各国の精神障害の状況についてのプレゼンテーションが行われるさなか、べてるメンバーは壇上におり、発表の内容に反応して、または全く無関係に、動き回ったり発言したりしていた。午後に入ると、浦河べてる家の一年の活動報告が行われた。随所に替え歌や特技の披露などのパフォーマンスを交えつつ、活動部門ごとに、それぞれの一年の活動内容が報告された。最後に、べてるまつりの目玉企画とも言える、「幻覚&妄想大会」が行われた。べてるメンバーの具体的な「苦労」の経験がユーモラスに紹介され、「ピア・サポート賞」、「カムバック賞」、「特別賞」、「大賞」など、様々な名前で表彰されていった。

#### 考察

**ローカルな発表会とグローバルな聖地**

まず、この事例を、参加者の関わり方という視点から捉えてみよう。活動を振り返る総会からべてるまつりが発展したという経緯が示すように、進行や内容はべてるメンバーによる長年の蓄積に基づいた手作りであり、そ

事例概要	調査概要
<p>名称:浦河べてるの家 活動期間:1984年～現在 活動エリア:北海道浦河町 主催:社会福祉法人浦河べてるの家、有限会社福祉ショップべてるなど</p> <p>名称:当事者研究全国交流集会 活動期間:2004年～ 活動エリア:北海道浦河町(第9回は福島、第11回は東京)</p>	<p>主催:各回の当事者研究全国交流集会実行委員会</p> <p>名称:べてるまつり 活動期間:1992年～現在(毎年1回開催) 活動エリア:北海道浦河町 主催:べてるまつり実行委員会</p> <p><b>参加観察</b> 日時:2015年7月30日(木) 10:00～17:30、31日(金) 10:00～17:30 場所:浦河町総合文化会館 文化ホール 参加者数:各日約200名 調査者:長津、井尻、三宅、石橋、森、古屋 内容:第12回当事者研究全国交流集会 in 浦河(7月30日 10:00～17:30)、第23回べてるまつり in 浦河(7月31日 10:00～17:30)に参加</p> <p>インタビュー　なし</p>

のなかには、浦川べてるの家発祥の独特な用語、通称「べてる語」が特に説明もなく盛り込まれている。この視点から見ると、この事例は「ローカルな発表会」のように見えてくる。一方、当事者研究の実践者や、その取り組みに興味を持つ障害当事者、研究者、支援者、医療従事者などが、分野を問わず、日本中・世界中から集まっているという現象を見ると、この事例は当事者研究という試みにおける「グローバルな聖地」のようにも見えてくる。

**形式張りながらも緩やかな場**

次に、この事例を、その場のあり方という観点から見つめてみる。この事例は、学術集会としての一面を持っており、通常の学会でよく見られるような形式での研究者や支援者・医療従事者による発表やシンポジウムが、その内容の大きな部分を占めている。また、開会中は、随所でべてるメンバーの作詞による替え歌や手作り感溢れるパフォーマンスが挿入され、そのような区切りの場面は台本によってあらかじめ規定されているようであった。しかしその一方で、開会中、べてるメンバーは舞台上で自由な行動をとり、それを誰も咎めようとしない。また、べてるメンバーの手による司会・進行や、分科会における当事者研究の発表は、通常の学術集会とは明らかに異なるような、独特のゆったりとしたテンポ感を持っていた。つまり、この事例は、ある程度形式張った枠組みのなかで、参加者やべてるメンバーのふるまいの緩やかさが保証されているような場であったと言えるのではないだろうか。

**多様な関わり方を許容する儀礼**

以上で見えてきたように、当事者研究全国交流集会／べ

## 田んぼ de ミュージカル

### 三宅博子

お年寄りが徒党を組んでバイクで疾走し、田んぼの真ん中で催されるファッションショーでポーズを取り、カウボーイになって銃をぶっ放す。映画「田んぼ de ミュージカル」には、「高齢者の生きがいづくり」「生涯学習」などの言葉をはるかに越えた世界観のようなものと、そこはかとなく漂う“おかしみ”が感じられた。高齢者にとって、この映画と生きることの関係が、どのように捉えられているのだろうか。この映画にどのような世界観がこめられ、映画制作という表現行為を通じて何が生み出されているのだろうか。

#### 調査内容

インタビュー

暑い夏の午後、私たちが町民センターに着くと、電子案内板に「田んぼdeミュージカル打ち合わせ」の文字が表示されており、メンバーのみなさんが資料と飲み物を用意して待っていてくださった。事務局長で脚本担当の斉藤さんを中心に、みなさんにお話を伺った。

映画制作のきっかけは、町で行われた映画監督の崔洋一さんの講演会。「映画は誰でもつくれる」との言葉に、「じゃあわしらにもつくれるべか」「つくれる、つくれる」というやりとりがあり、始めることになったという。とはいえ、全員が素人。ゼロから勉強し、出演はもちろん、脚本、撮影、衣装、美術、音楽、編集、資金調達から上映に至るまで、全て自分たちの手でつくりあげてきた。

映画制作に携わる人々は、出演者・スタッフ含め毎回100人以上にのぼる。募集は公募ではなく、町職員や保健師だったメンバーが、お年寄り一人ひとりの個性や生活を把握して、個別に声をかける。集まってきたのは、好奇心が強い「変わった人」。「役場からはよく思われない、癖のある爺さん婆さん」が始めたことに、当初は町内の評判はよくなかったが、外からの評判が聞こえるにつれ、理解も変わってきたという。

多彩な作品がどのようにしてできていったのかという問いに対し、次のような答えが返ってきた。「最初は台詞がなくて済む、セミドキュメントみたいなかたちでやっただけけれども、評判がよくて。そうしたら今度は、だんだん台詞が欲しくなる」。もっと元気にダンスやアクションもできるんじゃないか、今度は西部劇にしよう、などとやっていくうちに、2000束の稲わらでキャット

ウォークをつくったり、家を燃やして火事の場面を撮ったり、セットも大がかりになっていった。

脚本は、全て斉藤さんが書いている。ストーリーは、穂別の戦後の歩みをドラマ化しているという。たとえば第3作『いい爺いライダー・The Tanbo』は、旧穂別町と旧鵜川町の合併がテーマとなっており、合併反対の老人が立ち上がりバイクで議会に乗り込む物語である。第2作『田んぼdeファッションショー』は、軍服や炭鉱の作業着など、生活のなかでどのような服との関わりがあったのかを知るセミドキュメンタリーになっている。また、お年寄りに聞いた話を寄せ集めてつくられたストーリーは、自分たちが経験したリアルなドラマである。斉藤さんは、そのよさをこう述べる。「その時代に自分もいたんだ、そのときに生きてきたんだ、発電所をつくるときも、炭鉱があるときも、それから炭鉱がなくなっていく、線路がなくなっていくっていうときに、そのお年寄りが生きていたんだという、それがドラマになっていく。(略)その人の体験が活かされるっていうことが、普通の映画のドラマと違って、いいなと思っている」。ときには、出演者が演技中に泣き出してしまうこともあるという。

メンバーの平均年齢は80歳超。映画づくりを支えるモチベーションは「楽しいから」。「みんな何かしら病気を抱えているが、でも明るい」。入院中でも外出許可をとり、「葬式出すな、お前の代わりはいねえんだぞ」を合言葉に撮影に臨む。死に対してもマイナスイメージはなく「生ききる。自分は楽しく生ききったのでいいんじゃないか」という考えだという。

なぜ映画なのか、という問いに「映画は残る」という答えが返ってきた。苦勞してつくりあげた作品を家族や隣近所の人が観て、評価する。どこかに呼ばれて、みんな

事例概要	調査概要	
<div> <div><div>名称:「田んぼ de ミュージカル」</div></div> <div> <div>活動期間:2003年～現在</div> <div>活動エリア:北海道むかわ町穂別(旧穂別町)</div> <div>主催:田んぼdeミュージカル委員会</div> <div>備考:(作品)第1作『田んぼdeミュージカル』(2003年)、第2作『田んぼdeファッションショー』(2005年)、第3作『いい爺いライダー・The Tanbo』(2008年)、第4作『赤い夕陽の爺yule!』(2011年)、第5作短編オムニバス『紅い花 白い花 咲き乱れ』第1話「ここはわたらの天国だ 林業編」撮影中 (2016年2月クランクアップ予定)</div> </div> </div>	<div> <div><div>参与観察 なし</div></div> <div> <div>インタビュー</div> <div>日時:2015年8月1日(土)14:00～15:30</div> <div>場所:北海道むかわ町穂別町民センター会議室</div> <div>インタビュー: 斉藤征義さん(事務局長、脚本)、山本義栄さん(代表)、高橋博志さん(出演)、本多紀子さん(絵コンテ、撮影)、船木孝裕さん(むかわ町職員、広報)</div> <div>インタビュアー:長津、井尻、三宅、石橋</div> </div> </div>	<div> <div><div>備考:インタビューの際にいただいた新聞記事のアーカイブ(2008～2015年、41件)、映画のDVD、ウェブサイトやFacebook等の情報も、一次データとして参照した。</div></div></div>

と観て共有して、また確認できる。100年後、町がもしなくなったとしても映画は残る。田んぼdeミュージカルでは、本編とは別に、その人だけの出演シーンを集めて編集した「面影ビデオ」をつくっているという。

最近では、様々なところから依頼を受け、映画づくりのノウハウを伝えている。「違う地域と映画を通じてつながれるって、すごい発見だと思う」。「この歳で『名刺ください』って言われることに感動したって。名刺なんてあるはずないと思わないでいてくれるんだ、と言う人がいて、そういうことなんだって」。

#### 考察

映画を通じて「生ききる」こと

冒頭で述べたように、「田んぼdeミュージカル」には、いわゆる高齢者福祉的な文化活動とも、通常の映画づくりとも異なる、独自の世界観や味わいのようなものが感じられる。それがどのようにしてつくられたのかに興味を持って話を伺うなかで、最も印象に残ったのが「生ききる」という言葉である。お年寄りたちは、映画づくりを通して「生ききる」という生のありようを見出していったのではないだろうか。

ものづくりの喜び

では、「生ききる」という生のありようが、どのようにして見出されていったのか。それは、映画づくりという未知の課題に対する好奇心と、制作過程の楽しさに導かれてだと思われる。わからない、できないことだらけの課題を、自らの人生経験や知識を活かし、知恵を出し合っで、なんとか乗り越えていく。そうしたプリコラージュ的な方法によって、通常の商業映画にはない「わたらの

映画」のスタイルが確立されていく。

「高齢者」であることを活かしつつ、「高齢者観」を覆す

「田んぼdeミュージカル」の特徴は、高齢者ならではの制約や決めごとが作品の枠組みをかたちづくっていくと同時に、その過程が結果的にいわゆる「高齢者観」を覆していることにあると思われる。加齢で台詞が覚えられないからミュージカルという形式が選ばれ、しかし高齢者なりに歌い踊ることで「できること」の可能性を一つずつ広げ、高齢者を「衰えゆく存在」としてではなく、「生ききる」存在として表現してみせる。また、高齢者ができること／できないことを活かし、あえてギャップを見せるところに“おかしみ”や“味わい”が生まれるのではないかと思われる。

「生ききる」ことが生む、新たな関係

映画を通じて「生ききる」ことによって、自己や他者とのあいだに、新たな関係が生まれる。ひたすら生きてきた自分の存在、生きてきた場所や時代との関わりが、映画を通じて確かに跡づけられる。この「存在の記録」は、家族や隣近所、さらには映画を観た人々の眼差しによって、お年寄り自身に照らし返される。さらに、映画づくりを通じて新たな人々との出会いが生まれ、「映画に出ている高齢者」ではない個としての「私」という存在を再確認する機会を得る。映画制作を通じて生まれるこのような関係性のなかで、「生ききる」ことがある種の実感として感じられ、100年後の未来へ賭けることへとつながっているのではないだろうか。

<sup>[1]</sup> お話を伺った、代表の山本義栄さんが、2015年11月3日に逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

## 国際基督教大学ジェンダー研究センター「ふわカフェ」

### 長津結一郎

多様な人々がそのままいられるような空間を保証することを考えるには、どのような手法をもって、継続的に「場」が運営されているのかを検討する必要があるだろう。今回の調査対象となった事例は、「対話」をキーワードに場づくりを行っている。多様な人々がそのままいられるような空間を目指すうえで、「対話」はどのように機能しているのだろうか。また、どのような配慮がなされているのだろうか。

### 調査内容

#### インタビュー

CGSは、JR武蔵境駅からバスで20分ほどの、ICU内にある。初めて訪れた私たちは、構内を10分ほど迷いながら進み、ようやくたどり着いた。第一教育研究棟3階にあるその部屋の窓にはレインボーの旗が掲げられ、ゆったりと腰掛けられるソファがある。本や雑誌が溢れ返り雑然としている一方で、どこか居心地のよさを感じさせられる場所であった。にこやかに迎えてくださったのは事務局長の加藤悠二さん。レインボー柄のワイシャツがよく似合っている。

加藤さんによれば、CGS自体が、学内に「マイノリティが中心にいられる場をつくらなくちゃいけない」という創設者の思いを持って立ち上げられた場所だという。ICUは日本で唯一「ジェンダー・セクシュアリティ研究」を専攻できる大学であり、その研究と教育の両輪を成立させるための、学生たちの居場所としてひらかれているということだった。そのなかで、「セクシュアリティと言いつつ、LGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー)のこだけしかフォローできておらず、それ以外の多様なセクシュアリティについてフォローできていないのではないか。せめておしゃべりできる場だけでもつくったほうがいい」と実施され始めたのが「ふわカフェ」である。他のセクシュアル・マイノリティの支援団体等が実施しているイベントを参考に、一様に捉えられない性のあり方を生きる人々が、自分のことを語りやすく過ごせる場をつくることを目指したのだ。

特徴的なのは、デザイン、グランドルール、そしてトークテーマだ。デザインについては、「いつもはゴシック

体を使っているけど、丸ゴシック体を使うとか、ゆるキャラを導入してみる」といったことを試み、様々な人が気軽にアクセスしやすい告知媒体にすることを心がけているという。グランドルールは、「ふわカフェ」の開始前と途中休憩後に参加者全員で確認する、「今日のお話はここだけの話」「話したくないことは話さない、話せなかったことで諦めない」「一度に話すのは、ひとりだけ」などといった約束事である。このことで、話す人それぞれの安全を確保しているのだという。トークテーマは、「つきあうって、なに?」「留学どうだった?」「カミングアウト」「就活/働くこと」などといった、毎回異なるテーマが設けられている。開始当初はフリートーク形式だったが、単純な世間話が多くなる、話を切り出すことが苦手な人が発言できない、ジェンダー・セクシュアリティの話題に関して普段から話し慣れている人の話が長くなるということが課題となり、4回目から「トークテーマ」を導入したところ、参加者がジェンダー・セクシュアリティの話題に集中して話せるようになったという。

#### 参与観察①

フォーラム「対話は可能か?」の1プログラムとして、「出張ふわカフェ in 東京迂回路研究」を実施した。それに際して、ふわカフェ世話人の加藤さんと、以前世話人を務めていた上田真央さんにファシリテーションをお願いした。普段のふわカフェとは場所や設定が異なり、実施時間も短いため、事前調整に多くの時間を割いた。

7月10日(木)には、加藤さんから申し込み方法について提案があった。「ふわカフェでは本名を明かすことに抵抗がある参加者が結構いるので」仮名やハンドルネームなどでの申し込みができるようにしてほしい、という

### 事例概要

名称:国際基督教大学ジェンダー研究センター「ふわカフェ」  
活動期間:2012年～現在(学期期間中に月1回のペースで実施)  
活動エリア:国際基督教大学(以下ICU)  
主催:国際基督教大学ジェンダー研究センター(以下CGS)  
備考:CGSでの実施のほか、「出張ふわカフェ」として他大学での実施経験もあり。

インタビュー  
日時:2015年5月14日(木)  
場所:CGS  
インタビュイー:加藤悠二(CGS事務局長)  
インタビュアー:長津、井尻、三宅、石橋、古屋

参与観察  
日時:2015年9月6日(日) 11:00～12:30  
場所:芝の家(港区芝3-26-10)  
参加者数、参加者属性:約10名、一般  
内容:フォーラム「対話は可能か?」のプログラムとして共同で出張ふわカフェを実施。

ものであった。また、8月7日(金)に行われた事前打ち合わせでは、細やかに参加環境を配慮する2人のふるまいが印象に残った。たとえば芝の家は、路面に向けてガラスの窓があるため、「のぞこうと思えば簡単に外からのぞけてしまう」ことが懸念された。また普段はコミュニティ喫茶としてオープンしているため、クローズ日であっても近隣の方がのぞきにくる可能性があることも懸念された。そこで対応を協議し、窓全体をレインボーラッグで覆い、受付を入り口すぐに設置スタッフが常駐する、という提案がなされ、各所調整のうえ、そのように実施することにした。

当日の様子はグランドルールに従い、記述は控えるが、必ずしも、ジェンダー・セクシュアリティの問題について普段から考えている人ばかりではない、様々な背景の人々から、今回のトークテーマ「カミングアウト」についての対話広がったようだ。

### 考察

#### 「ジェンダー・セクシュアリティ」という

#### 枠組みのなかでの自由さ

出張ふわカフェでは、「カミングアウト」という言葉への距離感や感じ方の違いが印象に残る。必ずしも、ジェンダー・セクシュアリティのことに関する「カミングアウト」ではないが、「自分にとってとても大切に、避けては通れないが、普段は語りにくいこと」(自身のアイデンティティに関わること)が、多様に語られたようであった。ジェンダー・セクシュアリティの問題という「枠」を設けることで、ジェンダー・セクシュアリティを軸にしながら、生活やふるまい、日常が浮き彫りになっているようだった。

#### 閉じながら開かれる場

「私が何者である」という宣言をせずに、日常生活での経験が語られることで、ジェンダーやセクシュアリティについて、必ずしも概念共有や合意を行わないで語られる話のなかに、他の参加者の生活経験と呼応する部分がある。閉じられた場でありながら、そこで行われたやりとりは自己を規定するアイデンティティをめぐる問題について、普遍的な問いを提起しているように思われた。

#### 「ふわっ」とした発言を守る安全

性のあり方は、普及しつつあるLGBTという言葉のようなカテゴリ化するものだけでは捉えきれない。ふわカフェはそのような、普段は少数の立場におかれることが多い人々のなかでも、さらにカテゴリ化される言葉で語ることでできない人も語れるような場づくりを行っている。そのために、グランドルールを共有し、閉じられた場をつくることで、参加者が「ふわっ」とした状態のままにいられることを大切にしているようだ。そのことで、少しずつ自分のなかで言語化したり、ほかの人の意見に触れる経験を積むことができる。「私はセクシュアリティを決めませんか、決まるものだとも思ってません、みたいな立場を取っている人」が、「立場自体は一貫しているんだけども、その語り方とか、それに対する自信みたいなものが、ちょっとずつ上がっていく」と加藤さんは実感を語っていた(このことを加藤さんが「芯のある"ふわっ"」と称していたのが印象に残る)。このように、「カミングアウト」に至る場合もそうでない場合も、自らのなかで逡巡するだけでは得られないアイデンティティを獲得しているように思われた。

## 立石ディスコ・アフタヌーン

### 石橋鼓太郎

立石に、障害のある人が参加するディスコがある。その名も、「立石ディスコ・アフタヌーン」。私たちは、新聞記事でたまたまこの事例について知り、障害のある人を対象としてボランティアでディスコを開催するという試みのユニークさに惹かれた。この場では、障害のある人とない人がどのようなかたちで共存しているのだろうか。また、その場の成り立ちに、「ディスコ」という形式は、どのように関与しているのだろうか。

立石ディスコ・アフタヌーン

立石ディスコ・アフタヌーン

立石ディスコ・アフタヌーン

#### 調査内容

##### 参与観察

東京の下町・立石の路地を狭い路地を入ったところ、ゲームセンターの上の階に、会場の「Club House夢幻」がある。向かう道すがら、「チャリティーイベント　立石DISCO　本日開催」と書かれたのぼりがいくつか立っているのが見えた。会場にたどり着くと、ハロウィン当日ということもあり、入口からたくさん装飾が施されている。参加者は30名ほどであり、ハロウィンの仮装をしている人の姿もちらほらと見受けられた。

会場内で待っていると、曲が流れ始めた。はじめは、《君の瞳に恋してる》や《ヴィーナス》、《ダンシング・シスター》など、70年代・80年代のディスコナンバーが中心。ディスコは、クラブとは違い、ある程度振り付けが決まっている。明らかに踊りのキレがよい、「フロアリーダー」的な人に注目しながら、私たちも見よう見まねで踊ってみる。曲が変わるごとに、「この曲の振り付けはどんな感じだったか」といった会話が参加者同士で生まれ、事前に決められた振り付けが思い出される。といっても、必ずしも全員が同じ踊りを踊っているわけではなく、ソファに座りながら見ている人や、なんとなく体を動かしているだけの人、自由に自分の振り付けで踊っている人も混在していた。

やがて、《恋するフォーチュンクッキー》や《目指せ！ポケモンマスター》、《だんご三兄弟》などといった、最近のポップスや、アニメの主題歌なども流れてきた。後で聞くとところによると、参加者による曲のリクエストを受け付けており、それをDJが選曲して流すこともあるらしい。この場合は、振り付けが決められていないことが

多いので、全員が自由に体を動かしていた。

開始より1時間くらい過ぎた頃、「フロアリーダー」的な人によって、振り付け講座が行われた。この日に初めて踊る曲について、順を追ってゆっくりと振り付けが説明された。この曲は後ほどフロアでの選曲に挿入され、その際には「さっきやった曲だ!」と盛り上がりを見せていた。

終わりの時間が近づいた頃には、参加者同士でのポジションの移動や触れ合いなど、インタラクティブな要素が強い振り付けの曲が流れ、最後は、全員で輪になって前の人の肩に手を乗せ、曲に合わせてぐるぐると回り、幕を閉じた。

##### インタビュー

本番終了後、運営委員会総務局長のMr.Kame-chanさんにお話を伺った。普段は会社員で、2005年にこの「立石ディスコ」に出会った。70・80年代、青春時代のディスコブームを思い出しつつ、いろいろな会場に出入りしたが、立石ディスコの空気が一番アットホームで入りやすかったという。

運営委員会のコアスタッフは約5名で、その全員がボランティアである。もともとは地元のメンバーが多かったが、今では遠くから立石まで通っている人が多い。コアスタッフの全員がDJも兼任しており、それぞれが自分の得意な分野に関してリードしつつ、全般的な業務を行っている。実施の約10日前に運営会議が行われ、設営は前日の深夜に行われる。

「立石ディスコ」が始まった2003年当初は、一般の人対象の「ナイト」のみの開催であったが、2005年より障害のある人が参加する「アフタヌーン」がスタートした。

事例概要		調査概要
<p>名称:立石ディスコ・アフタヌーン</p> <p>活動期間:2005年～現在(隔月1回実施)</p> <p>活動エリア:葛飾区立石(Club House夢幻)</p> <p>主催:立石DISCOナイト実行委員会</p>	<p><b>参与観察</b></p> <p>日時:2015年10月31日(日)15:00～17:30</p> <p>場所:Club House夢幻</p> <p>参加者数:30名程度</p> <p>調査者:長津、井尻、三宅、石橋、古屋</p> <p>内容:[立石ディスコ・アフタヌーン]に参加した。なお、この回は、「2015 HALLO-WEEN-DISCO NIGHT」というテーマのもとで開催された。</p>	<p><b>インタビュー</b></p> <p>日時:2015年10月31日(日)18:00～19:00</p> <p>場所:Club House夢幻</p> <p>インタビュー:Mr.Kame-chan(立石ディスコ実行委員会 総務局長)</p> <p>インタビュー:長津、井尻、三宅、石橋、古屋</p>

立石ディスコ・アフタヌーンの様子(2015年10月31日撮影)

知的障害のある人を対象に就労移行支援を行う事業所と、何らかの形でコラボレーションができないか、という話が出たのがきっかけだったという。

「アフタヌーン」と「ナイト」の雰囲気の違いを聞いてみると、特に両者に違いはないという。社会のために何かをやっているわけではなく、一緒に遊ぶという感覚でこの活動を続けており、自分にとって夢や遊びの象徴であるディスコを通して人を楽しませていくことが何よりも楽しいと語る。また、「あの子はこの曲をかけると楽しそうに踊る」といったかたちで、ある特定の参加者の顔を思い浮かべながらDJをすることもしばしばあるという。

一方で、Mr.Kame-chanさんは、「アフタヌーン」開始後に加わったメンバーであるため、実施するに至った経緯や意図についてのお話を詳しく伺うことはできなかった。

#### 考察

##### フラットさが端的に表れている場

立石ディスコに参加して最も印象的だったことは、この場にはフラットさが端的に表れている、ということである。大音量で音楽が流れるさなか、「障害者」と「健常者」は、互いにそのあいだにある境界を特別に意識することもなく、ただ互いに踊りを楽しんでいるように見えた。このような場のありようは、誰かの強力なファシリテートによって実現されることも多いが、この場では特に誰かが障害のある人に対し特別な措置を講じているわけではなく、結果的にそうなっているように思えた。

##### ディスコの場と文化

このような場の成立には、「ディスコ」が持つ性質が

### 3 報告と対話編

今年度、3回の「報告と対話編」を実施してきた<sup>1</sup>。木曜日の夜、会場となった「芝の家」で過ごす2時間は、私たちに多くのものをもたらした。

6月、第7回<sup>2</sup>では、報告のテーマを「JOURNAL 東京迂回路研究 1について」、対話・哲学カフェのテーマを「対話は可能か」とした。

まず、昨年度の活動を経て発行した「JOURNAL 東京迂回路研究 1」から、「東京迂回路研究」や「対話型実践研究」という言葉に至った経緯と、研究において「対話」を意識させられた場面についての報告を行った。また、「対話は可能か」というテーマへ向けて、「対話」とは言葉を尽くすことなのか、それでもわかり合えない他者とは「対話」は成立し得ないのか、そもそも「対話」に言葉は必要なのか、時間と空間を越えた「対話」も成り立ち得るのではないかと、などといった問題提起を行った。

続く哲学カフェでは、最初に対話という言葉に対するイメージを出し合うことから始めた。そこから「対話と会話の違いは何か」、「対話は人と人にあるものか、それとも個人のなかにしかないものなのか」、「対話をするとはそもそもいいことなのか」、「対話を拒否するのはどういうときか」といった問いが参加者から出された。対話とは、「他者と相対すること」「個人のなかにしかないもの」「自分の価値観に切り込まれる感覚」「他者をなかつたことにしないことから始まるもの」……。この場において、常に意識させられたのは、「対話は可能か」とい

うテーマについての「対話」が、この場で成立していると言えるだろうかという問いだ。それは、「対話」とは何かという問いと強く結びついている。

9月、第8回では報告のテーマを「当事者研究とその文化——べてるまつりに参加した経験から」、対話・哲学カフェのテーマを「文化が生まれるところとは」とした。

その先駆的な取り組みから精神保健福祉分野ではその名が知られる「浦河べてるの家／べてるまつり」については、これまで様々な分野の研究者たちが取り上げてきた。そんななか、いわば「べてる初心者」の私たちが何か言えることはあるのだろうか。メンバーで議論を重ねるなか、今回の報告に向けて見出したのは「場」「文化」という視点だった。その考察については、調査ノートをご参照いただきたい。

続く哲学カフェは、文化という言葉を開いて思い浮かぶことをあげることから始まり、そこで出された「いたみ」——「痛み」「悼み」という言葉を中心に、対話は展開していった。「文化は二人以上の人が集まったところで生まれる。その意味で、一人では生まれないと考えていたけれど、一人ひとりのなかにも文化素と呼べるようなものがあるのではないか。」「異なるものに触れ、何か齟齬や摩擦が生じたときに、それをなんとか乗り越えようと互いにあれこれするなかで生まれるのが文化なのではないか。」「文化を失ったときの痛みは耐え難い。」「ひとつの文化に属することが与えてくれる安心感もあるのではないか。」「こうした意見が、静かに積み重なっていった。

12月、第9回では報告のテーマを「閉じながら開かれる場——ふわカフェの実践から」、対話・哲学カフェのテーマを「安全な場所はどこにあるのか」とした。

報告では、東京都三鷹市の国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)が実施する、ジェンダーやセクシュアリティのことについてみんなで“ふわっと”おしゃべりする場「ふわカフェ」の実践について、その語りの場としてのありようをめぐって、何がそのあり方を可能にしているのか、そしてそこは何を可能にする場なのかということを中心に考えを述べた。

続く哲学カフェでは、自分にとって安全と感じられる場所——ゆりかご、シェルター、誰も自分を知らない都会の雑踏や海外などがあがった——を述べ合い、そこから「安全と安心は異なるのか」、「何に対しての安全、安心なのか」といった問いを軸に進んでいった。さらに、「差別」という問題について、差別とは何か、どこから差別かといったことについて、考え、話し合った。

2月、第10回として、「報告：共にみること——視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップに参加して」を開催する。なお、この回の対話・哲学カフェのテーマは、当日、集まった参加者と共にその場で考える予定だ。

こうした場を実施してきて実感しているのは、その場に身をおくという経験そのものが、私たちが「研究」に取り組む姿勢に大きな影響を与えているということだ。ある事柄について、ある視点から考察する。それを、他者に伝える。

さらに、それを受け止めた他者と共に問いを立て、考える。報告と対話編とは、その意味で、他者と共に、考えを編み上げる場だ。

もちろん、考えを編み上げると言っても、すぐに一つの答えを出すことを目的とはしていない。たった2時間で、答えが出るようなことではないとも思う。では、考えることに意味がないのかというと、そうではない。話し合い、考え、言葉を積み重ねていった先に、2時間前には見えていなかった光景がある。それは確かだ。その光景は、晴れわたる空のようにクリアなこともあれば、もやに包まれているかのようによやけていることもあるだろう。いずれにしてもそれは、一人ではたどり着けなかった光景である。それは、この社会で、人に、場所に、私たちが「事例」と呼ぶものに出会うということに似ているように思う。出合いを繰り返し、新たな世界の見方に触れ、自らの考えを更新していく。このことは、事例から見出されるボトムアップ的な視点と、「東京迂回路研究」とは何かと問い返す包括的な視点との往還の作業の一つであり、本質であると私たちは考えている。

### 4 分析編

#### 分析編の位置づけ

「もやもやフィールドワーク」では、昨年度よりも調査編・報告と対話編の機会を減らし、代わりに「分析編」という枠組みを新設した。この分析編は当初、「もやもやフィールドワーク」の調査で得られた知見をどのように研究的視点で見つめることができるか検討するものとして

位置づけていた。しかしながら、回数を重ねるごとにその位置づけが微妙に異なってきた。すなわち、調査一つひとつの事例をどのように分析するかという視点よりも、「東京迂回路研究」という取り組み自体を研究的視点からどのように考えることができるのかという視点に移ってきたのである。分析編では、フィールドワーク、研究、迂回路、そして表現という、研究の根幹に関わるようなキーワードを専門家の知見を借りながら掘り下げた。そのことで、私たちは、東京迂回路研究の目指すものに対し、何度も立ち止まり、振り返り、熟考する機会を得ることができた。

本稿では、分析編の各回の様子を順に振り返り、そこで出された論点をまとめて、東京迂回路研究とは何かについて考察を試みる。

### 各回の議論

ここでは、まず分析編を開催する手順を示してから、各回の議論の様子を振り返る。

分析編を実施するにあたり、私たちは次のような手順をとった。1) 事前にゲストコメンテーター(以下、ゲスト)とのやりとりを通じてテーマを設定する。2) そのテーマに基づいて研究員が発表資料をつくり、ゲストにお送りする。3) ゲストは研究員の発表資料に対するコメントの資料を作成し、当日に臨む。4) 当日は、研究員の発表とそれに対するコメントの後、参加者全員によるディスカッションを行い、多様な視点からテーマを掘り下げることが試みた。

### 第1回: フィールドワークとは何か

第1回は、筑波大学図書館情報メディア系助

教で医療人類学者の照山絢子さんをゲストに迎え、「フィールドワーク」をテーマに開催した。照山さんは、発達障害の文化人類学的研究を主な研究領域とし、1970年代以降に広まった現代エスノグラフィー<sup>3</sup>の様々な方法論にも造詣が深い研究者である。

研究員の発表は、「フィールドワークの過程で直面した問い」と題して、昨年度、現場(調査先)に赴くなかで感じた問いを改めて見つけ、その問いが生まれた背景について考察した。生き抜くための「迂回路」のフィールドワークという、これまでに経験のない調査に手探りで飛び込んだ私たちは、その過程で様々な問いに直面した。たとえば、調査前の依頼の段階で、こちらの調査意図が誤解されて葛藤を生み、交渉が難航するという問題。また、ある特定領域の実践を行っている現場に赴いた際、自らがその領域に身をおいていない場合、経験のなさから生じる「気づかなさ」にどう向き合うかという、特定領域に内在する独特のコミュニケーションの読み解きをめぐる問題。そして、調査の場で感じた「もやもや」した疑問やよくわからない感覚をどのように記述すればよいのか、その場での経験からどのようにしてテーマを見出すかという、言語化と記述の問題。

こうした“フィールドワークあるある”とも言える問いに対し、照山さんはフィールドワークを中心とした質的調査を行う際の基本的事項を参照しながら、丁寧にコメントをくださった。まず、調査意図や目的は、調査者・調査対象者・調査助成を行う支援者などによって、本来異なるものである。エスノグラフィーを書く一書かれる関係とは、それ自体圧倒的に非対称な権力

関係に基づいており、「こういうふうにかいたので、調査をさせてください」ということはできない。むしろ、現場の思いや意図といった「声」をすくい上げていく謙虚さを持ちながら、調査意図のすり合わせをしていく必要がある。コミュニケーションの読み解きについても同様に、コミュニケーションの取り方をめぐる規則や意味は普遍的に同質ではなく、コミュニティによって無数に異なるため、現場での出来事を丁寧に読みといていく必要がある。

なかでも印象的だったのは、フィールドにおける「自分」に意識的になるという、自己再帰的な記述の方法である。私は現場の何をどのように知ったのか、それを知っている私とは誰か。私から見て「フィールドの特性」と思われることが、実はそれを見ている自分の見方の特性に由来するのだ。このことをエスノグラフィーのなかに丹念に記述していくことで、現場での対等な関係のなかに自分を位置づけることができる。調査する自分が何者であり、どう現場と関わっていくのかを意識しながらフィールドワークを行うことによって、調査の過程で生じた齟齬そのものを分析の俎上に載せることが可能だということは、私たちにとって大きな気づきとなった。

### 第2回: 研究とは何か

第2回は、東京大学先端科学技術研究センター准教授で、小児科医でもある熊谷晋一郎さんをゲストに迎え、『「研究』とは?——当事者研究の視座から考える、東京迂回路研究』と題して開催した。熊谷さんの主な研究分野は「当事者研究」<sup>4</sup>。熊谷さんは、この当事者研究

という実践のなかで起こっていることについて、様々な側面から検証している。

最初に、熊谷さんから提示されたのは「人間にとって“研究する”とはどういうことなのか」という問いである。研究とは、「苦勞」に対して人がとる行動の一つと考えられる。人は、生きていくうえでの苦勞に直面したとき、現実を目的に近づけるという仕方では早急に問題解決を目指すことが多い。しかし、研究という仕方では苦勞と向き合う場合、問題解決という目的をいったん棚上げし、今起こっている現実に対し「なぜ?」と問う態度が必要になる。現実を一つひとつ見ていくと、そこに発見が生まれる。研究とは、目的と現実のあいだを、知識を生み出すことによって埋めようとする、価値創造の営みだという。

これを受けて、研究員からは、研究という立場に託している思いや、東京迂回路研究の研究者・クエスチョンについて発表した。そもそも、このプロジェクトが、東京の迂回路をさぐる日々を綴った「日記」でもなく、迂回路を獲得しているのはなぜか。それは、社会における多様性と境界の問題を早急に解決することからいったん離れて、迂回路がつけられている現場に臨むことで、多様な人々が社会で共に生き抜く技法のヒントを見出したという思いからである。このことを踏まえて、私たち研究員は次のような仮説を立てた。多様な人々が共に生きていくことが、少数派の人々の問題ではなく「すでに共に生きている」私たち全員の問題なのだとしたら、東京迂回路研究とは、異なる人々が共に生きることに関する当事者研究と言えるのではな

いだろうか。

これに対し、熊谷さんは、迂回路を研究するうえで押さえておくべき視点を的確に指摘された。その一つは、個人と個人のあいだにある境界線と、一人の個人の内にある境界線の問題である。自分のなかにある、変えられる領域と変えられない領域。当事者研究では、その境界を見極めて、変えられないものを受け入れ、変えられるものを変えていこうとする。こうした個人内の境界に注目することで、個人を隔てていると思っていた境界が案外簡単に消失し、そこに共通性を見出せることがある。

研究のポジショナリティについても、重要な問いかけがあった。調査の現場で、共に生きることやむにやまれない状況に直面しながら日々の実践を行う人々は、すでに迂回路を研究しているということができる。だとするならば、東京迂回路研究の立場は、多様な迂回路に共通する生成メカニズムを明らかにしようとする「メタ研究」なのか、それとも、研究員自身が多様な人々と共に生きるうえでやむにやまれなさを抱えた当事者として、横並びの立場で行う「ベタ研究」なのか。いずれにせよ、自分たちの立場を見極め、研究のポジショナリティをわきまえておく必要がある。

そのうえで、熊谷さんは、生きていくうえでの「やむにやまれなさから出発する研究に関心を寄せる迂回路研究は、『当事者研究とは何か』という問いと、ドンピシャで接続する」と述べ、現場で蓄えられた言語化しにくい知恵を、自己の経験や記憶についての真なる知識を得ようとする実践として読みといていく分析の視点<sup>5</sup>を提案してくださった。

### 第3回：迂回路とは何か

第3回は、立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授で文化人類学者の小川さやかさんをゲストに迎え、「生き抜くための〈狡知〉から、迂回路を読みとく」と題して開催した。小川さんは、アフリカ・タンザニアの古着商人の商慣行と仲間関係を巡る独特のコミュニケーションの様相を、「狡知」(ウジャンジャ)の視点から読み解いた、気鋭の人類学者である。また、生存学研究センター副センター長として、障老病異を軸とする研究・教育活動に携わっている。

研究員の発表では、「東京迂回路研究」における『迂回路』とは何か」と題し、私たちの研究で一体何を「迂回路」として見ているのかについて、改めて捉え直すことを試みた。発表に際して私たちは、迂回路という言葉を決して定義づけ、定義に照らして事例を見ていく作業を行った。仮の定義とは次のようなものだ。「行く手を阻まれる状況があり、それに対し、誰かによって、やむを得ず、一時的につくられる、生き抜いていくための方便ともいえるべき道であり、別の道をたどろうとも、同じ目的地に到ろうとする道」。この定義に照らして調査事例を見てみると、多くの要素を見出すことができた。現場ではいずれも、疾病や障害、社会的偏見、制度的不備などに起因する困難が見られる。それに対し、多くの現場では「やむにやまれぬ」状況と向かい合い、独自の「方便」ともいえるべき概念やふるまいを編み出し、既存の社会的枠組みに収まらない活動を展開している。

しかしながら、定義に当てはまらない事象もあった。そこで、私たちは、事例に合わせて定義を書き換えていった。たとえば、「一時的」

という言葉は、単純に時間を区切って臨時に行うというよりも、目指す目標のために状況に合わせて即興的にふるまい、常に場や関係の可変性に開かれていることを含意する「仮設的」がよりふさわしいと思われた。そして迂回路とは、もとの道と「同じ目的地に到ろうとする」のではなく、「それがつくられることによって、もとの道のありようをも変化させ、新たな共通の場所へ到ろうとする道」なのではないかと提起した。

これに対し、小川さんからは、文化人類学的な概念や自身のフィールドでの体験をひもときながら、「迂回路」が生まれる源泉やその多様化のための戦術、さらには他者理解についての考え方や合法性／違法性についての考えにまで話を広げ、丁寧にコメントをいただいた。

迂回路の源泉とは、人間が首尾一貫した主体として合理的判断を下しながら生きていく存在だとする人間観とは異なる、人々の生のありようを問い直すところにあるのではないかと。むしろ、一貫しない「豹変」の奥にある何かをこそ、分析の射程に入れる必要がある。日々の生活での切迫した状況を切り抜けていくには、その場であり合わせの材料を用いて臨機応変に物事を成し遂げるプリコラージュや、自身が寄って立つ立場さえも臨機応変に変えつつ切り抜けるを重ねるダブルプレイヤーという戦術がある。突発的な窮地に陥ったときの嘘やごまかし、逆切れといった人間行為を、私たちは社会的役割としての「ペルソナ」に隠された「素顔」の発露として否定的に価値づけがちだが、状況に応じて即興的にペルソナをつけかえて切り抜けていくところが知恵や社会性の発揮だと捉えると、そ

の「変身術」「切り抜け術」が世界に遍在していることに気づく。

また、ある集団における一貫性のなさは、何かが失敗しても何かが成功すればよいという多様化戦略の実践と言える。考えの統一はしないし、行為を規制するルールもつからない。そうすることで、それぞれのアイデアと行為にみんなが「賭け」、不確定で予測不可能な未来に「ゆだねる」。そこでは、集団に潜在する異なりそのものが、迂回路を生み出す源泉となる。

他者理解とは、ある事象だけを見てその是非を問うのではなく、その相容れない「異なりの接点」を切り口に、全体を包括的に捉えて突破していく方法もある。迂回路の創出を考えると、社会制度や規範には違反しているけれども、ここまでは許されるという領域を生活の便宜を考えながら拡大していくことが重要ではないだろうか。

### 第4回：〈表現する〉とはどういうことか

第4回は、九州大学大学院芸術工学研究院准教授で芸術社会学者の中村美亜さんをゲストに迎え、「〈表現する〉とはどういうことか——非言語コミュニケーションを通して考える、東京迂回路研究」と題して開催した。中村さんは芸術社会学の立場から、人間と芸術との関係を真摯に問い続けている。また、九州大学ソーシャルアートラボで、社会の課題を解決し、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践＝ソーシャルアートの研究や教育に取り組む。

研究員の発表は、「〈表現する〉とはどういうことか——もやもやフィールドワーク調査編の事例から」と題し、調査事例から見出される表

現の検討を通じて、私たちの研究で表現をどのように捉えたらよいかについて考えた。精神障害のある人が絵画制作を行う〈造形教室〉では、描かれた絵や、その制作過程だけが表現とは言えない。作品制作を通じて自らと向き合うこと、「合評会」での意見交換を通じて人との関係のなかで自分を発見すること、〈造形教室〉という場を続けることで精神科医療や精神障害に別の見方を示すこと、そのいずれも表現として捉えることができる。また、認知症のお年寄りを中心に多様な人が集まる宅老所「井戸端げんき」は、芸術表現活動を行うことを目的とした場ではない。だが、多様な人々がただそこにいて、かといって無関係にいるわけでもないような場の成り立ちと、そのような場を育む営みそのものが表現のように思われる。両事例からは、その場で育てられている人と人、人と場、場と制度との関係性のなかに、表現が生まれるのではないかと考えた。

これに対し、中村さんは、関係性のなかに表れ出るものを表現とする見方では何でも表現と言えてしまい、議論が曖昧になることを指摘したうえで、表現と関係性の問題をどう理解していけばよいかについて、記号論、社会学、認知科学の知見を参照して論じていった。一般に、表現とは、心理や感情など内面にあるものを外に表すこと、また表情や身振り、記号、言語、造形物などとして表されたものとされる。だが、表現するものとされるものとの関係は必ずしも自明ではない。表現を介した関係性を考えるうえで、〈表現する〉という行為から捉え直す必要性がある。

中村さんによれば、〈表現する〉とは、常に限

定された時間・空間において、表現の送り手と受け手との関係性のなかで成り立つ。このことを記号論<sup>6</sup>の立場から見ると、私たちを実際の経験や実在の人間、環境の諸要素と結びつける記号である「アイコン」や「インデックス」が重要である。なかでも、生の経験そのものが表現されているインデックスは、表現を介した人と人との共感的結びつきを可能にするという。また社会学の立場から見ると、〈表現する〉とは、あらかじめ伝えたいメッセージが込められた表現があって、それが送り手から受け手へと伝達されることではない。むしろ、〈表現する〉という行為によって、メッセージとその受け手が同時に生み出される。このとき、表現は、その反応の仕方を命じるのではなく、受け手の知覚や行為のきっかけを与える媒介（アフォーダンス）の役割を果たす。さらに認知科学の立場から見ると、〈表現する〉ときにどのようなことが起こってくるのかは、与えられる刺激、刺激を受ける内的状況、刺激が与えられたときの外部環境の兼ね合いによって決まってくる。

以上のことから、〈表現する〉ことが、人と人との間で起き、かつ内的な身体性、環境や文化との相互作用のなかで生まれることがわかる。私たちは、〈表現する〉ことによって、異なる他者と「共にある」経験をつくり、互いに共感できるポイントをさぐっているのではないか。このことについて、中村さんの次の言葉が印象に残った。「文化的に類型化された表現とは違う表現こそが、生と密接に結びついている。その、個と個の関係を新たにつくっていくような表現を取り上げ、あちこちで重ね合わせていくことが必要ではないか」。

「東京迂回路研究」とは何か——分析編の議論から

ここまで、分析編の各回で行われた議論を振り返ってきた。ここで、冒頭の問いに立ち返り、東京迂回路研究とは何かについて考えてみたい。

本節の冒頭で、分析編の位置づけが、調査一つひとつの事例をどのように分析するかから、東京迂回路研究という取り組み自体を研究的視点からどのように考えることができるのかに移ってきたことを述べた。研究の根幹に関わるキーワードを、ゲストや参加者と共に吟味する過程で明らかになってきたのは、私たちが研究を進めていくうえでの問いそのものであったように思われる。すなわち、東京迂回路研究のリサーチ・クエスチョンと、それを明らかにしていくための道筋が、次第に明確なかたちを取り始めたのである。

そもそも、当法人の団体ステイトメントには、研究の目的が次のように記されていた。「これから目指していきたいのは、『多様性』と『境界』に関する諸問題に対して、『対話』と『表現』を通じ、新たな『迂回路』(diversion)をつくることです」。また、その方法は次のようなものだった。「『迂回路』とは、(略)多様な存在が共に生き抜くために獲得した『もうひとつの道』である。(略)『対話』を通じてその道をたどることで、これからの社会を生き抜くための『表現』を見つけ出したい」。この、抽象的な意志表明の言葉を、研究の言葉の一つずつ置き換えていく作業が、分析編の取り組みだったと言えるだろう。

では、東京迂回路研究のリサーチ・クエスチョンとは何か。それは、多様な人々が共に生き抜くための道＝「迂回路」がどのようにしてつくられていくのかという、迂回路の生成メカニズ

ムを明らかにすることである。熊谷さんの指摘から、調査の現場で、共に生きることのやむにやまれない状況に直面しながら日々の実践を行う人々は、すでに迂回路の実践研究を行っている先行研究事例だということが見えてきた。したがって、調査研究「もやもやフィールドワーク」は、多様な迂回路に共通する生成メカニズムを明らかにする、メタ研究である。一方、フォーラム「対話は可能か」の実施を通じて試みたことは、調査研究で得られた知見を公開し、多様な迂回路をつなぐ、一つの実践研究と位置づけられる。

なぜ、迂回路を研究するのか。その背景にあるのは、小川さんが指摘された「迂回路」の源泉、すなわち、人間が首尾一貫した主体として合理的判断を下しながら生きていく存在だとする人間観や、人々があらかじめ割り当てられた場所で与えられた役割を果たすことによって社会が構成されているとする社会観とは異なる、人々の多様な生のありようを問い直すことである。

研究を通じて、明らかにしたい迂回路とは何か。「迂回路」を定義づける作業によって見出されたのは、「それがつくられることによって、もとの道のありようをも変化させ、新たな共通の場所へ到ろうとする道」だった。このことは、迂回路に関する個々の実践が、その実践が行われるきっかけとなるような状況そのものを「なぜ?」と問い直す視点を含む、と問い換えることができる。

迂回路研究の方法は、どのようなものか。「迂回路」を定義する作業からは、先行研究事例や参加者によるコメントなどの「声」を反映して、仮説を検証・修正していく、ボトムアップの方

法を取り得ることがわかった。また、迂回路研究がどのような方法をとるべきかについては、当事者研究の進め方を研究する「当事者研究の研究」が示唆するように、メタ研究の視点から、個々の研究を検証していくことも必要である。

研究する私たちとは誰か。フィールドにおける自己再帰性の問題や、研究のポジショナリティについての指摘からは、私たちが個々の現場において何者として何をしようとしているのかを、常に明確にしておく必要があることを再認識した。迂回路の生成メカニズムを研究しようとする場合、私たちが研究者としての非対称な関係を現場に持ち込むことになるのは避けられない。そのことを意識せずに、迂回路を探求する“仲間”のような態度で現場と接することは、現場の人々の混乱や不信を招くこともある。逆に、自らの立場をわきまえて現場に相対することで、そこに生じる齟齬をも、分析の対象とすることができる。このことは、「対話」は可能かと常に自らに問いながら、対話することをあきらめない態度ともつながるだろう。

今後へ向けての着眼点は何か。分析編を振り返ってみて今、私たちは「東京迂回路研究」を研究として成り立たせるスタート地点にようやくたどり着いたのではないかと感じる。現場で感じた「もやもや」した感覚や違和感をそのまま描写するのではなく、ある視点から切り取ることによって立ち現われる事象を、丁寧に記述していくこと。議論を通して、そのための着眼点を数多くいただいた。それはたとえば、人々の一貫しない態度や言動の奥にある「生活の論理」であり、困難な状況を即興的に切り抜けていく、知恵や社会性の発揮としての「変身術」であり、

生と密接に結びつき、個と個の関係を新たにつくっていく表現である。また、相容れない他者どうしの「異なりの接点」を切り口に、「共にある」という共感のポイントをさぐっていくことも、重要な課題である。

最後に、迂回路を研究することによって、何が得られるのか。分析編に参加したある参加者は、その意義を次のように述べた。「普遍的知識の確立ではなく、関わり合う人と知恵や知識を共有できる『場』や『言葉』をつくっていくこと」。来年度、3年目を迎える「東京迂回路研究」を通して、このことに取り組んでいきたい。

## 5 おわりに

本稿では、今年度もやもやフィールドワークを通じ出会い、感じ、考えたことを記述してきた。次年度へ向けた課題は、各編において見出した視点や課題を、どのように連関させながら「東京迂回路研究」としてかたちにしていくのか、ということだ。一つひとつの現場はあまりにも多様で、それぞれが固有の場である。そして、それを見る理論的視点は、研究しようとする自分とは何かに常に立ち返り、目の前に見えている風景を問い直すことで、はじめて洗練されていく。本研究では、個々の現場の事例から見出されるボトムアップ的な視点と、「東京迂回路研究」とは何かと問い返す包括的な視点との往還を通して、生き抜くための「迂回路」がつくれる様相を明らかにしていきたい。

- 
- 1 2016年2月25日に4回を数えるが、本稿は実施前に執筆しているため、この回についての記述は含まない。
  - 2 昨年度からの継続開催のため、今年度1回目は「第7回」であった。
  - 3 現代エスノグラフィーとは、調査者から見た真実の部分性や、調査者と被調査者の非対称な権力関係に意識的になり、調査者自身を含むその場での重層的な関係性を分析の対象としていくようなエスノグラフィーの考え方や、種々の方法論を指す。詳細は、藤田結子、北村文編、照山純子他著(2013)『ワードマップ現代エスノグラフィー：新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社、を参照。
  - 4 当事者研究とは、北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点「べてるの家」からうまれた試みで、障害や病気を持った本人が、仲間の力を借りながら、症状や日常生活上の苦勞など、自らの困りごとについて研究する実践のことである。詳細は、浦河べてるの家(2005)『べてるの家の当事者研究』医学書院、石原孝二編(2013)『当事者研究の研究』医学書院、等を参照。
  - 5 詳細は、熊谷晋一郎「当事者研究の理論・方法・意義」(2014)、障害学研究(10)、63-74頁を参照。
  - 6 パースの記号論によれば、記号には、アイコン、インデックス、シンボルという3つの種類がある。アイコン(類像)とは、現実の事象を模倣した記号。たとえば、絵画に描かれた馬は、実在の馬を模倣したアイコンである。インデックス(指標)とは、ある事象が特定の別の事象を指し示す記号として機能する場合である。たとえば、テレビCMの音楽を聴いて特定の商品を思い浮かべるとき、テレビCMの音楽は商品のインデックスとして機能する。シンボル(象徴)とは、記号が表すものと表されるものとの関係が、実際の事物の関係ではなく言語によって定義づけられ、社会的合意によって成立している記号。
-

## おわりに

今年度も多くの人の力を借りながら、東京迂回路研究はかたちづくられてきた。本書でも大きく取り上げたフォーラム「対話は可能か？」では、出演いただいたり、企画と一緒に立ち上げたりすることとなったゲストのみなさまにはもちろんのこと、運営に際しても多くの方にお世話になった。なかでもcon\*tioの山口里佳さん、杉千種さんの仕事なくしてはフォーラムの実現はあり得なかつただろう。「UDトーク」を通じての情報保障の業務一式のみならず、今後の活動に対して有益な助言をいただいたShamrock Records株式会社の青木秀仁さんにもお世話になった。また、チラシのビジュアルに作品の一部を提供くださった森俊輔さん、当日の記録を担ってくださった富田了平さん、渡辺一充さん、当日ボランティアスタッフとして運営を手伝ってくださった河本珠奈さん、大政愛さん、富樫悠紀子さん、五藤真さん、内山丈寛さんにも感謝を申し上げたい。

共催団体として歩んできた東京アートポイント計画のディレクター森司さん、プログラムオフィサー坂本有理さん、古屋梨奈さんとは共に悩み、共に価値観を広げる日々を過ごしてきた。また広報担当課長の森隆一郎さんをはじめとする広報チームの愛情あふれる活動に後押しされ、東京迂回路研究という言葉をあちこちで目にし、耳にするようになってきた。事務所をおく港区芝界隈では、「芝三丁目場づくり研究所」の坂倉杏介さんと、「芝の家」事務局長の加藤亮子さんを中心としたみなさまに日々支えられてきた。勤務日は、事務所の向かいの「芝の家」で一緒に昼ごはんの食卓を囲み、お裾分けをいただくのを楽しみにする一日でもある。また、昨年度から継続してデザインやイラストなどでご協力いただいている宮田篤さん、LOCAL DESIGN LABの井手大さんにも感謝したい。

本書の制作にあたっては、昨年度に続いて齋藤陽道さんの写真で「対話は可能か？」という問いに対し新たな側面から応答いただいた。齋藤さんとは本年度、様々なかたちで活動を共にすることができたことに、大きな喜びを感じている。また、スタジオ・プントビルゴラの吉村雄大さんによるビジュアルデザインが、私たちの活動の大きな推進力になっていることは疑いようもない。

私たちの活動に対して、ときに大きく共感し、ときに厳しく指摘をしてくださる方との出会いもあった。その指摘はそのまま、問いとして突きつけられる。私たちは、一体なぜ、何を、

どのように、誰として「研究」するのか？ そのことで何を得ようとしているのか？ 今年度事業をすすめるなかで、幾度となく自問してきた問いである。

たった数回足を運んだだけでは、決してすべてをわかることなんてできない(そもそも、すべてをわかることなどできるのだろうか)。しかし、そこに行かなければ出会えない人、活動、光景があり、それらは私たちに大きな示唆を与えてくれる。それは、私たちを含む、生きづらさを抱える多様な人が生き抜くためのヒントになり得る。だからこそ、その実践の一端を垣間見ているにすぎないという自覚を強く持ちながら、「迂回路」という視点のもと現れる、新たな側面を丁寧に見ていきたいという思いを強くする1年間だった。それはまた、自らがたどり着いた「迂回路」というコンセプトをもとにあれこれ考えるに止まらず、それを言語化し、体系化し、説得力を持つかたちで語りかけるような言葉を獲得しようと試行錯誤してきた1年間でもあった。

今年度は昨年度に続いて迂回路を「さぐる」ことから始め、それらを「つなぐ」ことはどのようなことなのか思考することを目指してきた。それはまさに、言葉を探すプロセスだったのかもしれない。

「JOURNAL 東京迂回路研究 2」。本書は、平成27年度「東京迂回路研究」事業で実施してきたことを、今いちど振り返り、そこで何が起こっていたのかを論じ、考えることを目的に制作した。昨年度同様、事業を総論的に振り返る記録集ではなく、旅路で出会い、対話し、考え、見出したことの記録集として編纂している。それは、私たちが本プロジェクトに、そして“研究”という営みに、「迂回路」——すなわち、境界線によって隔てられている何かと何かのあいだの関係の変容を促し、社会にありうる別の姿を見出そうとしているからである。

今年度の事業を進めていくなかでいただいた、いくつかの鋭い指摘を思い出す。そうした指摘を受け、自問自答を繰り返しながら対話を続けていくことは「迂回路」を見出すための、重要なプロセスなのだと思う。

次年度も迂回路についての旅は続く。それは、異なるもの同士をつなげるための言葉を探していく旅である。途中で何度も立ち止まり、振り返り、確かめながら少しずつ旅を進め、東京の「迂回路」を多角的な視点で掘り起こしていきたい。

多様性と境界に関する対話と表現の研究所  
長津結一郎、井尻貴子、三宅博子、石橋鼓太郎

## 平成27年度実施事業

### 調査研究

もやもやフィールドワーク

調査編・報告と対話編・分析編

「もやもやフィールドワーク」は、平成26年度に「調査編」と「報告と対話編」の二つを開催。

平成27年度はこれに「分析編」を加え開催した。

#### 調査編：

東京都を中心に国内の医療・福祉施設やケアに関わる団体、活動現場を訪れ、参与観察と聞き取りを行う

#### 報告と対話編：

調査の報告とそれに基づいたテーマ設定による対話を行い、多様性と境界に関わる

活動とそれをめぐる状況への考察を深める

#### 分析編：

研究者をゲストに招き、

理論的・方法的な視座から考察を深める

以上のことを目的とし行い、調査・報告・対話・分析のサイクルを通じ、様々な場を捉え直すことを試みた。

### 調査編

(調査先、調査年月日順)

- 国際基督教大学ジェンダー研究センター「ふわカフェ」(東京都・三鷹市)
- 第12回当事者研究全国交流大会・第23回べてるまつりin浦河(北海道・浦河町)
- 田んぼdeミュージカル(北海道・むかわ町)
- 立石ディスコ・アフタヌーン(東京都・葛飾区)
- NPO法人 ぱれっと(東京都・渋谷区)
- 視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ(全域)
- 芝の家(東京都・港区)

### 報告と対話編

会場：芝の家(東京都・港区)

第7回 6月18日

第1部 報告：「JOURNAL 東京迂回路研究 1」について

第2部 対話：哲学カフェ「対話は可能か」

第8回 9月17日

第1部 報告：当事者研究とその文化  
——べてるまつりに参加した経験から

第2部 対話：哲学カフェ「文化が生まれるところとは」

第9回 12月17日

第1部 報告：閉じながら開かれる場  
——ふわカフェの実践から

第2部 対話：哲学カフェ  
「安全な場所はどこにあるのか」

第10回 平成28年2月25日

第1部 報告：共にみること  
——視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップに参加して

第2部 対話：哲学カフェ  
※テーマは当日集まったみなさんと決めます

### 分析編

会場：アーツカウンシル東京 ROOM302 (東京都・千代田区)

第1回 5月30日

ゲストコメンテーター：照山絢子  
(筑波大学図書館情報メディア系助教・医療人類学)

第2回 8月29日

ゲストコメンテーター：熊谷晋一郎  
(東京大学先端科学技術研究センター准教授・当事者研究)

テーマ：「研究」とは？

——当事者研究の視座から考える、東京迂回路研究

第3回 12月23日

ゲストコメンテーター：小川さやか  
(立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授・文化人類学)

テーマ：生き抜くための〈狡知〉から、迂回路を読みとく

第4回 平成28年1月23日

ゲストコメンテーター：中村美亜  
(九州大学大学院芸術工学研究院准教授・芸術社会学)

テーマ：〈表現する〉とはどういうことか？

——非言語コミュニケーションを通して考える東京迂回路研究

### 実践研究

フォーラム：対話は可能か？

多様な人が共に生きている東京。障害、ケア、労働、住処、ジェンダーやセクシュアリティ、国籍——その多様さゆえに、人々は日々、複層的な境界線を引き、引かれ、暮らしている。境界線は、ときに人を守りもするが、孤立や分断、生きづらさを生み出すこともあるだろう。異なる生を歩むわたしたちは、いかに「共に」あることができるのか。そこにはどのような「対話」が必要となるのか。「対話は可能か？」——介護士、詩人、研究者、写真家、美術家、プロジェクトディレクター、「おばちゃん」らによるトークセッションや対談、ライブなどを通じ、いまこの社会にあるわたしたちが、共に生きるということを体感し、そのありようについて考える3日間のフォーラムを開催した。

——9月4日——

#### 前夜祭

#### 「幻聴妄想かるた」大会

進行：益山弘太郎、新澤克憲、富樫悠紀子(ハーモニー)

会場：芝の家(東京都・港区)

——9月5日——

#### プログラム1

トークセッション「共に生きるということ」

①加藤正裕(井戸端げんき)×長嶋元子(元子おばちゃん家)

②荒木順子(akta)×高橋伸行(やさしい美術プロジェクト)

③坂倉杏介(ご近所イノベーション学校)×吉川由美(ENVISI)

④ディスカッション

会場：SHIBAURA HOUSE 1F リビング(東京都・港区)

#### プログラム2

ライブ「Living Together × 東京迂回路研究」

朗読：GOMESS (ラッパー)、齋藤陽道(写真家)、

佐藤郁夫(ふれいず東京)

Live：GOMESS (ラッパー)

進行：長津結一郎、マダム ボンジュール・ジャンジ

会場：SHIBAURA HOUSE 5F パードルルーム(東京都・港区)

——9月6日——

#### プログラム3

出張ふわカフェ in 東京迂回路研究

トークテーマ：カミングアウト

進行：加藤悠二(CGS職員)、上田真央(元CGS非常勤助手)

会場：芝の家(東京都・港区)

#### プログラム4

シンポジウム「対話は可能か？」

①対談「まるっきり違うのにそれでも似るもの

——迂回路をめぐって」

登壇者：齋藤陽道(写真家)×長津結一郎(多様性と境界に関する対話と表現の研究所)※筆談による対談

②パネルディスカッション「対話は可能か？」

登壇者：高嶺格(美術家)、上田假奈代(NPO法人ココルーム代表)、細川鉄平(通所介護事業所 凡代表)、長津結一郎(多様性と境界に関する対話と表現の研究所)

進行：井尻貴子(多様性と境界に関する対話と表現の研究所)

会場：慶應義塾大学三田キャンパス東館G-SEC LAB.

(東京都・港区)

### 活動報告・論考

JOURNAL 東京迂回路研究 2 (平成28年3月発行)

1年間の活動の報告と、論考をまとめたジャーナル。

第2号では、2年間の活動を経て、少しずつ

変化してきた「対話型実践研究」のありようを改めて

考えること、また、今年度1年間かけて取り組んできた

問い「対話は可能か？」へ応答することを試みる。

※記載情報はすべて実施時のもの



## 研究所日誌から

多様性と境界に関する対話と表現の研究所では、今年度、研究員が日々の出会いや出来事のなかで、見聞きしたこと、考えたことを、「研究所日誌：週報」というかたちで綴ってきた。ここでは、そのなかから9本を紹介する。

## 新体制と、なりました

2015年04月24日(井尻)

長津、三宅、井尻の3人が中心となり運営してきた当研究所。今年度は、新たなメンバーを迎え、新体制で各事業を実施していきます。インターンスタッフの石橋鼓太郎くんに加え、今年度実施を予定しているフォーラムの運営スタッフとして、con\*tioの二人を迎えます。

con\*tioは、星と星をつないで星座をつくるように、福祉と社会を結ぶことを目的としたユニット。福祉施設のオリジナルプロダクトのディレクションや、マーケットへの出店、障害のあるアーティストの作品集の企画・編集など、様々なかたちで福祉と社会を「結ぶ」「つなぐ」なんでも屋さん。心強いです。

### 【本日の活動】

#### 企画会議

引き続き、今年度の企画会議。昨年度より継続実施となる「もやもやフィールドワーク」調査編のスケジュール調整や、今年度より始める分析編、そして今年いちばん大きなイベントとなりそうなフォーラムについて。具体的な内容をつめると共に、こういった事業を通し、自分たちは何に触れ、問い、発信していきたいのかについて話し合いました。

#### con\*tioとのミーティング

今年度のフォーラムについて、con\*tioを交えてミーティング。さらに、お互いの最近の仕事や、足を運んだ福祉施設などのこと、「おもしろい」人や場所などについて情報交換。

どのような視点でその場を捉えるか



により、その場の見え方は変わってくる。当たり前なのですが、日々の業務のなかでそれを言語化し、検討し、共有する時間を持つことは、実は難しかったです。でもこういった活動においては、それはとても重要なこと。必要不可欠な時間として意識的に行っています。今年度も、急ぎ、道を行くのではなく、丁寧に、うろうろしながら進んでいきたいです。

## 「JOURNAL 東京迂回路研究1」を読んで

2015年05月12日(石橋)

はじめまして！今年度よりdiver-sionにインターンとして参加させていただいております、石橋鼓太郎と申します。東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科の学部4年生で、学校では市民参加型の音楽プロジェクトについての実践と研究を行っています。どうぞよろしく申し上げます！さて、インターンスタッフとしての初仕事！ということで、diver-sionの昨年度の記録集「JOURNAL 東京迂回路研究1」を読んだうえで、思ったこと、感じたことなどを、つらつらと書かせていただきたいと思います。「多様性」と「境界」というキーワードについて、私が日頃から感じていることは、「境界」を全く引かずに「多

様性」を尊重するかたちで他者と接することはなかなか難しい、ということ。たとえば、電車で外国語が聞こえてきたとき、私は「あ、外国人がいる」とどうしても思ってしまいます。特に差別感情はないつもりなのですが、そのようにしてしまうことそのものが差別なのではないか、そしてそれが誰かにとっての「生きづらさ」につながってしまうのではないか、さらには自分も何らかのかたちでそのように見られていることがあるのではないか、などと思い、自己嫌悪に陥ることもしばしば。しかし、このJOURNALを読むと、そのような「境界」をずらしたり、揺さぶったり、あるいはその「境界」を超えたところで他者と共感したりすることにより、「多様性」を実感することは可能である、ということが、あらゆる事例を通じて見えてくるように感じました。いくつか印象に残った言葉を引用してみたいと思います。

まず、LGBTの里親制度に関する活動を行っている「RFC(レインボーフォスターケア)」の代表、藤めぐみさんの言葉。

「だんだん私は、マジョリティ／マイノリティの境界線など本当は存在しないのではないかという思いにとらわれていった。そこにはグラデーションがあるだけではないか、と」。

続いて、千葉県木更津市にある宅老所「井戸端げんき」の管理者、加藤正裕さんの言葉です。

「不器用でいるんなところを追い出されてきたボクが追い出されないようにするには、まずはボクが誰も追い出さないってこと。だから誰でも受け入れるし、排除もしない。そうしている限りはきっとボクは追い出

されないだろうって思っている」。「JOURNAL 東京迂回路研究1」で取り上げられている事例では、制度からの逸脱／その再解釈、独特の空気感を持つ場づくり、「個」同士の関係性の重視など、様々な仕掛けによって、人間がどうしても引いてしまう「境界」をずらしたり、揺さぶったりしています。このような仕掛けを通して、誰かが生きづらさを感じている、ということ、を、「マジョリティ」と「境界」で隔てられた「マイノリティ」の問題として扱わないこと。そこには「多様性」によるグラデーションがあるだけだ、ということを実感すること。そして、そのような考え方や感覚の転換を通して、多様な他者と共に受け入れ合うこと。このようなことが、誰かが生きづらさを感じたときの、生き抜くための「迂回路」の探求において、必要とされているのではないのでしょうか。そして、この冊子を読むと、東京迂回路研究における「対話型実践研究」も、そのような事例について調査し、対話の場を設けることで、他者との間にある価値観の「境界」を揺さぶり、参加者が自分自身の「迂回路」を探せるようなデザインがなされており、扱う事例と入れ子構造になっていることがわかります。今年度は、このような活動をさらに深め、広げていくべく、プログラムを計画中です。昨年度と同じく様々な施設／団体を調査しつつ、さらに研究的な視点を深めたり、現場同士の声をつなげたりするような、新しい試みも目下進行中です。今後も何度か週報に登場させていたどうかと思いますが、どうか温かい目で見守っていただければと思います(笑)。ではまた！

## 来た道と、行く道：齋藤陽道さんとの打ち合わせ、NPO法人総会

2015年06月15日(三宅)



こんにちは、スタッフの三宅です。今週は、私たちが「東京迂回路研究」で辿ってきた道を振り返り、これから歩もうとする道に思いを馳せるような、二つのことがありました。一つは、写真家の齋藤陽道さんとの打ち合わせ。齋藤さんは、「JOURNAL 東京迂回路研究1」の巻頭ページで、千葉県木更津市にある宅老所「井戸端げんき」の写真を撮っていただきました。私たちがもやもやフィールドワークで訪れた際にすっかり魅了されたその場の空気感や、人と人が互いの存在を許し合いながら共にいる姿が、見事に映し出されています。アウトドアっぽい帽子にサンダル履き、少年のようないでたちで現れた齋藤さん。打ち合わせは、筆談を中心に、身振り、声での会話を交えて行います。この様子がとても面白いのです。文字を書くスピードや大きさ、位置、筆圧、クセ、互いのテンポや感情のニュアンス、間……。それぞれ片手にペンを持ち、お互いが紙に言葉を書き込んでいくありようは、まさに「書く即興対話」。打ち合わせ後に残るメモも、手書きの文字による対話の軌跡がまた、いい！

話のなかで齋藤さんが「『迂回路』って、今はどうなふうにとらえてますか？ 立ち上げのときと、今、ちがいはありますか？」と尋ねられたところから、ぐっと話が深まってきました。容易にマニュアル化できないような「もやもや」した思いや場のありよう、そのユニークな個性と、個性性を育む土壌のなかにある、共通性。昨年出会ってきた人々や場を一つひとつ思い浮かべながら、それらを切り／結ぶ糸をゆっくりとたぐっていきたいと思いました。

二つ目は、NPO法人の年次総会。特定非営利活動法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所は、6月19日で、法人設立1周年を迎えます！そこで、理事の皆さまに事務所へお越しいただき、法人の年次総会を開催しました。理事の方々からは、diver-sionのこれまでと今後について、様々な質問やコメント、ご提案をいただき、充実した時間になりました。おだやかな語り口で的確な助言をくださる姿は、心強い「賢者」さながら。

ここでも話題になったのは、「迂回路」という言葉で、どんなことをしてきたのか？ これからしていきたいのか？ という問い。たんに何かの現場を調査して報告するような「研究」ではなく、たんに誰かの表現を作品として展示するような「アート」でもない、研究という枠組みを用いることで、出会うことのない人たちが出会う場をつくる、いわば表現活動としての「対話」の試み……。どこへ向かうのかかわからない旅ですが、とにかく進んで、いろんな人と探っていきたいです。

というわけで、1年という月日が巡り、あらためてスタート地点に立って思う、「対話」の可能性と境界。今週、6月18日(木)のもやもやフィールドワーク報告と対話編・第7回は、「対話は可能か？」がテーマです。ぜひお越しください。

---

## 未来のコミュニケーションに思いを馳せる：UDトークに関する打ち合わせ

2015年07月30日(石橋)

今日も暑いですね…！みなさま、いかがお過ごしでしょうか。さて、突然ですが、次の写真をご覧ください。



SF映画に出てくるような、近未来感のあるメガネ。また、スマホに向かうようにして、何やら喋っている方がいます。実はこれ、事務所にて、シャムロック・レコード株式会社代表取締役の青木秀仁さんと打ち合わせを行った際の一幕です。青木さんが開発されているUDトークは、コミュニケーション支援アプリ。音声認識の技術を応用して、会話やミーティングなどの音声を文字化し、複数の端末で共有できるというものです。私も実際に試してみたのですが、これがなかなかの精度。誤変換や誤認

識などがあっても手動ですぐに直せるので、喋っている言葉がかなり正確に文字化されます。実際に使用している様子は、youtubeにアップされている動画でご覧いただけます。また、最近は新しい機能も追加されつつあるとのこと。前掲の写真のメガネには、実はUDトークの画面が写っていて、喋っている相手の顔を見ながらその文字が見えるというシステム。

他にも、多言語に対応した自動翻訳機能も搭載されているとのことでした。

このUDトークは、9月開催のフォーラム「対話は可能か？」で使用される予定です。

具体的には、9/5(土)のプログラム①トークセッション「共に生きるということ」、プログラム②ライブ「Living Together×東京迂回路研究」、9/6(日)のプログラム④シンポジウム「対話は可能か？」の3プログラムで使用できるよう、現在準備を進めているところです。技術開発によって私たちのコミュニケーションのあり方はめまぐるしく変容していますが、このUDトークも、様々なコミュニケーションの可能性を秘めているなあ、と感じました。

聴覚障害のある人のコミュニケーションツールとしてももちろん、国際会議の翻訳字幕として、会議の議事録として、または大学の講義の補助として(もっと早く知っていればよかった!)……。もっと日常的に用いられることになれば、私たちのコミュニケーションのあり方そのものも変わっていくかもしれません。

そしてそれは、人々の「多様性」とそのあいだに横たわる「境界」のあり方、またそれに関わる「対話」と「表現」のあり方にも深く関わってきます。このような、技術の革新によって私たちの「多様性」と「境界」のあり方が変容しうる、という事象についても、今後きちんと目を向けていきたいと思った次第です。フォーラムでUDトークがどのように活躍するのか、ぜひ楽しみに！

---

## ふわっともやもや：「出張ふわカフェin 東京迂回路研究」の打ち合わせ

2015年08月11日(三宅)

8月も、はや2週目。フォーラム「対話は可能か？」まで、気づけば、あと1か月！広報、ゲストの方々との打ち合わせ、会場下見と、準備に大わらわしています。

先日は、「出張ふわカフェin 東京迂回路研究」の打ち合わせに行ってきました。「ふわカフェ」は、国際基督教大学ジェンダー研究センター(CGS)が主催する、ジェンダーやセクシュアリティについて、みんなでふわっとおしゃべりする場。5月に、もやもやフィールドワーク調査編でCGSへ伺ったのをきっかけに、今回の出張版が実現することとなりました。テーマは「カミングアウト」。打ち合わせの主な内容は、いつもと異なるセッティングで「ふわカフェ」を開催するにあたり、参加者の方々に安心して居心地よく参加していただける場をつくるにはどうすればよいか、について。

「ふわカフェ」では、安心して対話できる場づくりのために、様々な工夫をされています。グランドルールを設けているのも、その一つ。「今日の話は、ここだけの話」、「話したくないことは話さない」といった、その場に関わるうえでの「お約束」を参加者全員で共有することで、普段は話しづらいことも安心して話せる場を確保しているのです。また、自分が呼ばれたい名前で参加することや、飲み物やお菓子をつまみながら、ふんわりとおしゃべりすることも、重要な要素の一つです。



一方、今回の会場である芝の家は、地域にひらかれたスペースとして運営しておられる場。ちゃぶ台を囲んで和気あいあいと過ごす雰囲気を活かしつつ、安心して参加できる場にするために、念入りに打ち合わせしました。進行の加藤さんと真央さんが醸し出す雰囲気は、「居心地のよい場」づくりに欠かせない繊細な気配りと、キュートで気さくな語り口とが相まって、とても魅力的。当日どんな場が生まれるのか、今からとても楽しみです！

---

## J-WAVEに出演しました！

2015年08月31日(石橋)

こんにちは。インターンスタッフの

石橋です。去る8月22日(土)、J-WAVE「RADIO DONUTS」内のコーナー「Arts Council Tokyo Creative File」に、長津と井尻が出演し、フォーラム「対話は可能か？」のご紹介をさせていただきました。聴いていただいたみなさま、ありがとうございました！普段なかなか行く機会のない、六本木ヒルズに構えるJ-WAVEのスタジオでの緊張の体験でした。

研究員が六本木に何うのは、実は3度目になります。1度目は、昨年度のプログラム紹介で同番組に出演したとき。そして2度目は、今年、代表の長津が六本木ヒルズで毎月開催されているHills Breakfastに登壇したときです。いずれも、わかりにくいと言われがちな私たちの活動について、どのように説明するか考えさせられる機会となりました。私たちの活動と「近い領域」である福祉や芸術の分野の方々に説明をするときは、また違った意識が必要とされてきます。どのような言葉を選び、どのような順序で説明すれば、想定される相手に届くプレゼンテーションになるのか。このことは、「近い領域」とされている方々に説明をするときにも、すでに必要とされていることなのかもしれません。

いつも定型の説明をしていると、相手との微妙な認識の差異により、すれ違いが起こってしまう可能性も高くなります。常に相手の受け取り方を想定しつつ、いかに丁寧に、かつ即興的に、言葉を紡いでいけるか。説明が難しい活動であるぶん、活動紹介の時点から、「対話は可能か？」

というテーマについて常に意識しておかなければならないな、と思った次第です。

---

## きりこプロジェクトに思うこと

2015年10月26日(井尻)

今週の週報は、プロジェクト進行状況から少し離れて、1冊の本、そこに収められた文章について。『土に着く』というタイトルの本がある。当時関わっていた仕事の参考になるから、と、ぼん、と渡された本だった。以来、折にふれ、ページをめくる一冊となった。そこに収められている小文『「きりこ」と彼女たち——土着という希望』は、吉川由美さんが2010年に南三陸町で行った「きりこ通り」プロジェクトについて綴ったものだ。

「きりこ」とは南三陸に伝わる、社社の神職がつくる神棚に飾る切り紙のことだ。「きりこ通り」プロジェクトでは、そのモチーフを、今を生きる町の人々の物語にもとめ描き出す。インタビュアーとなったのは、町に暮らす女性たち10名あまり。よその町や都会から嫁いできた人も多かった。彼女たちは一夏をかけ、町の人の話を聞き、その人生をきりこ1枚1枚に切り出し、通りを彩った。それは予想以上に多くの変化をもたらしたという。

社社の宮司さん、インタビューを受けたお店の主人、年配の女性たち。人々の関わりは、笑顔や、見回りや、差し入れなどにかたちを変え、現れ出した。町の人は、通りを歩き、軒



先を飾るきりこに、そこで暮らす一人一人が積み重ねてきた時間、その生の営みを発見した。ただの紙が、関わり合いにより、その人の生を伝えるものとなったのだ。そのことがじわりと胸をうつ。何がそれを可能にしたのか。吉川さんは、次のように言う。

「きりこ通り」プロジェクトに関わった女性たちは、彼らのように場に根ざすことを知らず、人と関われないむなしさを味わっていた。だからこそ、この町で生業一筋に生きてきた町の人たちの姿は新鮮で、尊敬に価するものに思えた。コミュニケーションがお世辞にも上手とはいえない彼女たちが、土着に疲れ、語ることさえ諦めていた人たちから再びことばを引き出すことができたのは、彼女たちの純粹な感動が町の人たちに伝わったからだと思う。聴く人がいるとき、はじめてなされる語りがある。

綴られたエピソードに、私も、お蕎麦屋さんの、自転車屋さんの、1日を思う。なんてことはないと言われそうな、ただの1日。でも、なんでもないように思えることなかに、なんでもないことなんて一つもないと思う。

吉川さんは言う。「人と関わり合う

情熱や寛容、小さなコミュニティの中で人を幸せにしようとする実直さ、そんな生き方の価値を、彼女たちとのささやかな交流と「きりこ」という土着の日をまとった祝祭の形が、見出させたのではなからうか。私がこのプロジェクトに惹かれる理由、そして今回のフォーラム／トークセッションに、吉川さんにぜひご登壇いただきたいと思った理由はここにある。一人ひとりの生き方に柔らかな視線が注がれること。見えていなかったものが見えるようになること。他の人に伝えられ、受け止められること。それらが、声高に叫ばれることなく、しかし確かに起こっていくこと。共に生きるとは、そういうことなのではないかと思う。

どの国にも、どの街にも、そこに生きる人、一人ひとりの生があるということに気づくこと。そのどれもが偉大で、尊いと本当に思うこと。そうしたとき、はじめて、同じ生き方を強いるのではない、しかし共に生きるというあり方がありえると感じられるように思うのだ。そのような場をつくることの意義は大きい。そして……「(本文は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震以前に執筆されました)」という最後の一文。何度目にしても、胸がつまる。数ではない、一人ひとりの命に、手を合わせたい。

吉川さんは、震災後、南三陸町できりこの絵柄を「きりこボード」にし、家の跡地に、海に向かって掲げるといふプロジェクトを行った——海にいる人にも、メッセージを伝えるために。忘れていないよと知らせるために。そして現在も毎夏、みんなで紙のき

りを切り出すワークショップを行っている。そこでは、一人ひとりの思い出が語られ、参加者は泣き笑いしながら、手を動かしているという。一人ひとりの生き方が、ただそれとして価値あるものとして現れ、他の人に伝えられ、受け止められる場。そうした場が小さく、確かに、あちこちに現れるようになったらいいのと思う。

そうした「共に生きる」ということに真摯に向き合う小さな実践、その一つひとつが「対話は可能か」という問いへの挑戦のように私には思える。そして、私にとって、東京迂回路研究はまちのそこそこにあるだろう、そうした挑戦にささやかな光を当て、その姿を浮かび上がらせる試みとしてもあるのだ。

## 東京迂回路研究の話を、いろいろなところから、ということ。

2015年11月26日(長津)

ぐっと寒くなりましたね。地元の札幌では大雪が降ったとのこと、案じています。

このごろのdiver-sionは、一年を振り返りつつ、次年度に向けての構想も練り始めています。

今年もあと1か月ちょっと。代表の私としては、本当にこの1年で、いろいろなところに出させていただきました。

この写真は1月17日の「東京迂回路会議」。この頃はまだジャーナルも完成していないし、ソトコトにも掲載されていなかった……と思うと、改めてこの1年の展開の早さに驚きます。



今年は、事業でのプログラム以外では、こんなところで東京迂回路研究やその周辺のお話をさせていただきました。

- 取手市福祉交流センター | 取手アートプロジェクト(茨城県取手市 | 3月29日)
  - 六本木ヒルズ | Hills Breakfast(東京都港区 | 5月21日)
  - 障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ | ひとインれじでんず(静岡県浜松市 | 6月20日・21日)
  - 慶應義塾大学文学部 | ゲスト講義「アート・マネジメント」(東京都港区 | 6月26日)
  - スナック九州男 | Living Togetherのど自慢vol.38(東京都新宿区 | 7月5日)
  - 東日本国際大学福祉環境学部 | ゲスト講義(福島県いわき市 | 7月9日)
  - 柏の葉アーバンデザインセンター | UDCKまちづくりスクール(千葉県柏市 | 7月11日)
  - J-wave | RADIO DONUTS(8月29日)
  - とびらプロジェクト | ゲスト講師「アクセス実践講座」(東京都台東区 | 9月27日)
  - ご近所ラボ新橋 | 24時間トークカフェ上田(東京都港区 | 10月3日)
  - 豊島区役所 | フェスティバル/トークショーイベント(東京都豊島区 | 10月30日)
- などなど。

(ほかにも登壇したところはあるのですが、東京迂回路研究のお話をしていないところは除いています。いずれにせよ本当にいろいろお引きいただき感謝、感謝です)

東京迂回路研究について概略だけお話しさせていただいたところもあれば、これからのことについて有益なアドバイスをいただけたところもありました。いずれにせよ、活動を発信することに少しづつ力を入れてきた今年としては、団体の活動に対する認知が少しずつ広がってきつつあるのはありがたいことだなあと感じています。

「多様性」「境界」「対話」「表現」、そして「迂回路」。なにかと抽象度が高く、専門性の高いプロジェクトのように見えがちですが、実はとても私たちに身近なところで起こっている出来事を扱っているんだよなど、いろいろな方々とお話をすることで、気づかされることばかりです。

社会のなかで生き抜くための技法としての“迂回路”を探すプロジェクトということのあり方そのもの、表現ということのあり方そのもの、そして、研究ということのあり方そのもの、様々な人々との関わりを通じて変容させていっている、と改めて思い返しているところです。

12月5日(日)には、ぼくが青春時代？を過ごした柏市で、少しだけお話をさせていただく予定です。路上ライブばかりやっていたあの町で、エラそうにしゃべること自体、どこか気恥ずかしい思いですが、きっとここからまた新しい展開が開けるのだろうなあとと思っています。

障害者週間にあわせたイベントで、「アートでつなぐ！人・もの・場づく

り」というイベントです。東京藝術大学特任助教の伊藤達矢先生(これまで10年来お世話になっている方です……)の基調講演のあと、長津は先日、柏の福祉関係者のみなさんと行ったワークショップの様子を報告する予定です。

## 今年のこと、来年のこと

2015年12月28日(井尻)

2015年も残りわずかとなりました。振り返ると、今年も随分たくさんの方々にご協力いただきながら、活動してきたのだなあと思います。

中心的事業である「東京迂回路研究」では、「もやもやフィールドワーク調査編・報告と対話編・分析編」、そして、3日間にわたるフォーラム「対話は可能か？」を実施しました。特にフォーラムでは、これまで「東京迂回路研究」に関心を持ってくださり、数々のイベントに参加くださった方々が出演者として、また運営スタッフ、ボランティアスタッフとしてご協力くださいました。こうした事業において、志を同じくして活動を展開する方々と出会い、また一緒に活動していくこと、そうした方々と一緒に進められるような活動のあり方をつくっていくことは、重要なことだと考えています。

会場でも、たくさんのお会いがありました。そしてその出会いが、イベントに発展した、ということも。

フォーラムトークセッションゲストの荒木順子さんと、参加者の認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)のみなさんの出会いから、荒木さんが代表を務め



る community center akta が、レッツ主催の「はじめまして。わたしも佐藤です」というロードムービー製作プロジェクトの上映会、トークイベントの会場になったのです！そのチラシには、下記のような文章が掲載されていました。

「10月10日(土)

新宿二丁目の community center akta さんでトークイベントと、ロードムービーの上映会を行います。誰かのための居場所づくりを行ってきた akta さんとレッツ。

はじめまして、なんですけど、昔からの仲間だったような気がします。対象も場所も違うけど、社会や人、まちに対して思うことが似ているのかもしれない。見に来るだけでもありがたいのですが、どうぞ発言してください。

和気あいあいとソーシャル・インクルージョンをやってみる。

そんな場にできたらと思います。」事業をとおし、人と人が出会い、また新たな場をひらいていく。

そしてその場が、新たな「生きるありよう」をつくることにつながっていく。それは私たちがずっと志してきた、ゼロから何かをつくりあげるのではなく、すでにあるのに、目にとめられていない「生きるありよう」をすくいあげ、「すでにここにあるものは、こんなふうで、ここがこんなに面白いんですよ、こんな魅力があるんですよ」と提示していくよう

な、その価値をひろげていくという意味でのつくる行為のように思います。

こうした、「生きるありよう」をめぐる行為が、「東京迂回路研究」をきっかけに生まれていくこと。これも私たちにとって、大きな成果の一つだと思っています。

さて、冬休み。研究所メンバーは年度末に発行するジャーナルの執筆作業にはいっています。3月にはみなさまのお手元にお届けできる予定ですので、楽しみに。

2014年に設立したNPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所も、来年で3年目を迎えます。「東京迂回路研究」も、3年目。2016年も、こつこつと、誠実に事業を展開していきます。



## 多様性と境界に関する対話と表現の研究所 研究員プロフィール

長津 結一郎 ながつ ゆういちろう

代表理事

札幌西高等学校を経て東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業、同大学院音楽研究科音楽文化分野芸術環境創造専攻博士後期課程修了。博士(学術・東京藝術大学)。在学中はアートマネジメントを専攻し、取手アートプロジェクト、NPO法人エイブル・アート・ジャパンなどでインターンとして活動。エイブルアート・オンステージ「コラボシアター・フェスティバル」制作、日本学術振興会特別研究員(DC1)、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教育研究助手等を経て2014年より現職。東京家政大学人文学部・家政学部非常勤講師(共生社会を生きる:インクルージョン)、慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所研究員(港区芝地区総合支所「ご近所イノベーション学校」の運営)、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展事務局のほか、企画運営、調査研究、執筆なども行っている。日本アートマネジメント学会関東部会幹事。障害者の表現活動をはじめとした社会包摂的な芸術活動を主たる研究対象としており、異なる立場や背景をもつ人々がどのように協働することができるのか、研究/実践の双方からのアプローチを試みている。論文に『障害者による芸術表現活動と「共犯性」』(東京藝術大学提出博士学位論文、2013)、『障害者の表現活動についての一考察——マイノリマジョリテ・トラベルの活動から分析する「エイブル・アート」』、『アートマネジメント研究第10号』(美術出版社、2009年)など、共編書に『アートプロジェクト:芸術と共創する社会』(水曜社、2014)などがある。雑誌『ソトコト』2015年5月号巻頭にインタビュー掲載。2008年アカンサス音楽賞受賞、第10回ロスデザイン大賞最終審査候補。

井尻 貴子 いじり たかこ

事務局長

文化学院高等課程卒業、早稲田大学第一文学部(美術史)卒業。視覚に障害のある人とのことばによる美術鑑賞活動との出会ったことからNPO法人エイブル・アート・ジャパンのスタッフとなる。その後、そうした活動の現場で起こっていること、そこでの人々の経験について、より深く考えたいという思いから、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(臨床哲学)入学。修了後、一般財団法人たんぼの家スタッフ、東京文化発信プロジェクト室東京アートポイント計画プログラムオフィサー(公益財団法人東京都歴史文化財団)等を経て2014年より現職。平行して、哲学、アートに関するプロジェクトの企画・運営・編集・執筆などに携わっている。また、大学院在学中より、哲学カフェと呼ばれる、街中での哲学対話の場づくりに取り組み、現在もいろいろな場で哲学対話やこどもの哲学(P4C)を実践している。NPO法人こども哲学おとな哲学アータコダ理事。一貫した関心ごとは、多様な人が共にある場、そこに立ち現れる表現。主な論文に「話すことと見ること——視覚に障害のある人とのことばによる美術鑑賞活動について」、『アートミーツケア学会誌 第3号』収録(生活書院、2011)、共著書に『哲学カフェのつくりかた』(大阪大学出版会、2014)、小学生向けの『このころのナゾとき(仮)』(成美堂出版、2016)、共編書に『URP GCOE DOCUMENT 12 社会的包摂と舞台表現 第3回アート&アクセスシンポジウム・公演』(大阪市立大学都市研究プラザ、2012)、『アートミーツケア叢書1 病院のアート』(生活書院、2014)、『アートミーツケア叢書2 生と死をつなぐケアとアート』(生活書院、2015)などがある。

三宅 博子 みやけ ひろこ

スタッフ

大阪音楽大学音楽学部器楽科クラリネット専攻卒業後、身体障害者施設および重症心身障害児施設で介護職として勤務。ケアの現場に飛び込み、人が生きていくことの本質や矛盾を目の当たりにする。同時期より、生きることと音楽が直接関わり合う領域としての音楽療法に興味を持つ。日本音楽療法学会認定音楽療法士の資格取得後、音楽療法士として病や障害のある人と関わるものの、現場で起こっていることを「治療」の観点からのみ捉えることや、治療する/される関係の非対称性などに疑問を感じ、神戸大学大学院に入学。音楽療法に内在する権力性と、そこからはみ出る生のありようについて研究する。2010年、学位論文「音楽療法の政治性に関する研究——〈制度〉と〈生〉の間から」で、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了(学術博士)。修了後、慶應義塾大学グローバルCOE「論理と感性の先端的教育研究拠点」非常勤研究員、江戸川大学総合福祉専門学校非常勤講師等を経て、2014年より現職。また、「多様な人々が共に在る音楽活動」を主なテーマとし、障害者施設やコミュニティスペースなどで実践・研究に取り組む。「芝の家・音あそび実験室」共同主宰。明治学院大学文学部芸術学科非常勤講師(臨床音楽学)。主な論文に、「障害のある人の表現に関する生政治的視点:音楽療法の事例から」(Voices: a World Forum for Music Therapy, Vol.14, No.3, 2014)、「〈表現〉を支える環境をつくる:副腎白質ジストロフィーを患う少年なおやの事例」『ケースから学ぶ音楽療法(仮)』収録(岩崎学術出版、近刊予定)。共訳書に、『音楽のカルチュラル・スタディーズ』(アルテスパブリッシング、2011)。

石橋 鼓太郎 いしばし ことろう

インターンスタッフ

神奈川県立湘南高等学校を経て、2012年に東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科に進学し、アートマネジメントを専攻。多様な人々が「参加」することを目的とするような音楽のあり方に興味を持ち、同年より、足立区千住地域を中心に展開するアートプロジェクト「アートアクセスあだち 音まち千住の緑」の一企画「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」の運営を担当する。2014年には、その一環として、1010人の多様な演奏者が集まる参加型コンサート「千住の1010人」の運営を行った。また、2013年12月には、民族音楽学者・小泉文夫の没後30年企画「Fethno」のコンサートディレクターとして、現在の日本における世界中の「民族音楽」の受容のあり方を提示するようなコンサートを実施した。研究では、多様な人々が集う(主に音楽の)場や、そこでの時間的・空間的に曖昧で断片的な他者との相互行為のありようを、いかに記述し価値化することができるかという問題意識のもと、様々な領域を横断しながら試行錯誤を重ねている。2015年、卒業論文として『〈共に在る〉音楽——参加型音楽プロジェクト「千住の1010人」の分析から——』を提出し、2016年アカンサス音楽賞受賞。2016年度より、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻に進学予定。



# TOKYO DIVERSION RESEARCH

## Statements

Recently the term diversity is gaining further interests in Japanese society. The reason behind this is the fact that individuality in society is being redefined and attracting new attention. At the same time distinctive differences are notified and occasional borders are added.

Yet in reality the division lines that exists between individuals are fluid, multi-layered and multi-tiered. Even so the division line will not be easily crossed or deleted. If that should be the case what is required for the struggling individual paralyzed by separation and division is to explore methods of survival through shifting conventions, walking off beaten paths and taking diversion routes.

Tokyo Diversion Research aims to apply research, study report and dialogue for problems concerning social diversity and division, excavating diversion methods for the sake of survival.

## Purposes

Finding, connecting, and creating new techniques for surviving the challenges facing *diversity* and *division*, through dialogue and expression.

Revealing questions through dialogue, formulating fluent networks between individual activities and creating platforms to share correspondent ideas.

Implicating new insights of society through these procedures and generating a full, rich and integrative culture.

## Projects

### 1. Survey Work

#### *Moyamoya Fieldwork*

#### *Research Session, Report & Dialogue and Analytical Session*

Through our work we visited various medical services, welfare facilities, related organizations and care services throughout the Tokyo metropolitan area. The project consists

of three parts. The first is the *Research Session* which conducts participant observations through activities and hearings from concerned personnel. Secondly the research is shared with the participants through opinions and viewpoints, regarding discussions during *Report & Dialogue*. For the third part we invited guest speakers to observe these matters under theoretical and methodological aspects, deepening our viewpoints during the *Analytical Session*. The project is intended to bring a cycle to the various elements of research, reportage, dialogue and analysis, attempting to illustrate the different aspects of the field.

### 2. Research Development *Forum Is Dialogue Possible?*

How is it possible for individuals with different walks of life to coexist? What kind of dialogue will be needed?

We invited care workers, poets, academic researchers as guests to discuss this theme with neighborhood grannies through round-table talk sessions, symposiums and live performances in a 3-day forum. Our aim is to experience common ground within the existing framework of contemporary society.

Date September 4th ~ 6th 2015  
Location Keio University, Shibanoie,  
SHIBAURA HOUSE

### 3. JOURNAL Tokyo Diversion Research 2

This journal assembles reports about the year's activities and discussions. For the 2nd issue we give a multi-faced review of activities we came across through the project and verify our research. We also look back at the forum *Is Dialogue Possible?* and provide research notes on the *Moyamoya Fieldwork* project. The JOURNAL specifies the footsteps of Tokyo Diversion Research which entered its 2nd year and takes a close look at its forthcoming progression.

Table of Contents

## Tokyo Diversion Research

Harumichi Saito

## Introduction

### Views

#### Research Design:

#### Searching and Connecting Methods for Diversion Paths and Redefining Interactive Research Practices

Hiroko Miyake, Yuichiro Nagatsu,  
Takako Ijiri and Kotaro Ishibashi

### 1. Forum *Is Dialogue Possible?*

### Views

#### Experiencing Common Ground and Taking a Deeper Look: A Verification of the Forum, *Is Dialogue Possible?*

Yuichiro Nagatsu, Hiroko Miyake,  
Takako Ijiri and Kotaro Ishibashi

### Reports

#### 1. Eve of the Festival

##### *Delusions and Hallucinations* *Playing Cards Tournament*

##### A: The Cause of Delusion

Yuichiro Nagatsu

##### B: Standing at the Door of Compassion

Makoto Higashino

#### 2. Talk Session *Living Together*

##### A: Staying Different but Living Together

Takako Ijiri

##### B: Division and Living Together

Yukari Iwata

#### 3. Live *Living Together*

##### x *Tokyo Diversion Research*

##### A: On Listening to Words

Kotaro Ishibashi

##### B: Loving the Division

Arisa Iwakawa

### 4. Symposium *Is Dialogue Possible?*

#### A: Words Beginning

#### Where Language Ends

Hiroko Miyake

#### B: Reflections about Dialogues and Thoughts on Division Lines

Rii Numata

### 2. *Moyamoya Fieldwork*

#### *Research Session, Report & Dialogue* and *Analytical Session*

### Views

#### Taking a Look Back at *Moyamoya Fieldwork*

Hiroko Miyake, Takako Ijiri, Yuichiro Nagatsu,  
Kotaro Ishibashi

### Field Notes

#### *The 12th Tajisha-Kenkyu*

#### *National Exchange Convention /* *The 23rd Bethel Festival in Urakawa*

Kotaro Ishibashi

#### *Tambo de Musical*

Hiroko Miyake

#### Center for Gender Studies,

#### International Christian University: *Fuwa Cafe*

Yuichiro Nagatsu

#### *Tateishi Disco Afternoon*

Kotaro Ishibashi

### Epilogue

### Back-of-the-Book Documents:

#### *Tokyo Diversion Research 2015*

#### Implementation Projects

### Addendum:

#### Diaries from the Research Lab

## TOKYO DIVERSION RESEARCH

### (English Section)

## 東京迂回路研究

### 主催

東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、  
特定非営利活動法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所

### プロジェクトメンバー

長津結一郎、井尻貴子、三宅博子、石橋鼓太郎  
(特定非営利活動法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所)  
森司、坂本有理、古屋梨奈(アーツカウンシル東京)

## JOURNAL 東京迂回路研究 2

**監修** 多様性と境界に関する対話と表現の研究所  
**執筆** 長津結一郎、井尻貴子、三宅博子、石橋鼓太郎  
**寄稿** 岩川ありさ、岩田祐佳梨、沼田里衣、東濃誠  
**編集** 井尻貴子  
**翻訳** 片桐聡  
**協力** 若生帆波  
**撮影** 齋藤陽道(P.1～P.9)、富田了平(P.10～P.96)  
**装幀** 吉村雄大(スタジオ・プリントビルゴラ)  
**印刷** 株式会社 シナノパブリッシングプレス

### 発行

平成28年3月  
アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28  
九段ファーストプレイス8階  
TEL:03-6256-8430 FAX:03-6256-8827  
[www.artscouncil-tokyo.jp](http://www.artscouncil-tokyo.jp)

### 本書に関するお問合せ先

特定非営利活動法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所  
〒105-0014 東京都港区芝3-30-1 山岸ビル2F  
TEL:070-6437-3599 E-mail:[info@diver-sion.org](mailto:info@diver-sion.org)  
[www.diver-sion.org](http://www.diver-sion.org)

© 特定非営利活動法人 多様性と境界に関する対話と表現の研究所  
© アーツカウンシル東京

## 「東京迂回路研究」とは

東京アートポイント計画の一環として平成26年度より実施。社会における人々の「多様性」と「境界」に関する諸問題に対し、調査・研究・対話を通じて“生き抜くための技法”としての「迂回路」を探求します。障害、ケア、労働、住処、ジェンダーやセクシュアリティ、国籍——様々な背景、その境界線を揺れ動く人々とアートの関係性を探り、ひいてはアートそのものの境界に迫ります。

[www.diver-sion.org](http://www.diver-sion.org)

## 「東京アートポイント計画」とは

地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

[www.artscouncil-tokyo.jp](http://www.artscouncil-tokyo.jp)

## 多様性と境界に関する対話と表現の研究所とは

平成26年6月設立。これまで、アート・マネジメント、臨床哲学、音楽療法といった領域から分野横断的な実践と思考を行ってきたメンバーによる研究所。

社会にある「多様性」、人々のあいだにある「境界」に注目しながら、多様な人が共にある場の対話と表現を捉え、明らかにすることを試みる事業を展開している。

所員：長津結一郎・井尻貴子・三宅博子・石橋鼓太郎

東京  
巡回  
研究



TOKYO  
METROPOLITAN  
GOVERNMENT



ARTS COUNCIL TOKYO

